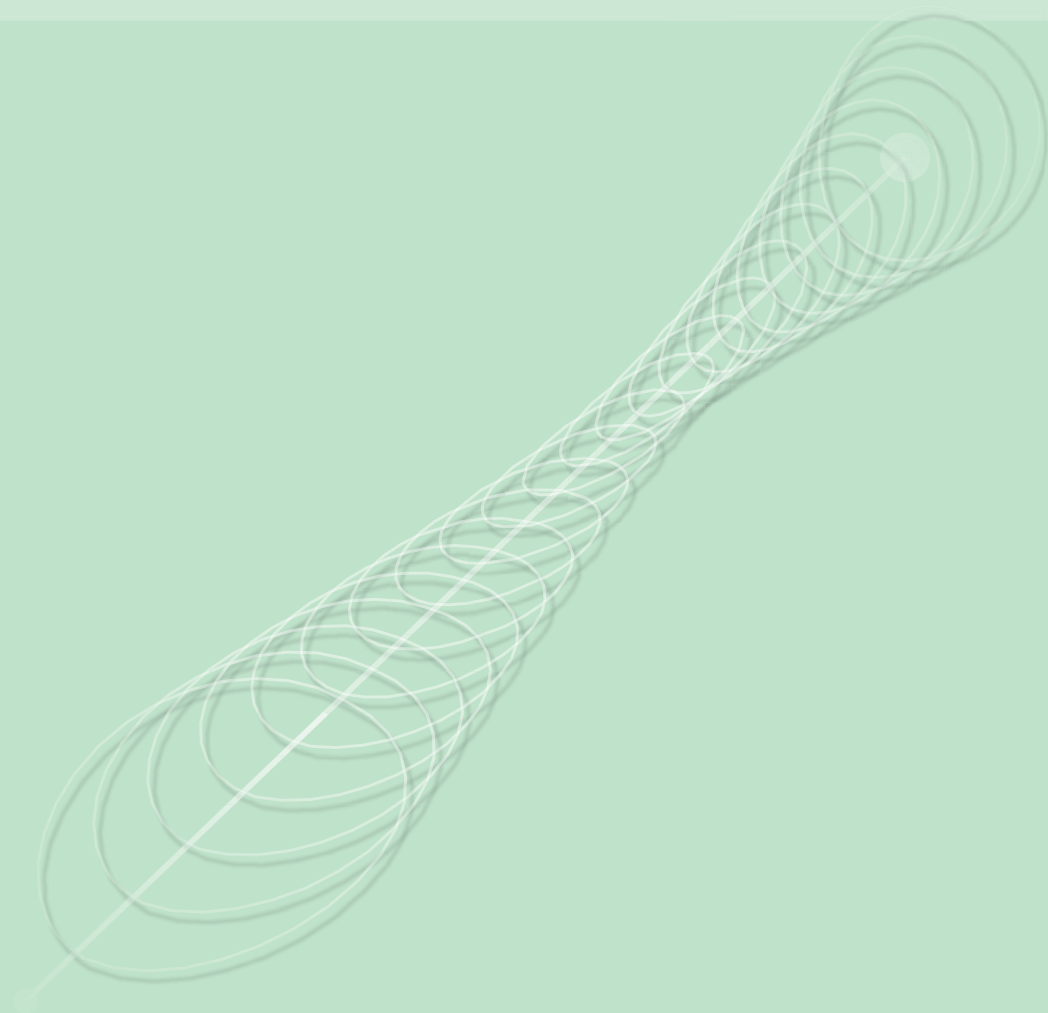


## 第3期

# 吹田市障がい者計画



平成23年(2011年)3月

吹田市

## ごあいさつ

本市では、平成 18 年（2006 年）3 月に、平成 22 年度（2010 年度）までの 5 か年を計画期間とする「第 2 期吹田市障がい者計画」を策定し、障がいのある人が、社会の一員として、住み慣れた地域で自立した生活ができるよう各種の施策を推進してまいりました。

この間、障害者自立支援法の施行により、障がい者福祉制度の大きな転換が図られましたが、利用者負担の増加や、事業所の人材不足といった課題も生じており、現政権においては同法の廃止と新たな制度の構築に向け準備が進められているところです。

また、本年 1 月には、市民、事業者、行政がそれぞれの役割と責任を果たす中で、地域の実情に応じた福祉の増進に関する施策を総合的に推進し、誰もが健康で安心して暮らせるまちづくりを進めるため、「吹田市民のくらしと健康を支える福祉基本条例」を施行いたしました。

こうした中、第 2 期障がい者計画の取組を継続、発展させながら、現状を踏まえた見直しを行い、平成 23 年度（2011 年度）から平成 27 年度（2015 年度）までを計画期間とする「第 3 期吹田市障がい者計画」を策定いたしました。本計画では、「吹田市民のくらしと健康を支える福祉基本条例」のもと、「住み慣れた地域で安心して暮らせる社会をめざして」を基本理念とし、障がいの有無にかかわらず、誰もが互いの人格と個性を尊重し支え合う共生社会の実現をめざしております。今後、本計画の着実な推進に努め、様々な施策・事業に積極的に取り組んでまいりますので、一層のご理解・ご協力を賜りますようお願い申し上げます。

結びに、本計画の策定にあたり、貴重なご意見やご提言をいただきました吹田市福祉審議会、吹田市障がい者施策推進委員会の委員の皆様をはじめ、関係機関・団体の皆様、また、アンケート調査にご協力をいただきました多くの市民の皆様に、厚くお礼を申し上げます。

平成 23 年（2011 年）3 月

吹田市長 阪口 善雄



# 目次

## 第1章 計画策定にあたって

第1節 障がい者計画の策定にあたって	1
1 国連、国、府、市の動き	1
第2節 障がい者制度改革の概要	2
1 「障害者の権利に関する条約」の内容と国の動き	2
2 「障害者自立支援法」の動向	3
第3節 計画の趣旨	3
第4節 計画の位置づけ	4
第5節 計画の期間	5

## 第2章 吹田市の障がいのある人の状況

第1節 吹田市の障がいのある人の状況について	7
1 障がいのある人の状況	7
2 アンケート調査結果と課題	17

## 第3章 施策の基本的な考え方

第1節 基本理念	33
第2節 基本目標	33
第3節 施策の体系	34
第4節 基本方向と考え方	36
I 啓発・交流の推進	36
～障がいを理由とした差別をなくし、共に生きる地域社会をめざして～	
II 育成・教育の充実	41
～障がいのある子どもたちの健やかな成長・発達をめざして～	
III 雇用・就労の支援	47
～障がいのある人の就労の場の確保と豊かな活動をめざして～	
IV 保健・医療の充実	51
～住み慣れた地域で、安心して健康に暮らすために～	
V 暮らしの充実	55
～障がいのある人が自立して豊かに暮らしていくために～	
VI 生活環境の整備	60
～暮らし続けたいと思える、住みよい環境をつくるために～	

## 第4章 計画の推進体制について

第1節 計画の推進体制	65
-------------	----

### 資料編

1 計画策定までの経過	67
2 計画関連資料	79
・ 障がい者施策の動き	79
・ 吹田市民の暮らしと健康を支える福祉基本条例	80
・ 障害者基本法	85
・ 障害者の権利に関する条約（仮訳文）	89
3 基本的な用語集	101

#### 「障がい」とひらがなで表記することについて

「障害」の「害」の字は、「害悪」「公害」等「否定的」で「負」のイメージが強く、不快に思うといった意見に配慮し、本計画では、法律等の名称や固有名詞のみを「障害」と表記しています。

# 第1章 計画策定にあたって



## 第1節 障がい者計画の策定にあたって

### 1 国連、国、府、市の動き

これまで国連においては、昭和56年（1981年）の「国際障害者年」を機に、「完全参加と平等」を目標に掲げ、その実現をめざし、昭和57年（1982年）には、「障害者に関する世界行動計画」を定め、昭和58年（1983年）からは「国連障害者の十年」の活動が展開されました。

これを受け、わが国では、昭和58年（1983年）に「障害者対策に関する長期計画」が策定され、「ノーマライゼーション」の理念を踏まえた障がい者施策を積極的に推進することとなり、その後、平成5年（1993年）には、「障害者対策に関する新長期計画」が策定されました。

そして、すべての障がいのある人が、社会を構成する一員として、あらゆる分野の活動に参加することを示した「障害者基本法」を平成5年（1993年）に制定し、保健・医療の対象であった精神障がいのある人を福祉の対象として明確に位置づけました。

その第9条に基づき、平成15年（2003年）から平成24年（2012年）までの10年を期間と定めた「障害者基本計画」が策定され、それに基づく「重点施策実施5か年計画」が策定されています。

さらに平成16年（2004年）には、障害者基本法の一部を改正し、基本的理念に障がいを理由とする差別等の禁止が明記されました。障害者基本計画の策定についても、都道府県・市町村は努力義務であったものが、義務付けられるとともに、障がいのある人の自立と社会参加を促進し、障がいのある人を取り巻く課題についての国民の理解と認識を、より一層、高めるための取組期間として「障害者週間（12月3日～9日）」が規定されました。

大阪府では、昭和58年（1983年）から「障害者対策に関する大阪府長期計画」を策定して以降、計画的に施策が推進され、平成15年（2003年）3月に「人が人間（ひと）として普通に暮らせる自立支援社会づくり」を基本理念に掲げ「第3次大阪府障がい者計画」を策定し、平成21年（2009年）3月に「第3次大阪府障がい者計画（後期計画）」を策定しています。

本市においても、障がいのある人が地域で安心して暮らせる社会の実現に向け、平成8年度（1996年度）から平成17年度（2005年度）までの10年を計画期間とした「第1期吹田市障害者計画」を策定し、その後、平成18年度（2006年度）から平成22年度（2010年度）までの5年間の「第2期吹田市障害者計画」を策定しました。

これまでの取組と課題を整理し、引き続き計画的な施策の推進を図るため「第3期吹田市障がい者計画」を策定しました。



## 第2節 障がい者制度改革の概要

### 1 「障害者の権利に関する条約」の内容と国の動き

わが国の障がい者施策は、これまでに関連する法制度が順次整備されてきましたが、平成18年（2006年）12月に国連で採択された「障害者の権利に関する条約」について、平成19年（2007年）9月に署名を行い、条約の締結に向け、国民が相互に人格と個性を尊重し支え合う「共生社会」の実現を目的に、国内法制の整備などの制度改革が進められています。

この障害者の権利に関する条約は、障がいのある人の権利及び尊厳を保護・促進するための包括的かつ総合的な国際条約であり、すべての障がいのある人によるあらゆる人権及び基本的自由の完全かつ平等な享有を促進し、保護し、及び確保すること、並びに障がいのある人の固有の尊厳の尊重を促進することを目的に「合理的配慮」や「障害を理由とする差別」などの定義が明記されています。

「合理的配慮」とは、「障害者が他の者と平等にすべての人権及び基本的自由を享有し、又は行使することを確保するための必要かつ適当な変更及び調整であって、特定の場合において必要とされるものであり、かつ、均衡を失した又は過度の負担を課さないものをいう」とされています。（第2条）

また、「障害を理由とする差別」とは、「障害を理由とするあらゆる区別、排除又は制限であって、政治的、経済的、社会的、文化的、市民的その他のあらゆる分野において、他の者と平等にすべての人権及び基本的自由を認識し、享有し、又は行使することを害し、又は妨げる目的又は効果を有するものをいう。障害を理由とする差別には、あらゆる形態の差別（合理的配慮の否定を含む。）を含む」と定義されています。（第2条）

このため、障害を理由とした差別の禁止は、合理的配慮とも密接に関連しており、障害者の権利に関する条約に規定された大きな柱です。

障がいのあるないにかかわらず、相互の個性の差異と多様性を尊重し、人格を認め合う共生社会の実現に向け、平成21年（2009年）12月に、障害者の権利に関する条約の締結に必要な国内法の整備をはじめとする制度の集中的な改革を行い、関係機関との連携や施策の総合的かつ効果的な推進を図るため、国において「障がい者制度改革推進本部」が設置され、障害者基本法の抜本改正、「障害者差別禁止法（仮称）」の制定、「障害者総合福祉法（仮称）」の制定に向け審議が行われています。

## 2 「障害者自立支援法」の動向

制度面では、平成15年（2003年）に障がい福祉施策の根幹を支えてきた「措置制度」から「支援費制度」に移行しましたが、障がいのある人のニーズの多様化や国の財政負担の増加などにより、平成18年（2006年）には、「障害者自立支援法」が施行され、障がい施策の一元化や安定的な財源の確保、支給決定の透明化、明確化、事業体系の再編などの見直しが行われましたが、「応益負担（定率負担）」制度の導入など、当初からさまざまな課題を抱えていました。

そのため、全国14地裁で71名の原告が提訴した障害者自立支援法違憲訴訟は、平成22年（2010年）1月7日に原告と国の間で和解のための「基本合意文書」が結ばれ、その中では、「速やかに応益負担制度を廃止し、遅くとも平成25年（2013年）8月までに障害者自立支援法を廃止し新たな総合的な福祉法制を実施する。そこにおいては、障害福祉施策の充実は、憲法等に基づく障害者の基本的人権の行使を支援するものであることを基本とする。」とされており、国において施策の抜本的な見直しなどが検討されることとなりました。

そして、障がい者制度改革推進本部等におけるこれまでの検討を踏まえ、障がい福祉施策を見直すまでの間、障がいのある人の地域生活を支援するため、障害者自立支援法などの関係法律が平成22年（2010年）12月に一部改正されています。

### 第3節 計画の趣旨

本市では、障害者基本法第9条第3項に基づき、障がいのある人が地域社会を構成する一員として主体的に地域活動に参加し、自立した生活を送り、安心して暮らせる社会をめざして、平成8年度（1996年度）から平成17年度（2005年度）までの10年間を計画期間とした「第1期吹田市障害者計画」を策定し、後継計画として、平成18年度（2006年度）から平成22年度（2010年度）までの5年間の「第2期吹田市障害者計画」を策定しました。

この第2期吹田市障害者計画が平成22年度（2010年度）で期間が終了となることから、障がい者施策をめぐる環境が大きく変わる中で、これまでの取組を評価し、継続、発展させるものとして「住み慣れた地域で安心して暮らせる社会をめざして」を基本理念に、施策の基本的な方向性を示した「第3期吹田市障がい者計画」を策定しました。

## 第4節 計画の位置づけ

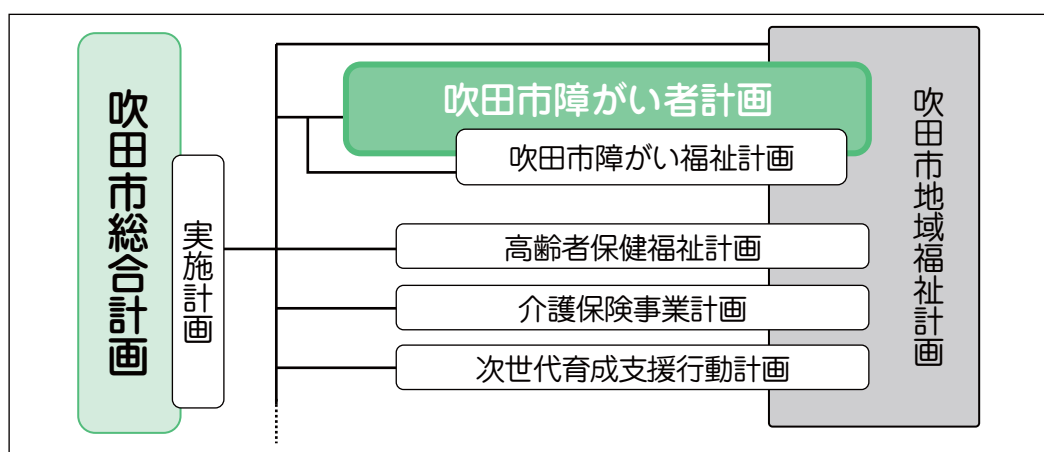
本計画は、障害者基本法第9条第3項に規定する「障害者のための施策に関する基本的な計画」である「市町村障害者計画」として策定しています。

また、吹田市民のくらしと健康を支える福祉基本条例に基づいて策定し、施策を推進する計画です。

策定にあたっては、吹田市総合計画や他の個別計画と整合性を持たせたものです。

なお、障がい者計画の中の相談支援や生活支援などの障がい福祉サービスに関しては、障害者自立支援法第88条に基づき「障がい福祉計画」を別途策定しています。

■図 1-4-1 計画の位置づけ

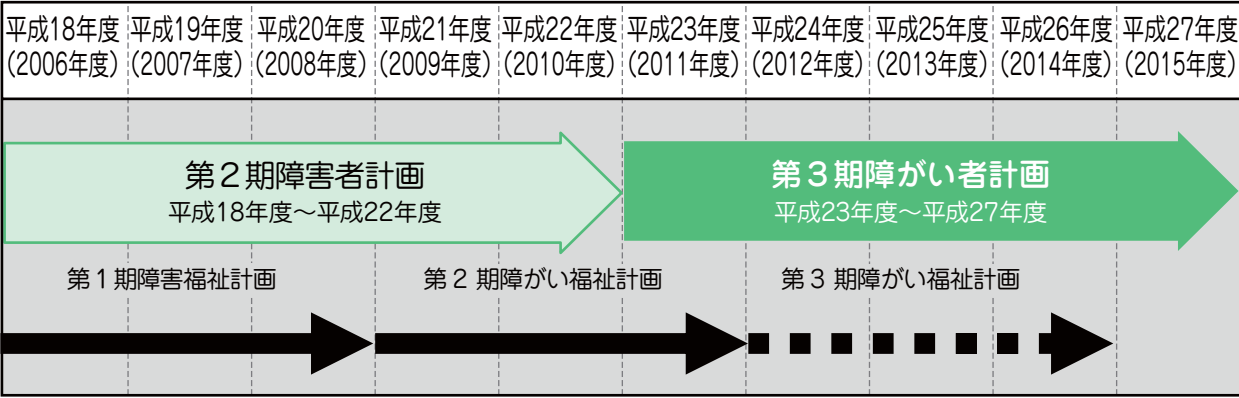


## 第5節 計画の期間

本計画は、平成23年度（2011年度）を初年度とする5か年の計画として策定しています。  
 なお、計画内容については、今後の社会情勢の変化や国における法制度の動向を踏まえ、柔軟に対応する計画とします。

◆ 平成23年度（2011年度）～平成27年度（2015年度）

■ 図 1-5-1 計画期間





## 第2章 吹田市の障がいのある人の状況



## 第1節 吹田市の障がいのある人の状況について

### 1 障がいのある人の状況

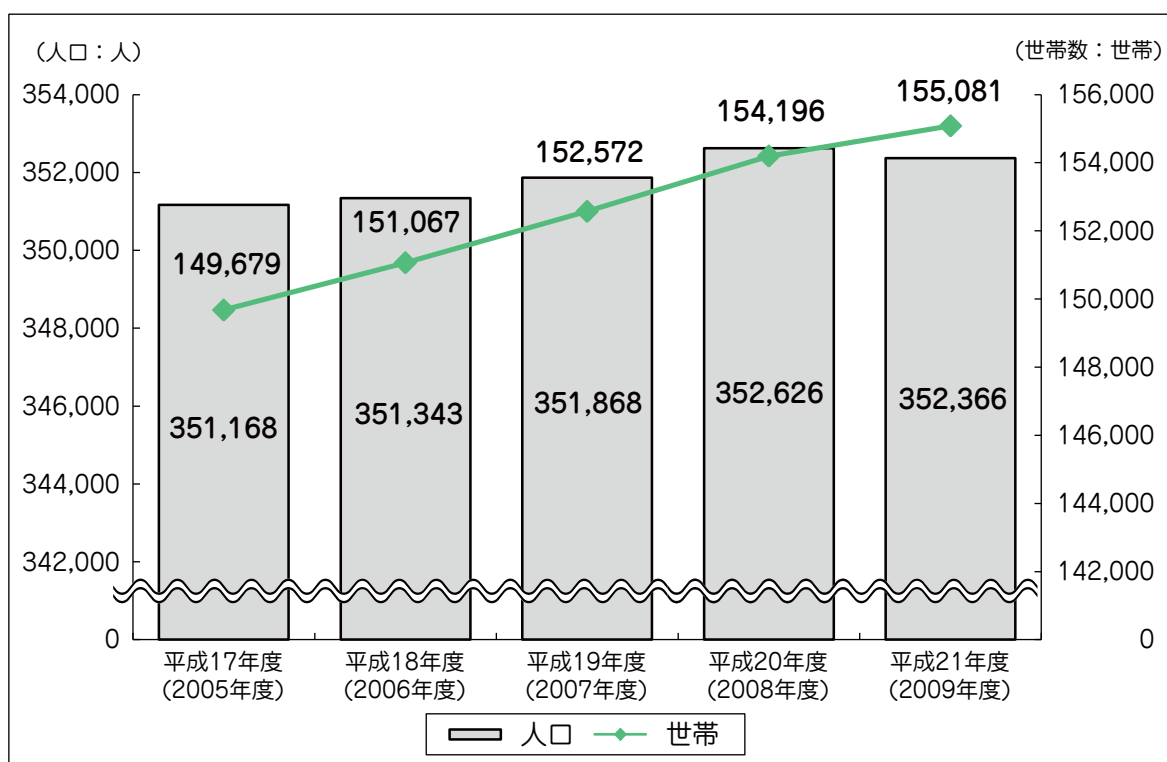
#### (1) 人口の推移

##### ① 人口と世帯数の推移

本市の人口は、平成17年（2005年）から平成21年（2009年）までの5年間は微増ないし横ばいで推移し、平成21年（2009年）9月末現在では、352,366人となっています。

一方、世帯数は増加しており、155,081世帯となっています。この5年間においては、人口は、ほぼ横ばいであるのに対し世帯数は増加していることから、1世帯当たりの人員が縮小傾向にあると言えます。

■図2-1-1 人口と世帯数の推移



資料：吹田市統計書（住民基本台帳・外国人登録人口、各年9月末日現在）



## (2) 障がい者手帳所持者の状況

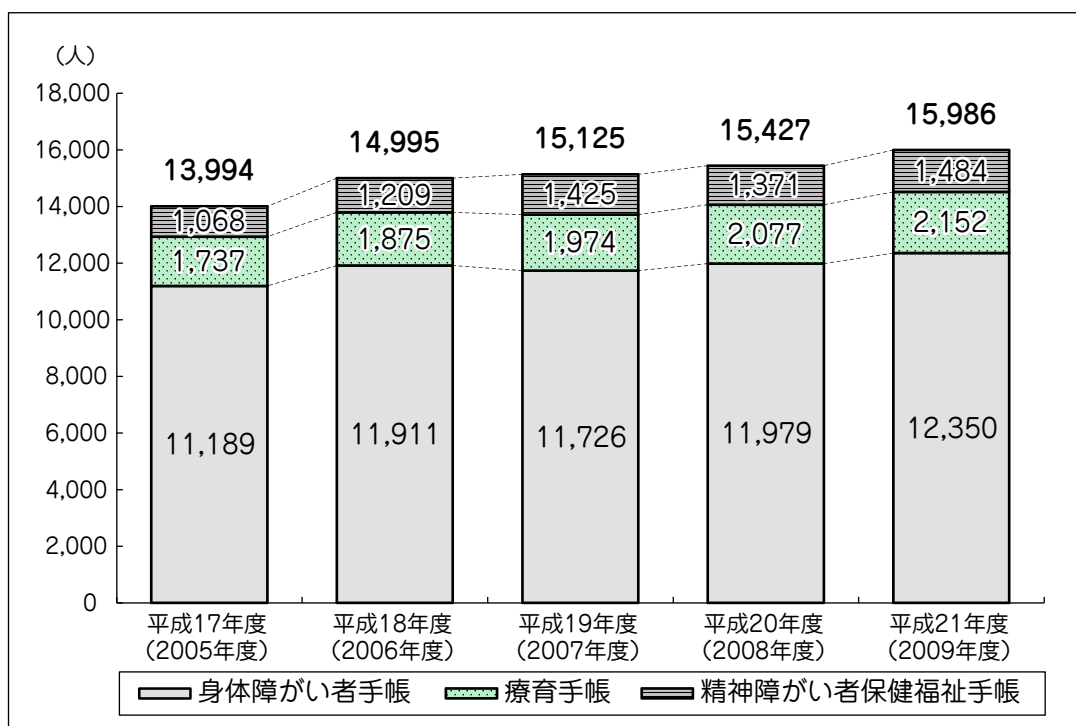
### ① 障がい種別ごとの手帳所持者の状況

本市の障がい者手帳所持者は、人口が微増ないし横ばい傾向で推移しているのに対して、身体障がい者手帳、療育手帳、精神障がい者保健福祉手帳、それぞれの所持者数が増加傾向で推移しています。

■図 2-1-2 障がい種別ごとの手帳所持者の状況

(単位：人)

	平成17年度 (2005年度)	平成18年度 (2006年度)	平成19年度 (2007年度)	平成20年度 (2008年度)	平成21年度 (2009年度)
身体障がい者手帳	11,189	11,911	11,726	11,979	12,350
療育手帳	1,737	1,875	1,974	2,077	2,152
精神障がい者保健福祉手帳	1,068	1,209	1,425	1,371	1,484
手帳所持者総数	13,994	14,995	15,125	15,427	15,986



資料：各年度末現在の手帳所持者数

## ② 障がい種別・年齢別の障がい者手帳所持者の状況

身体障がい者手帳所持者では、年齢層が高いほど手帳所持者数が多い傾向となっており、60歳以上の手帳所持者が9,369人（75.9%）となっています。

療育手帳所持者では、10歳代の手帳所持者が541人（25.1%）で最も多く、以下、20歳代が429人（19.9%）、30歳代が387人（18.0%）と続いており、10歳代～30歳代で1,357人（63.0%）となっています。

精神障がい者保健福祉手帳所持者では、30歳代の手帳所持者が320人（21.6%）、40歳代が363人（24.4%）となっており、他の年齢層に比べて手帳所持者が多くなっています。

■ 図 2-1-3 障がい種別・年齢別の障がい者手帳所持者の状況

	身体障がい者手帳		療育手帳		精神障がい者保健福祉手帳		全体	
	所持者数 (人)	割合 (%)	所持者数 (人)	割合 (%)	所持者数 (人)	割合 (%)	所持者数 (人)	割合 (%)
0～9歳	149	1.2	294	13.7	3	0.2	446	2.8
10～19歳	223	1.8	541	25.1	19	1.3	783	4.9
20～29歳	276	2.2	429	19.9	102	6.9	807	5.1
30～39歳	519	4.2	387	18.0	320	21.6	1,226	7.7
40～49歳	667	5.4	250	11.6	363	24.4	1,280	8.0
50～59歳	1,147	9.3	150	7.0	258	17.4	1,555	9.7
60～69歳	2,584	20.9	63	2.9	233	15.7	2,880	18.0
70～79歳	3,577	29.0	25	1.2	128	8.6	3,730	23.3
80歳以上	3,208	26.0	13	0.6	58	3.9	3,279	20.5
合計	12,350	100.0	2,152	100.0	1,484	100.0	15,986	100.0

資料：平成21年度（2009年度）末現在の手帳所持者数

### (3) 身体障がい者の状況

#### ① 年齢別の身体障がい者手帳所持者の推移

年齢別にみた身体障がい者手帳所持者は、18歳未満では、330人前後で横ばいに推移しているのに対し、18歳以上では、平成21年度（2009年度）には平成17年度（2005年度）と比べて1,158人増加しています。

■図 2-1-4 年齢別の身体障がい者手帳所持者の推移

(単位：人)

	平成17年度 (2005年度)	平成18年度 (2006年度)	平成19年度 (2007年度)	平成20年度 (2008年度)	平成21年度 (2009年度)
18歳未満	329	327	330	332	332
18歳以上	10,860	11,584	11,396	11,647	12,018
合計	11,189	11,911	11,726	11,979	12,350

資料：各年度末現在の手帳所持者数

#### ② 年齢別・身体障がい者手帳の等級別の手帳所持者の状況

平成21年度（2009年度）の年齢別・手帳の等級別の身体障がい者手帳所持者は、特に、60歳以上の高齢者が多く、また、1級から4級の手帳所持者が90%以上を占めています。

■図 2-1-5 身体障がい者手帳所持者の年齢別・等級別の状況

(単位：人)

	1級	2級	3級	4級	5級	6級	合計
0～9歳	59	34	28	15	4	9	149
10～19歳	91	52	38	24	9	9	223
20～29歳	107	54	47	39	19	10	276
30～39歳	167	113	78	88	41	32	519
40～49歳	199	145	77	140	62	44	667
50～59歳	341	205	169	322	66	44	1,147
60～69歳	789	435	429	706	125	100	2,584
70～79歳	949	508	715	1,104	160	141	3,577
80歳以上	874	526	597	949	121	141	3,208
計	3,576	2,072	2,178	3,387	607	530	12,350
割合(%)	29.0	16.8	17.6	27.4	4.9	4.3	100.0

資料：平成21年度（2009年度）末現在の手帳所持者数

### ③ 等級別の身体障がい者手帳所持者の状況

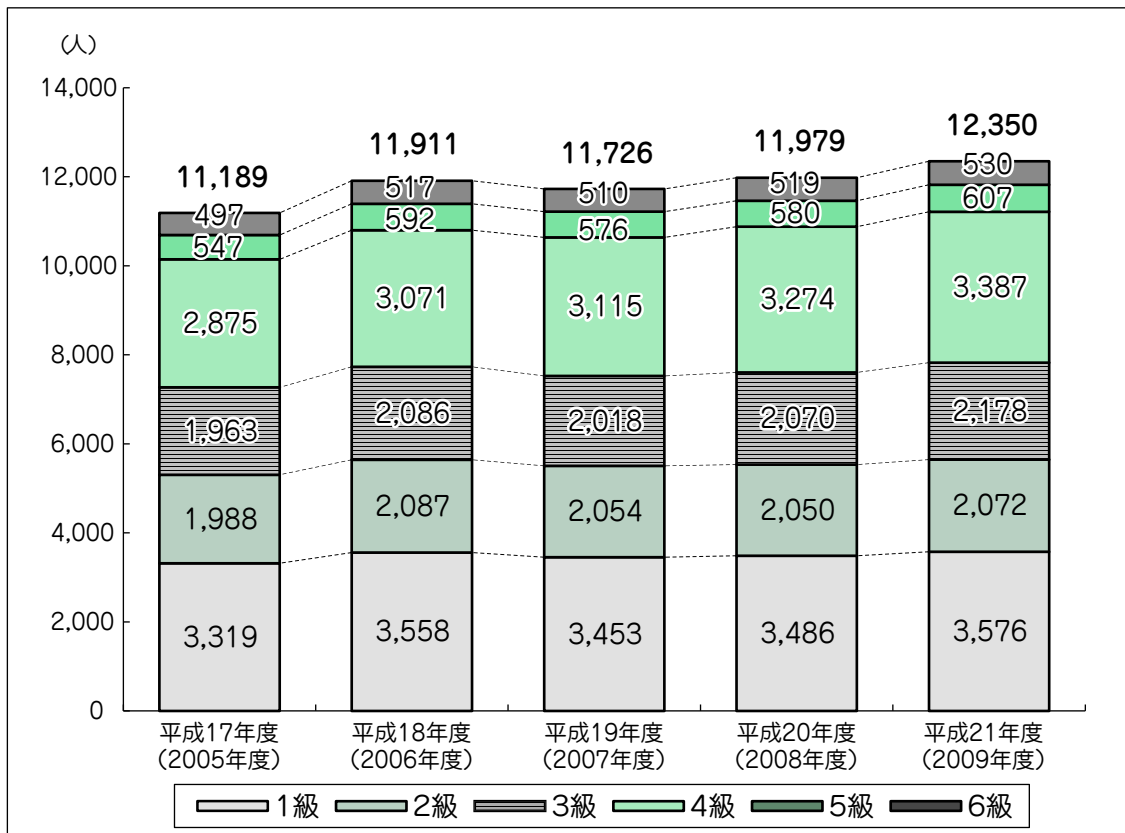
この5年間では、身体障がい者手帳所持者は増加傾向にあり、等級別にみた身体障がい者手帳所持者では、特に、1級と2級の手帳所持者数が全体の半数近くを占めており重度化の傾向にあります。

■ 図 2-1-6 等級別の身体障がい者手帳所持者の推移

(単位：人)

等級	平成17年度 (2005年度)	平成18年度 (2006年度)	平成19年度 (2007年度)	平成20年度 (2008年度)	平成21年度 (2009年度)
1級	3,319	3,558	3,453	3,486	3,576
2級	1,988	2,087	2,054	2,050	2,072
3級	1,963	2,086	2,018	2,070	2,178
4級	2,875	3,071	3,115	3,274	3,387
5級	547	592	576	580	607
6級	497	517	510	519	530
合計	11,189	11,911	11,726	11,979	12,350

※障がいの程度により、1級（重度）から6級（軽度）まで区分されます。



資料：各年度末現在の手帳所持者数

#### ④ 主たる障がいの種別の身体障がい者手帳所持者の状況

主たる障がいの種別ごとにみた身体障がい者手帳所持者は、視覚障がい、聴覚・平衡機能障がい、音声・言語・そしゃく機能障がいは微増ないし横ばいで推移しています。肢体不自由と内部障がいは、平成21年度（2009年度）には、平成17年度（2005年度）と比べて肢体不自由が737人、内部障がいが310人増加しています。

■図 2-1-7 主たる障がいの種別の身体障がい者手帳所持者の状況

（単位：人）

主たる障がいの種別	平成17年度 (2005年度)	平成18年度 (2006年度)	平成19年度 (2007年度)	平成20年度 (2008年度)	平成21年度 (2009年度)
視覚障がい	827	880	864	866	869
聴覚・平衡機能障がい	815	836	817	863	881
音声・言語・ そしゃく機能障がい	166	176	174	175	172
肢体不自由	6,457	6,885	6,804	6,939	7,194
内部障がい	2,924	3,134	3,067	3,136	3,234
合計	11,189	11,911	11,726	11,979	12,350

資料：各年度末現在の手帳所持者数

※重複障がいのある人については、上位の等級にあたる障がい種別に計上しています。

## (4) 知的障がい者の状況

### ① 年齢別療育手帳所持者の状況

年齢別にみた療育手帳所持者は、18歳未満、18歳以上ともに年々増加しており、平成21年度（2009年度）には、平成17年度（2005年度）と比べて18歳未満は114人、18歳以上は301人増加しています。

■図 2-1-8 年齢別療育手帳所持者の状況

(単位：人)

	平成17年度 (2005年度)	平成18年度 (2006年度)	平成19年度 (2007年度)	平成20年度 (2008年度)	平成21年度 (2009年度)
18歳未満	609	649	679	715	723
18歳以上	1,128	1,226	1,295	1,362	1,429
合計	1,737	1,875	1,974	2,077	2,152

資料：各年度末現在の手帳所持者数

### ② 療育手帳所持者の年齢別・判定別の状況

平成21年度（2009年度）の年齢別の療育手帳所持者は、年齢層が低いほど多い傾向となっており、40歳未満の手帳所持者が全体の約77%を占めています。これを判定別にみると、Aが手帳所持者の半数以上の割合を占めています。

■図 2-1-9 療育手帳所持者の年齢別・判定別の状況

(単位：人)

	A	B1	B2	合計
0～9歳	117	68	109	294
10～19歳	250	100	191	541
20～29歳	227	94	108	429
30～39歳	210	90	87	387
40～49歳	139	63	48	250
50～59歳	81	44	25	150
60～69歳	40	20	3	63
70～79歳	15	7	3	25
80歳以上	6	6	1	13
計	1,085	492	575	2,152
割合(%)	50.4	22.9	26.7	100.0

資料：平成21年度（2009年度）末現在の手帳所持者数

### ③ 判定別療育手帳所持者の状況

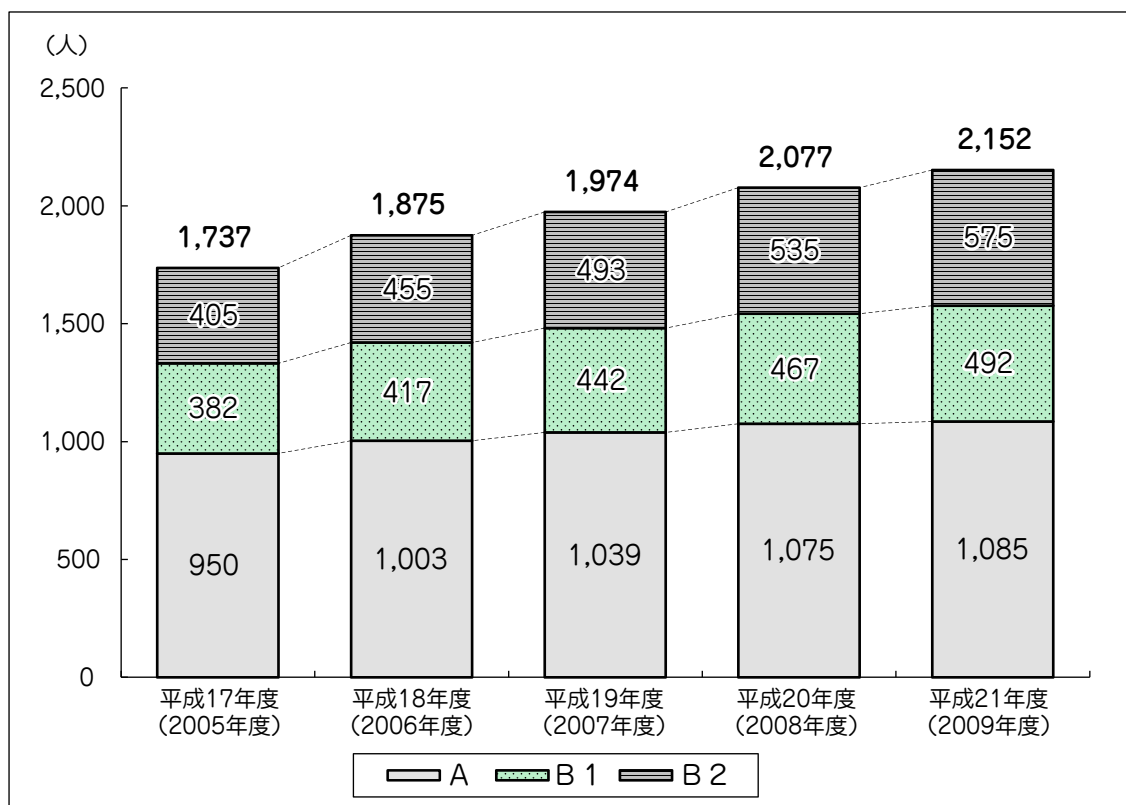
判定別にみた療育手帳所持者は、A、B1、B2のすべての手帳所持者が増加傾向で推移しています。平成21年度（2009年度）には、平成17年度（2005年度）と比べてAは135人、B1は110人、B2は170人増加しています。

■ 図 2-1-10 判定別療育手帳所持者の状況

（単位：人）

判定	平成17年度 (2005年度)	平成18年度 (2006年度)	平成19年度 (2007年度)	平成20年度 (2008年度)	平成21年度 (2009年度)
A	950	1,003	1,039	1,075	1,085
B1	382	417	442	467	492
B2	405	455	493	535	575
合計	1,737	1,875	1,974	2,077	2,152

※障がいの程度により、A（重度）、B1（中度）、B2（軽度）に区分されます。



資料：各年度末現在の手帳所持者数

## (5) 精神障がい者、精神通院医療受給者の状況

### ① 等級別精神障がい者保健福祉手帳所持者の状況

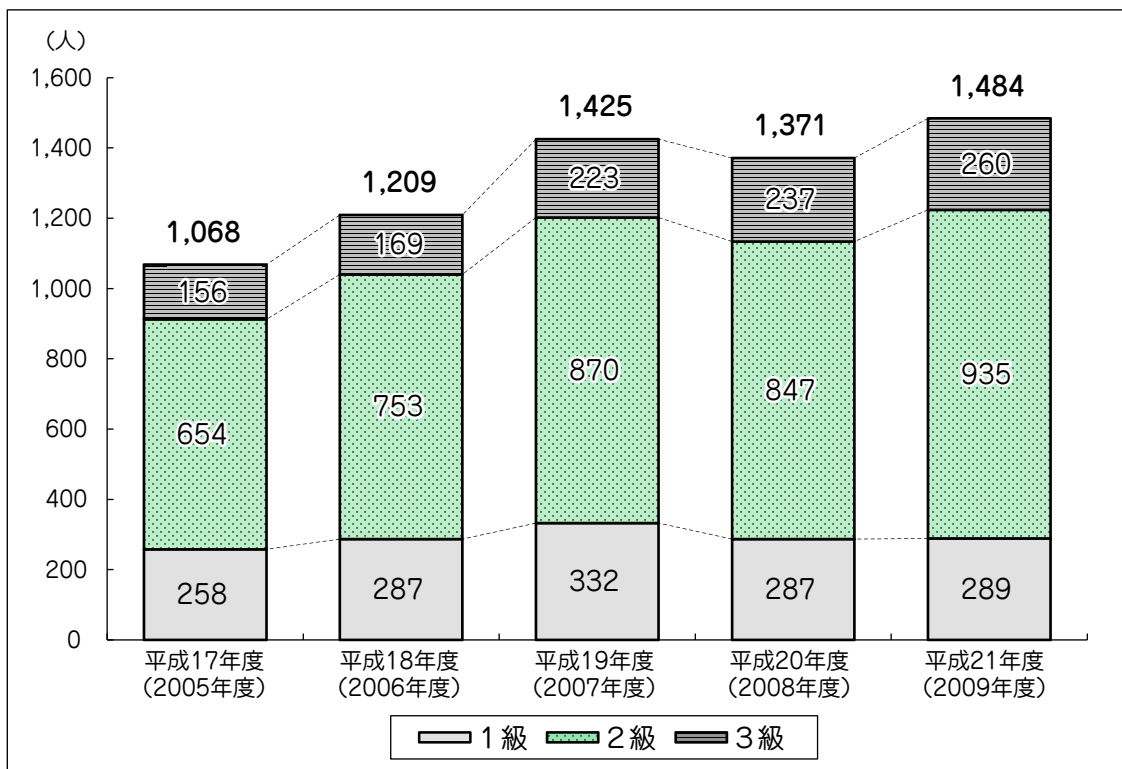
等級別にみた精神障がい者保健福祉手帳所持者は、特に、2級と3級の手帳所持者が増加傾向で推移しています。平成21年度(2009年度)には、平成17年度(2005年度)と比べて2級は281人、3級は104人増加しています。

■図2-1-11 等級別精神障がい者保健福祉手帳所持者の状況

(単位：人)

等級	平成17年度 (2005年度)	平成18年度 (2006年度)	平成19年度 (2007年度)	平成20年度 (2008年度)	平成21年度 (2009年度)
1級	258	287	332	287	289
2級	654	753	870	847	935
3級	156	169	223	237	260
合計	1,068	1,209	1,425	1,371	1,484

※障がいの程度により、1級(重度)から3級(軽度)まで区分されます。



資料：各年度末現在の手帳所持者数



## ② 精神障がい者保健福祉手帳所持者の年齢別・判定別の状況

平成21年度（2009年度）の年齢別・手帳の等級別の精神障がい者保健福祉手帳所持者は、30歳代と40歳代が特に多くなっています。これを等級別にみると、2級の手帳所持者の割合が63.0%と多くなっています。

■図 2-1-12 精神障がい者保健福祉手帳所持者の年齢別・判定別の状況

（単位：人）

	1級	2級	3級	合計
0～9歳	1	1	1	3
10～19歳	4	10	5	19
20～29歳	10	69	23	102
30～39歳	27	224	69	320
40～49歳	43	252	68	363
50～59歳	49	169	40	258
60～69歳	65	137	31	233
70～79歳	49	59	20	128
80歳以上	41	14	3	58
計	289	935	260	1,484
割合（%）	19.5	63.0	17.5	100.0

資料：平成21年度（2009年度）末現在の手帳所持者数

## ③ 障がい者自立支援医療受給者の状況

障がい者自立支援医療における精神通院医療の受給者は、平成19年度（2007年度）を境に減少から増加に転じています。平成19年度（2007年度）については、平成18年度（2006年度）から障害者自立支援法の施行に伴い、所得制限の導入や自立支援医療受給者証の更新期間が2年から1年となるなど制度変更により一時的に減少したものと考えられます。

■図 13 障がい者自立支援医療（精神通院医療）受給者の状況

（単位：人）

	平成17年度 （2005年度）	平成18年度 （2006年度）	平成19年度 （2007年度）	平成20年度 （2008年度）	平成21年度 （2009年度）
受給者数	3,610	3,520	3,118	3,459	3,628

資料：各年度末現在の受給者数

## 2 アンケート調査結果と課題

第3期障がい者計画の策定にあたっては、平成21年度（2009年度）に実施した第3期吹田市障がい者計画策定のためのアンケート調査（以下「アンケート調査」という。）の結果の中から、障がい者手帳所持者及び発達障がい児の家庭や地域での生活の様子、働くために必要な環境、障がいがあることがわかったきっかけ、将来の暮らしの意向等に関連する項目を抽出して整理しました。

### （1）アンケート調査の実施概要

調査対象	配付数 (件)	回答数 (件)	回答率 (%)	対象の属性、調査方法、調査時期
18歳以上 手帳所持者	1,800	878	48.8	身体障がい者手帳、療育手帳、精神障がい者保健福祉手帳所持者から無作為抽出。 個人に郵送配付、郵送回収。ただし、18歳未満手帳所持者への調査は、対象者の保護者に回答を求めた。 調査時期は平成21年（2009年）11月～12月。
18歳未満 手帳所持者	500	244	48.8	
発達障がい児	100	37	37.0	市教育委員会で把握している発達障がい児の保護者に対し、市立小・中学校の担任より調査協力の意思を確認した上で調査票を直接配付、郵送回収。 調査時期は平成21年（2009年）9月～12月。
地域福祉の 担い手	490	307	62.7	市内33の地区福祉委員長から各地区の地域福祉の担い手に対して直接配付、郵送回収。 ボランティア団体へは直接配付、郵送回収。 調査時期は平成21年（2009年）9月～12月。
合計	2,890	1,466	50.7	

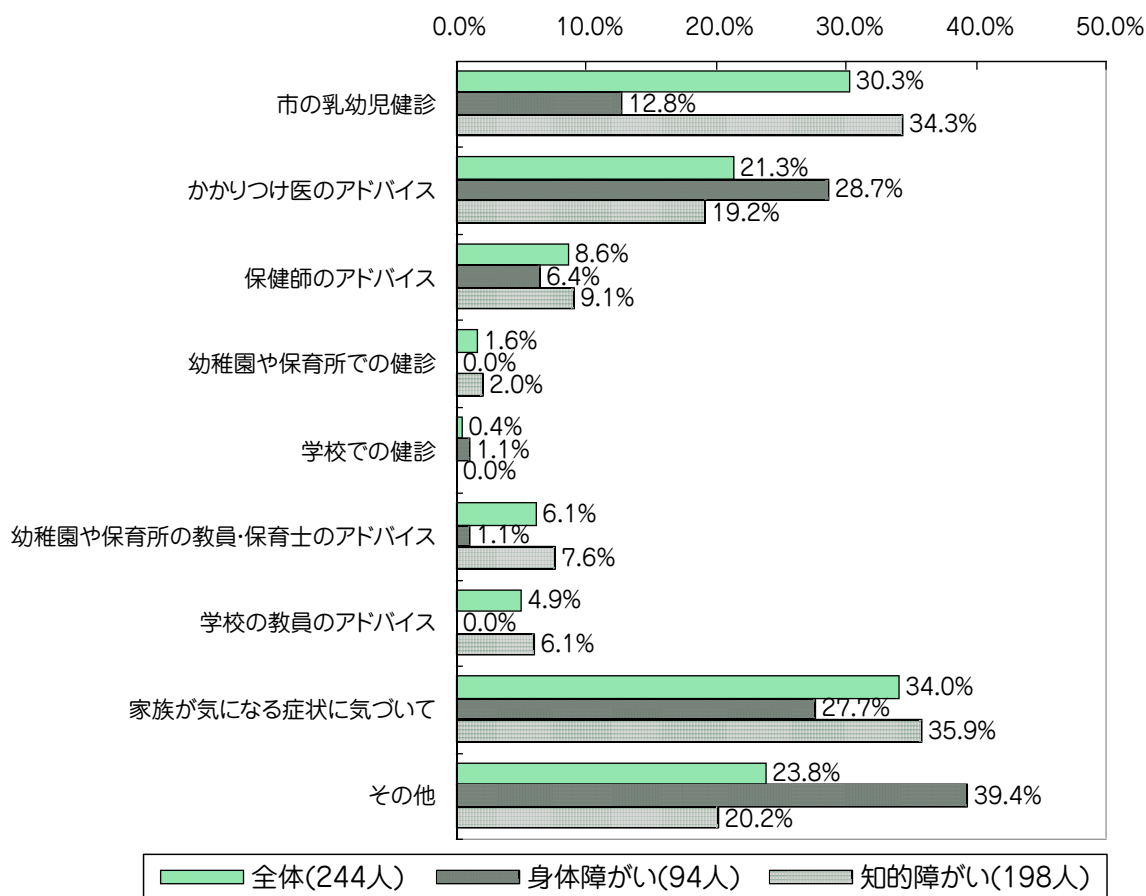
なお、以下のアンケート調査結果の概要は、以下の要領で分析を行っています。

- アンケート調査では、障がいのある人を「障がい者」、障がいのある子どもを「障がい児」、発達障がいのある子どもを「発達障がい児」と表記し、調査を実施しました。
- 障がい者及び障がい児の障がい者手帳の種別は、身体障がい者手帳所持者を「身体障がい」、療育手帳所持者を「知的障がい」、精神障がい者保健福祉手帳所持者を「精神障がい」と表記しています。
- 障がい児では、精神障がい者保健福祉手帳所持者の回答数が極めて少なく、他の障がい種別との比較が困難なため、分析からは割愛しています。
- 集計結果は、すべて小数第2位を四捨五入した値を表記しています。
- 四捨五入の関係で構成比の合計が、100.0%にならない場合、超える場合があります。
- グラフ中の（ ）中の人数は、各集計区分の集計母数です。

## (2) 障がい者、障がい児、発達障がい児へのアンケート調査結果

### ① 障がいが判明したきっかけ

■ 図 2-2-1 障がいが判明したきっかけ（障がい児 / 複数回答）

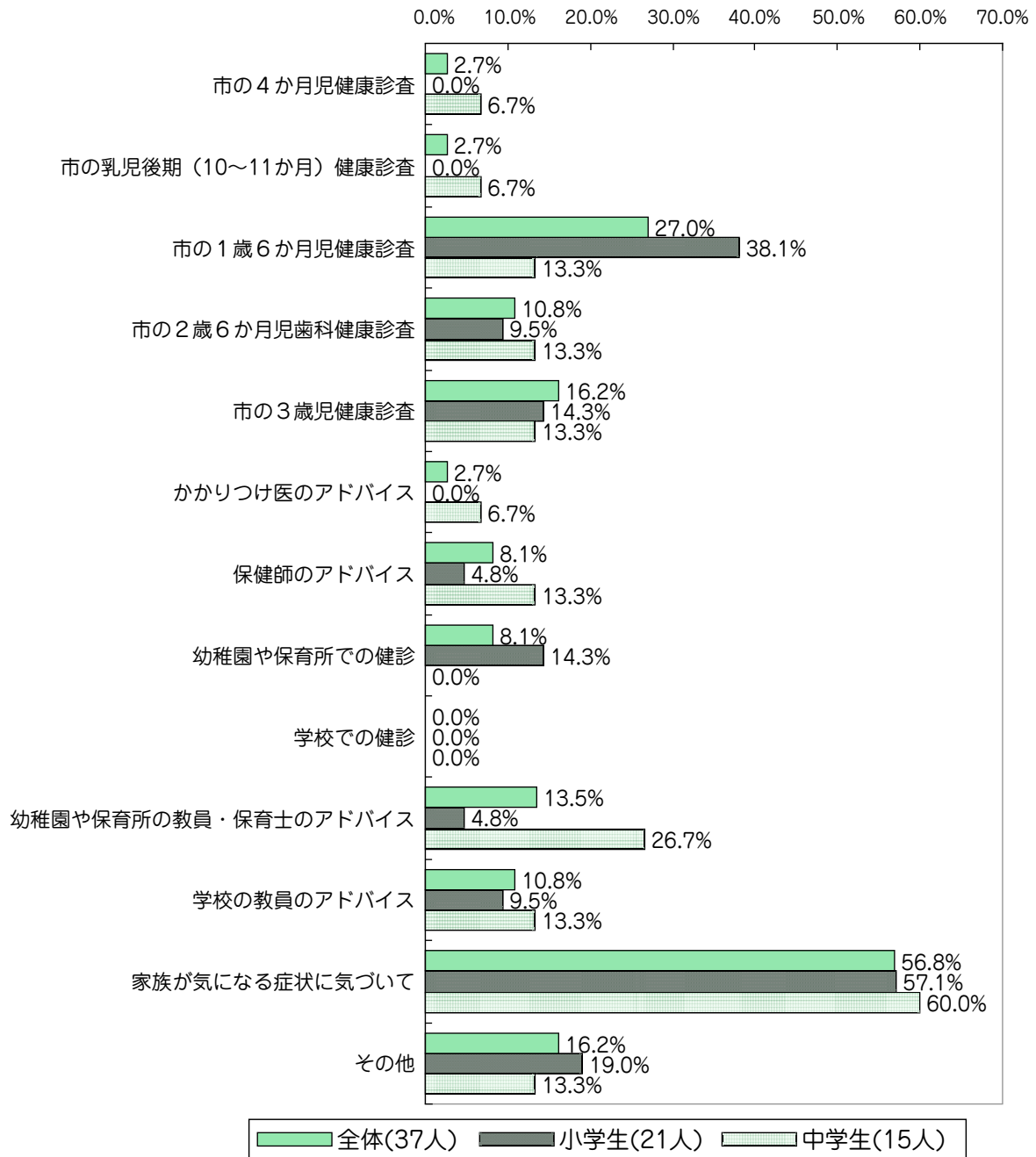


### 【障がい児】

「その他」を除き、身体障がいでは「かかりつけ医のアドバイス」が最も多く、次いで、「家族が気になる症状に気づいて」となっています。知的障がいでは「家族が気になる症状に気づいて」が最も多く、次いで、「市の乳幼児健診」となっています。

「かかりつけ医のアドバイス」は身体障がい者が知的障がい者に比べて多くなっていますが、「市の乳幼児健診」や「家族が気になる症状に気づいて」などは知的障がい者が身体障がい者に比べて多くなっています。

■ 図 2-2-2 障がいが発覚したきっかけ（発達障がい児 / 複数回答）

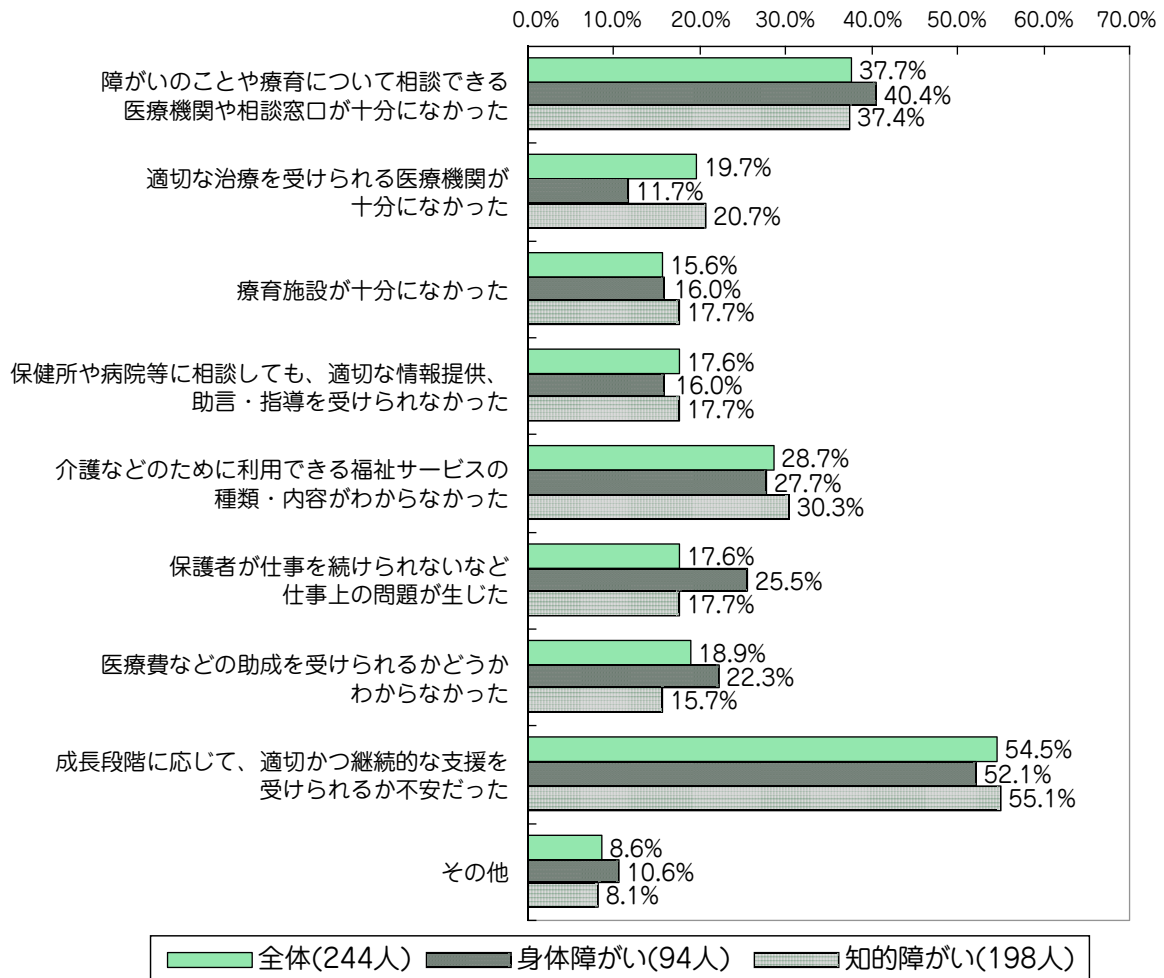


**【発達障がい児】**

「その他」を除き、小学生・中学生ともに「家族が気になる症状に気づいて」が最も多く、次いで、小学生では「市の1歳6か月児健康診査」、中学生では「幼稚園や保育所の教員・保育士のアドバイス」となっています。

## ② 障がいの診断・判定を受けた頃に困ったこと

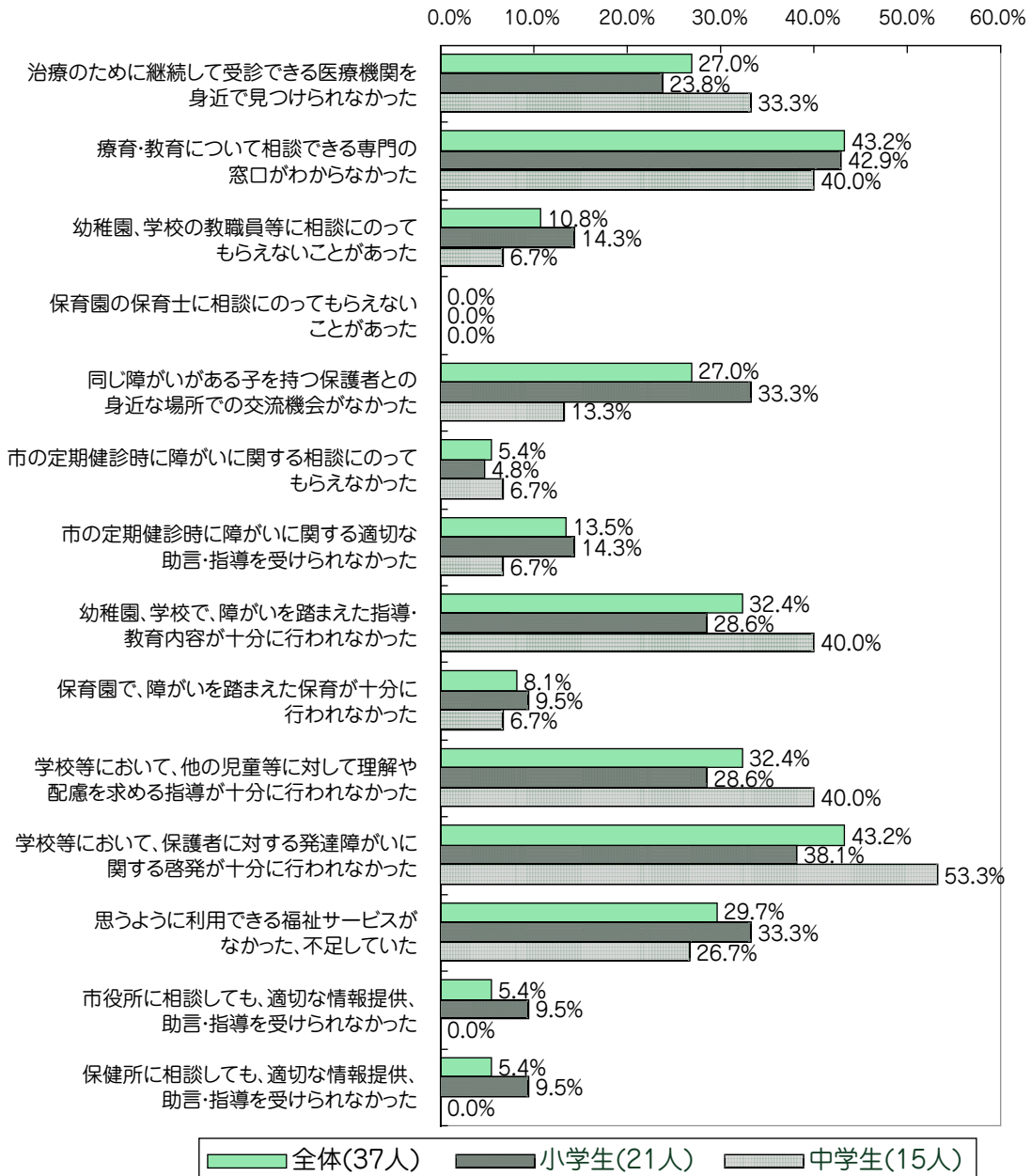
■ 図 2-2-3 障がいの診断・判定を受けた頃に困ったこと（障がい児 / 複数回答）



### 【障がい児】

障がい種別に関係なく「成長段階に応じて、適切かつ継続的な支援を受けられるか不安だった」が最も多く、次いで、「障がいのことや療育について相談できる医療機関や相談窓口が十分になかった」となっています。

■ 図 2-2-4 障がいの診断・判定を受けた頃に困ったこと（発達障がい児 / 複数回答）



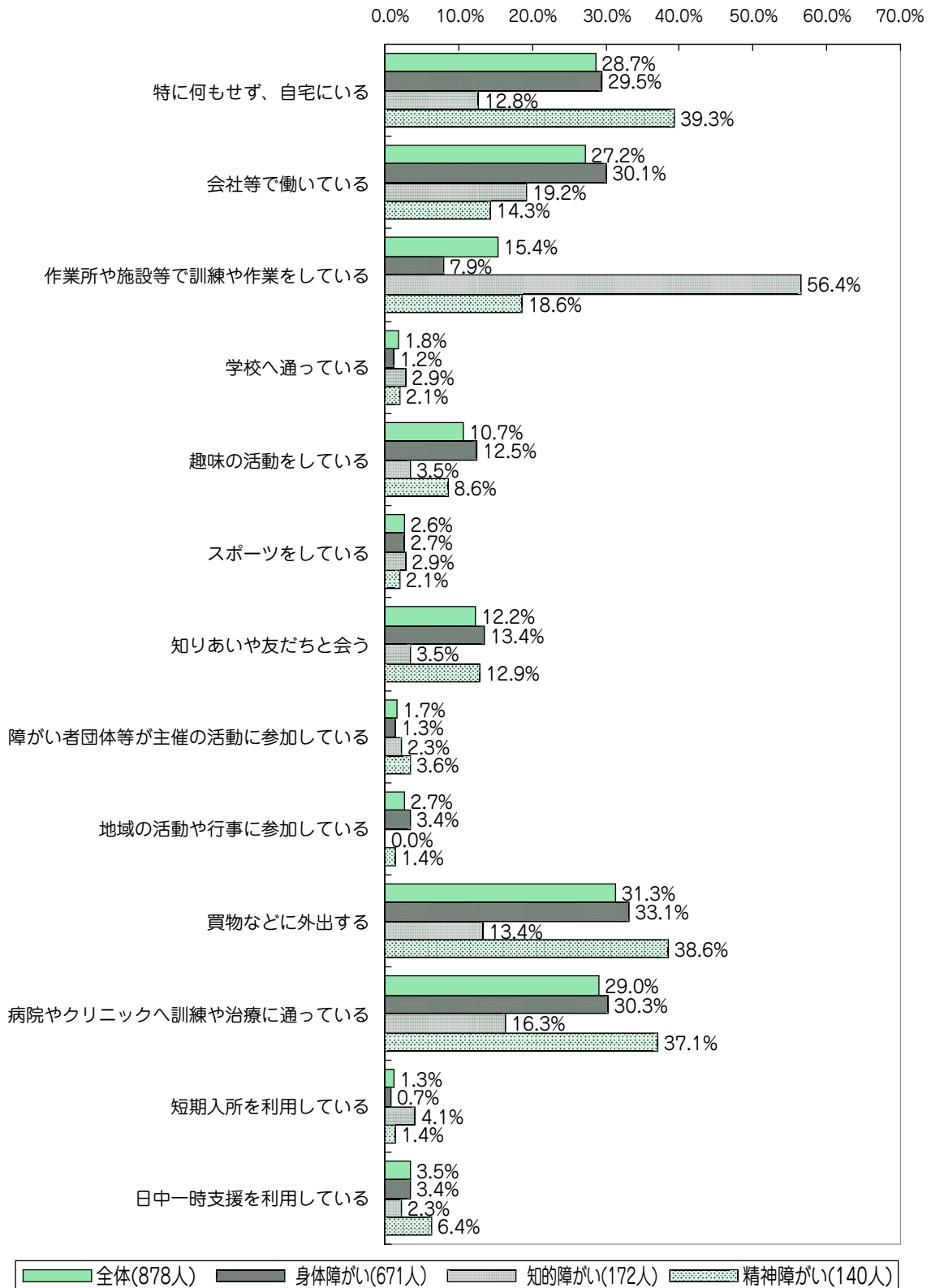
### 【発達障がい児】

小学生では「療育・教育について相談できる専門の窓口がわからなかった」が最も多く、次いで、「学校等において、保護者に対する発達障がいに関する啓発が十分に行われなかった」となっています。

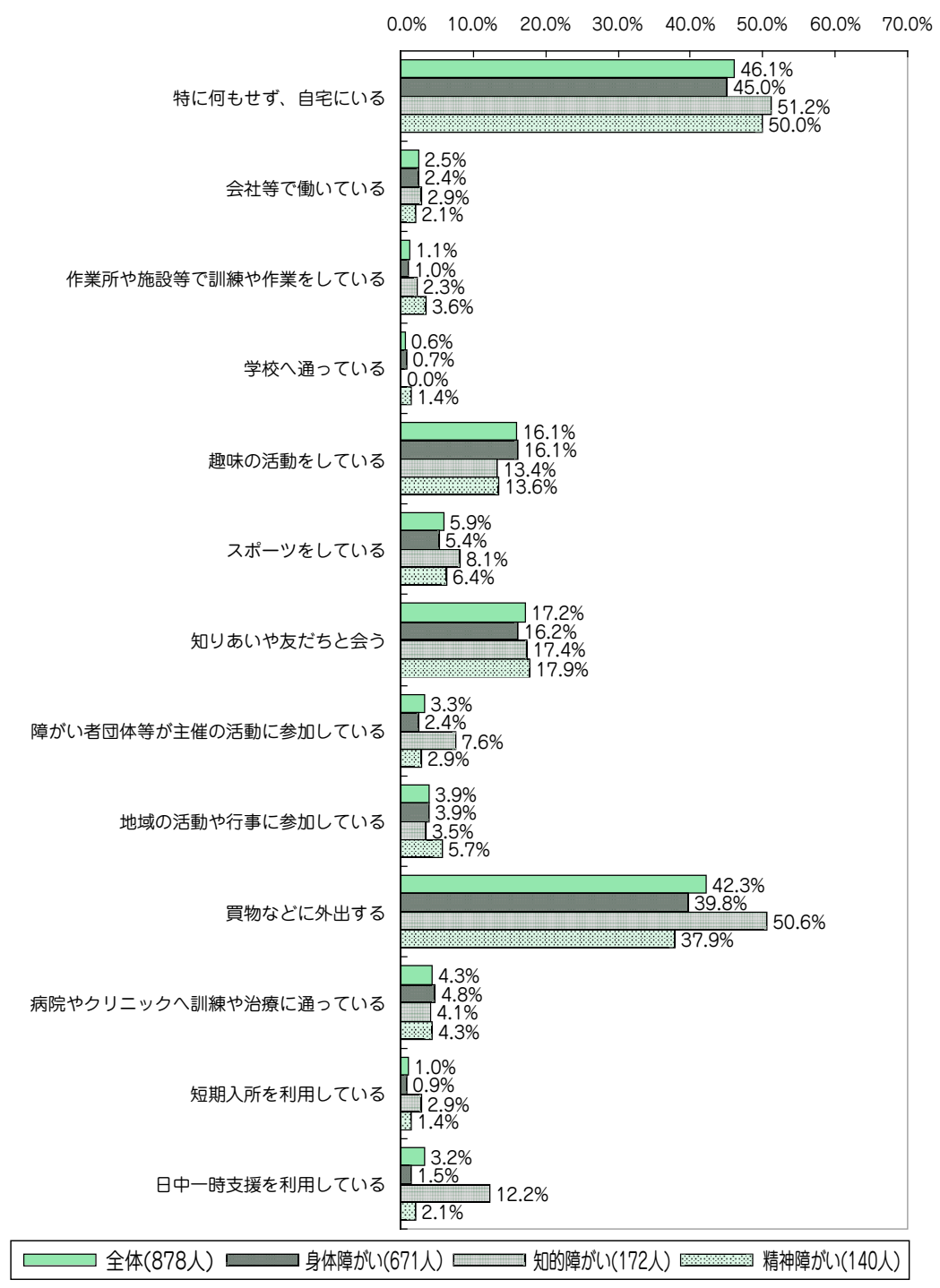
中学生では「学校等において、保護者に対する発達障がいに関する啓発が十分に行われなかった」が最も多く、次いで、「療育・教育について相談できる専門の窓口がわからなかった」「幼稚園、学校で、障がいを踏まえた指導・教育内容が十分に行われなかった」「学校等において、他の児童等に対して理解や配慮を求める指導が十分に行われなかった」となっています。

### ③ 現在の日中の過ごし方、希望する日中の過ごし方

■ 図 2-2-5 現在の日中の過ごし方〈平日〉(障がい者 / 複数回答)



■図 2-2-6 現在の日中の過ごし方〈休日〉（障がい者 / 複数回答）



**【障がい者】**

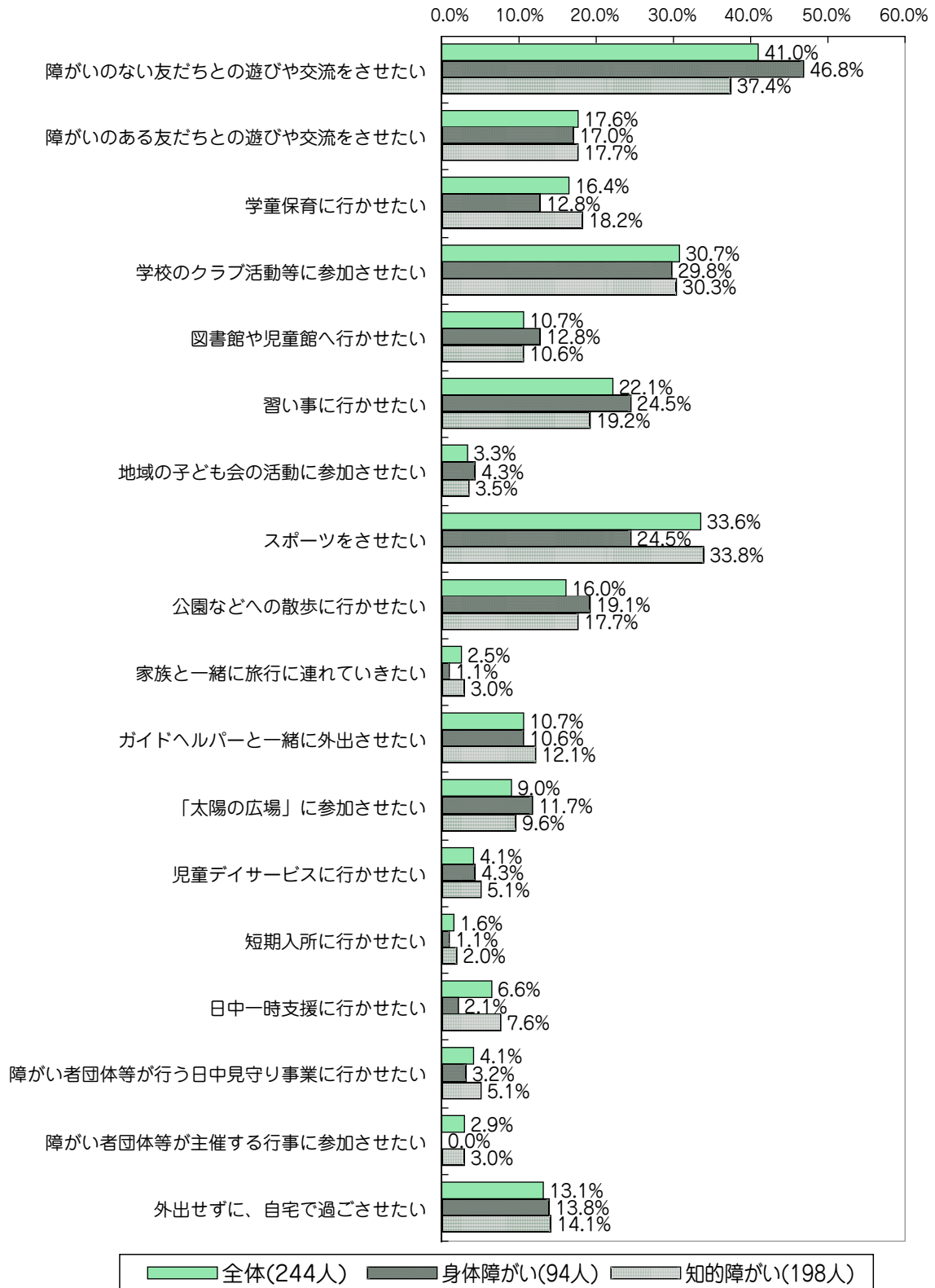
平日は、身体障がいでは「買物などに外出する」、知的障がいでは「作業所や施設等で訓練や作業をしている」、精神障がいでは「特に何もせず、自宅にいる」がそれぞれ最も多くなっています。

「特に何もせず、自宅にいる」は精神障がいでは 39.3%と他の障がい種別に比べて多く、「作業所や施設等で訓練や作業をしている」は知的障がいでは 56.4%と突出しています。

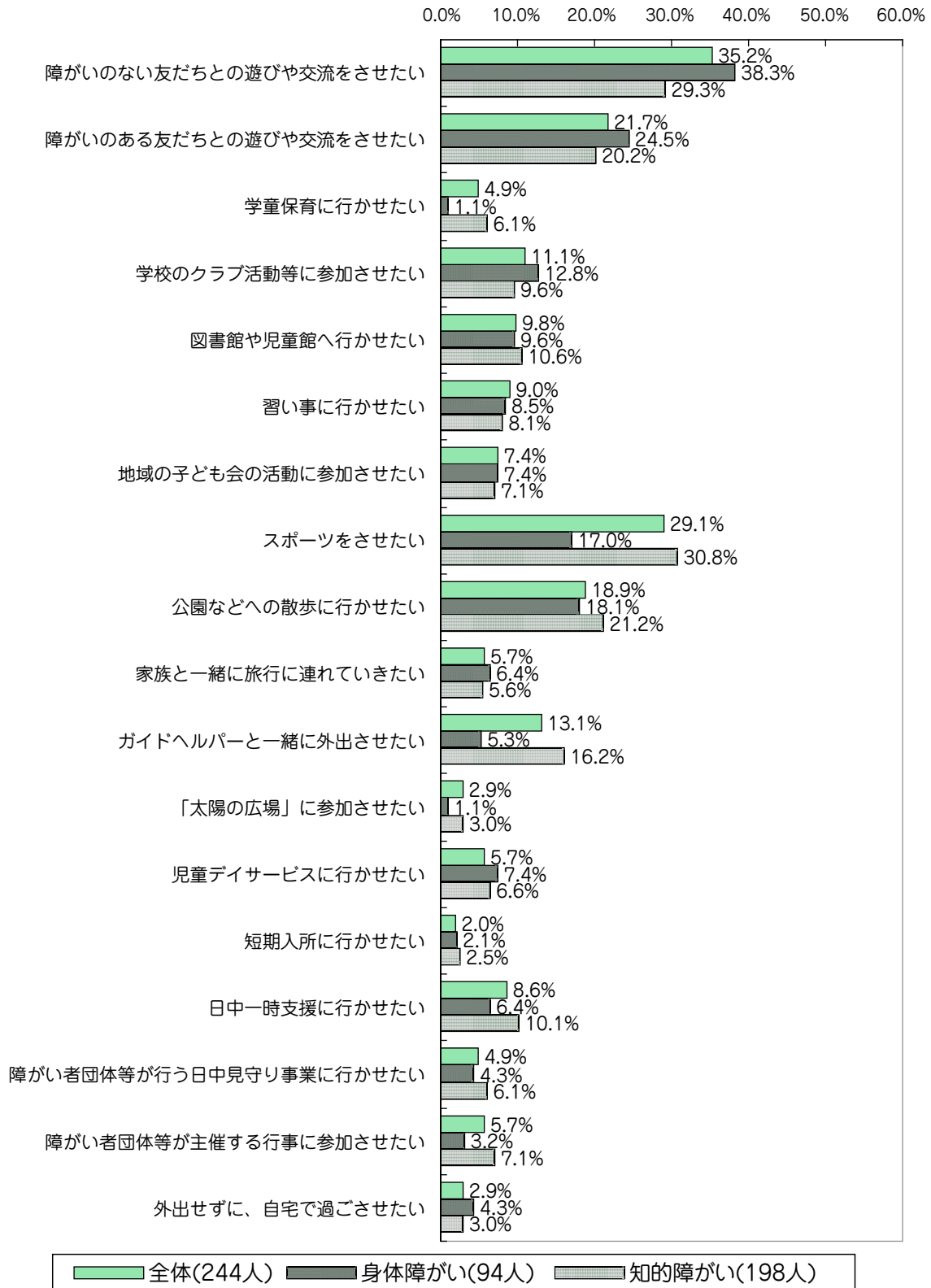
休日は、障がい種別に関係なく「特に何もせず、自宅にいる」が最も多く、知的障がいと精神障がいでは半数を超えています。



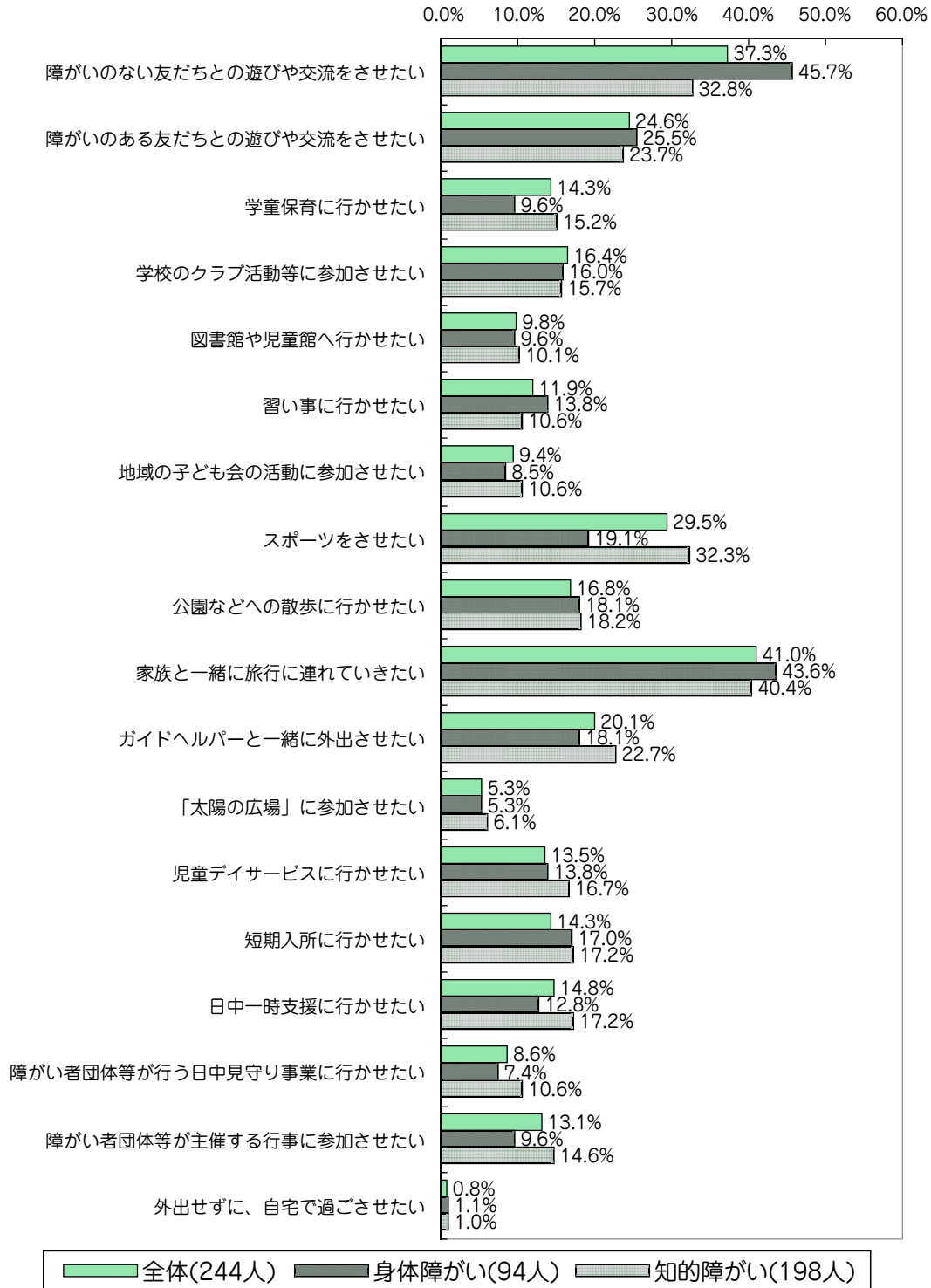
■ 図 2-2-7 希望する日中の過ごし方〈平日の学校等の放課後〉(障がい児 / 複数回答)



■ 図 2-2-8 希望する日中の過ごし方〈学校等の休みの昼間〉(障がい児 / 複数回答)



■ 図 2-2-9 希望する日中の過ごし方〈夏休みなど長い休みの昼間〉(障がい児 / 複数回答)



**【障がい児】**

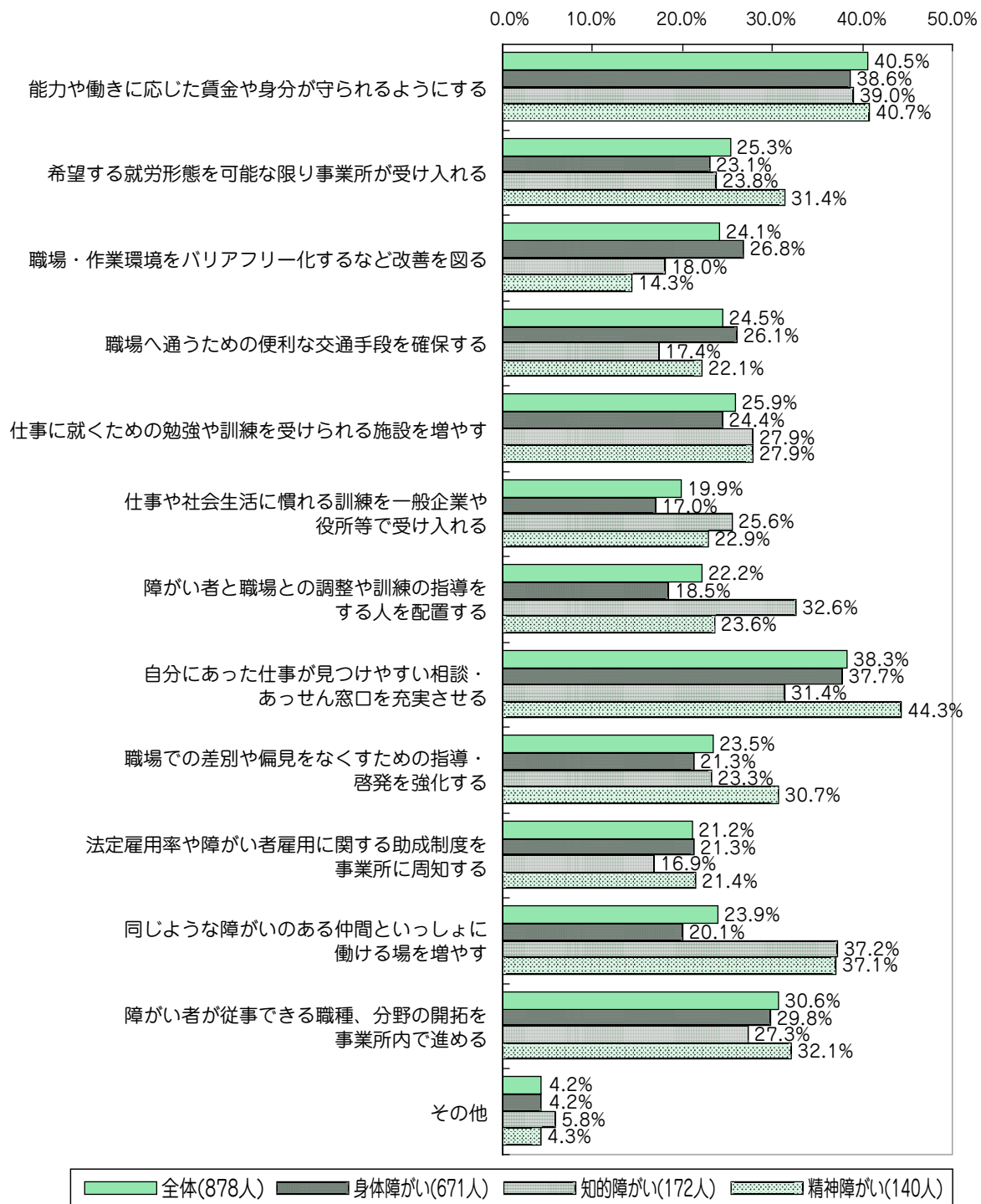
平日の学校等の放課後は、障がい種別に関係なく「障がいのない友だちとの遊びや交流をさせたい」が最も多くなっています。

学校等の休みの昼間は、身体障がいでは「障がいのない友だちとの遊びや交流をさせたい」が最も多く、知的障がいでは「スポーツをさせたい」が最も多くなっています。

夏休みなど長い休みの昼間は、身体障がいでは「障がいのない友だちとの遊びや交流をさせたい」が最も多く、知的障がいでは「家族と一緒に旅行に連れていきたい」が最も多くなっています。

#### ④ 障がい者が働くために必要な環境や支援

■ 図 2-2-10 障がい者が働くために必要な環境や支援（障がい者 / 複数回答）



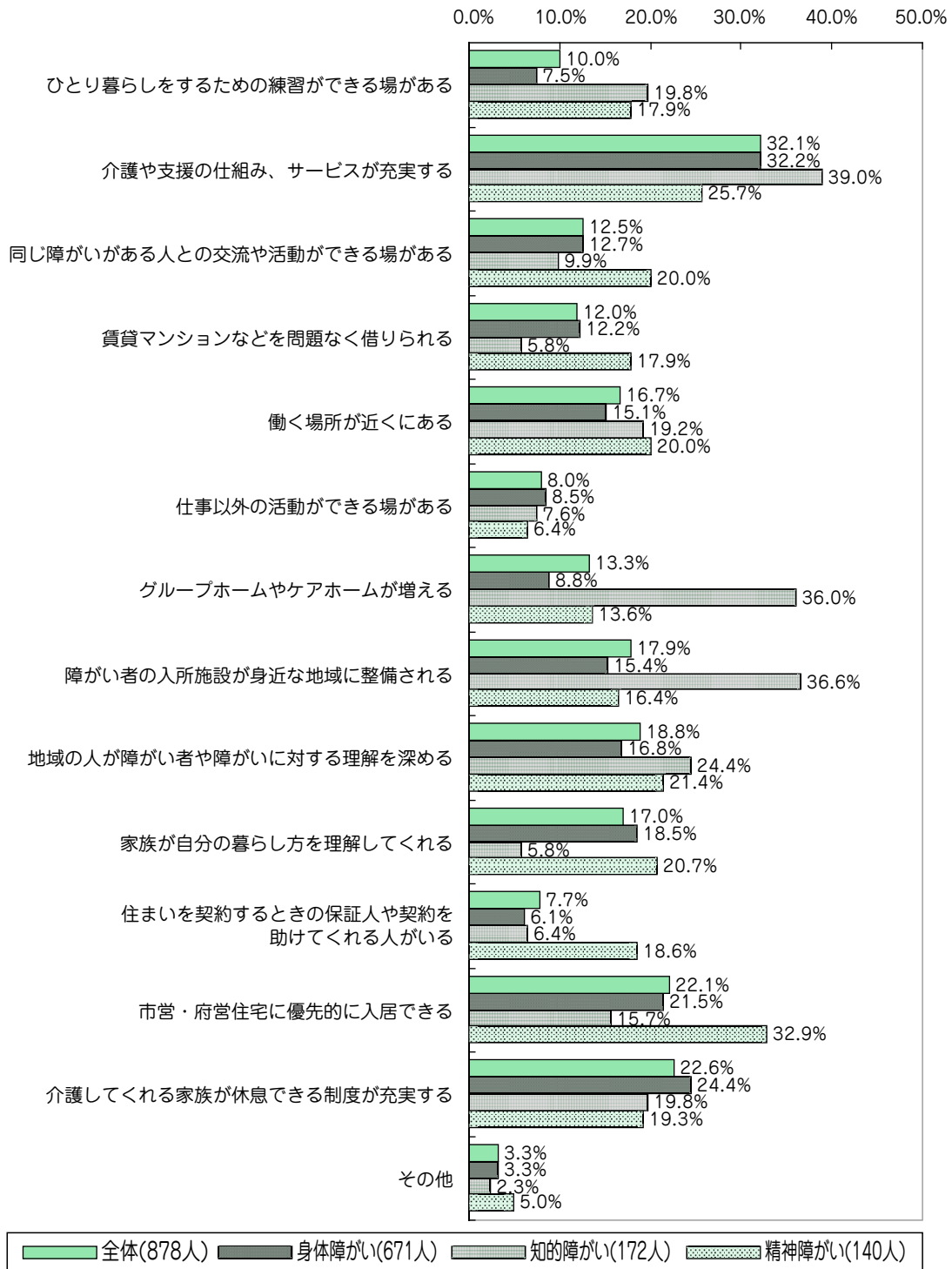
#### 【障がい者】

身体障がいと知的障がいでは「能力や働きに応じた賃金や身分が守られるようにする」、精神障がいでは「自分にあった仕事を見つけやすい相談・あっせん窓口を充実させる」が最も多くなっています。

「希望する就労形態を可能な限り事業所が受け入れる」や「職場での差別や偏見をなくすための指導・啓発を強化する」は、精神障がいでは30%を超えており、身体障がいと知的障がいでは20%台であるのに比べてやや多くなっています。

## ⑤ 希望する暮らし方の実現に必要な支援や取組

■ 図 2-2-11 希望する暮らし方の実現に必要な支援や取組（障がい者 / 複数回答）

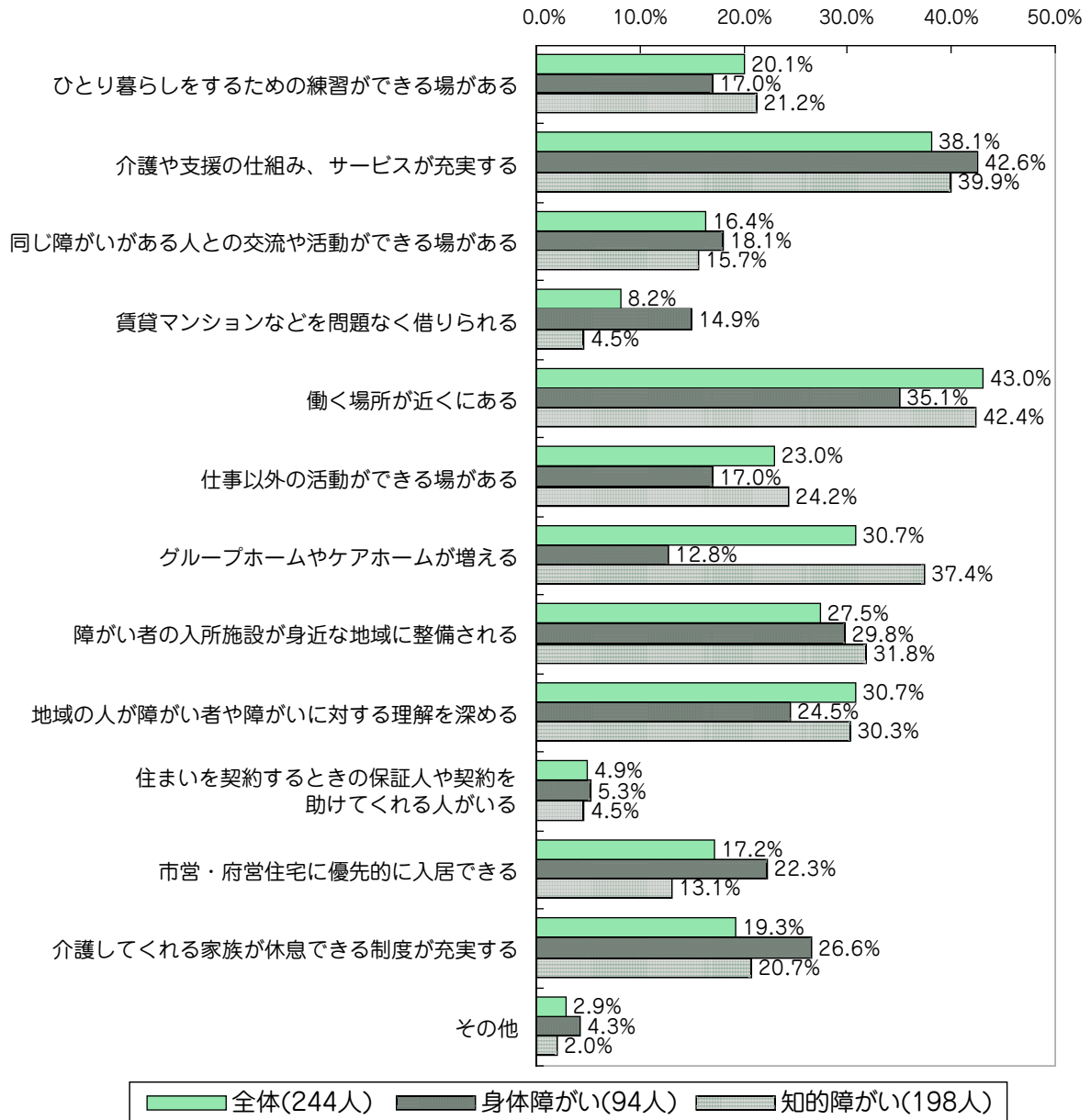


### 【障がい者】

身体障がいと知的障がいでは「介護や支援の仕組み、サービスが充実する」、精神障がいでは「市営・府営住宅に優先的に入居できる」がそれぞれ最も多くなっています。

特に、知的障がいでは「障がい者の入所施設が身近な地域に整備される」や「グループホームやケアホームが増える」が突出して多くなっています。「家族が自分の暮らし方を理解してくれる」や「賃貸マンションなどを問題なく借りられる」は身体障がいと精神障がいと知的障がいに比べて多くなっています。

■図 2-2-12 希望する暮らし方の実現に必要な支援や取組（障がい児 / 複数回答）



【障がい児】

身体障がいでは「介護や支援の仕組み、サービスが充実する」、知的障がいでは「働く場所が近くにある」が最も多くなっています。「介護や支援の仕組み、サービスが充実する」や「賃貸マンションなどを問題なく借りられる」「市営・府営住宅に優先的に入居できる」「介護してくれる家族が休息できる制度が充実する」は身体障がいと知的障がいに比べて多く、「働く場所が近くにある」や「仕事以外の活動ができる場がある」「グループホームやケアホームが増える」「地域の人や障がい者や障がいに対する理解を深める」は知的障がいと身体障がいに比べて多く、障がい種別間での差が大きくなっています。

### (3) アンケート調査結果による主な課題

#### ① 障がい・障がい者に関する理解を深める取組

##### 【課題】

ア まちでの周囲の人の視線や言動、近所づきあい、就職活動、学校への入学・進学、学校生活など、日常の身近な場面において、障がいがあることで不適切な対応等を経験したという実態があります。

##### 【取組】

ア 障がいや障がい者に関する理解を深める方法の一つとしては、学校教育等を通じた子どもの頃から共に学び、共に成長する教育、環境づくりの教育の必要性、障がいがある人とない人との交流機会の充実など、知識だけでなく、ありのままの姿、声に直に触れる取組が必要です。

#### ② 障がいの早期発見、早期療育・治療等の体制

##### 【課題】

ア 障がい、発達障がいに係る症状が判明したきっかけは、家族による気づきと市の乳幼児健診が特に多くあげられており、乳幼児健診が早期発見に効果を上げています。また、かかりつけ医からのアドバイスも多く、保健、医療、福祉の緊密な連携と迅速な対応に向けた体制の充実・確保が重要です。

イ 障がいの診断・判定を受けた頃に困ったこととして、障がい児の保護者は、保健、医療、福祉、教育や就労など、各種支援をライフステージに応じて一貫して受けられるかどうかという不安を抱いています。また、発達障がい児の保護者は、療育・教育に関する専門の相談窓口がわからなかったことや、学校等において、保護者への発達障がいに関する啓発が十分に行われなかったことなどをあげています。

##### 【取組】

ア 障がい児への適切な療育・治療、ライフステージに合わせた切れ目のない個別支援体制の確保・充実を図るとともに、保護者の不安解消に資する相談体制の充実を図る必要があります。

#### ③ 豊かな日中の生活、生きがいにつながる活動の提供体制

##### 【課題】

ア 障がい者の平日の日中の過ごし方としては、知的障がい者では、作業所や施設等での訓練や作業をしている人、精神障がい者では、特に何もしないで家にいる人が最も多くなっています。また、休日の日中は、障がいの種別に関係なく、何もせず自宅にいる人が最も多くなっています。

イ 障がい児が夏休みなど長い休みの昼間に希望する活動としては、家族との旅行、ガイドヘルパーとの外出、児童デイサービスや短期入所の利用、日中一時支援の利用などが多く、福祉サービス等の利用ニーズが、学校等の休みの昼間に比べて高くなっています。

##### 【取組】

ア 日中活動の場の提供に加え、日中活動に参加するための支援体制の充実を図る必要があります。また、障がい者、障がい児自身の日中活動の場の確保に努めるとともに、家族、保護者への就労支援や一時的な休息（レスパイト）に資する支援の充実を図る必要があります。

#### ④ 働くことを通じた自己実現、社会参加の支援

##### 【課題】

- ア 現在働いている障がい者のうち、知的障がい者の多くは作業所や施設等へ通っており、日中活動の場の充実を図ることが必要です。
- イ 働いている障がい者が、仕事で経験したいことや、不安に感じたことについては、働きぶりに対する正当な評価がなされていないこと、いつやめさせられるかわからないことなどが多く、不安定な雇用環境に置かれているという実態が浮き彫りになっています。

##### 【取組】

- ア 企業には、障がい者の短期間試行雇用制度（トライアル雇用制度）の活用や職場実習の受け入れなど、体験を通じて障がい者への理解を深める取組を実施していくよう働きかけていく必要があります。

#### ⑤ 暮らしの不安、将来の暮らしに対する不安の解消に応える取組

##### 【課題】

- ア 障がい者が、現在抱えている暮らしに対する不安は、知的障がい者と精神障がい者では、親が亡くなった後のことをあげる人が多く、障がい児と発達障がい児でも、同様の傾向となっており、家族、保護者が亡くなった後の生活や介護、生活の保障に対する不安が多く寄せられています。
- イ 希望する生活を実現するために必要と感じている支援は、障がい者では、介護・支援サービスの充実、家族が介護の休息を取ることができる仕組みの充実、公営住宅への優先入居などが多くなっています。また、障がい児では、就労の場の確保、介護・支援サービスの充実、グループホームやケアホームの充実、障がいについての理解の浸透が多くあげられています。

##### 【取組】

- ア 将来の暮らしに対する不安の解消に応える取組としては、長期的な視点に立って、家族、保護者が亡くなった後の生活の場の確保や就労に向けた支援策の充実など、介護・支援サービスの充実を計画的に図る必要があります。





## 第3章 施策の基本的な考え方



## 第1節 基本理念

### ≡≡≡ 住み慣れた地域で安心して暮らせる社会をめざして ≡≡≡

すべての市民は、障がいのあるないにかかわらず、誰もが住み慣れた地域で自分らしく生活する権利を持っています。

本市では、障がいのある人の「地域で自分らしく生活する権利」を尊重し、「すべての人が共に暮らせるまち」をめざし、障害者基本法の理念に基づき、人格と個性を尊重して地域の中で互いに支えあいながら生活し、障がいのある人の「完全参加と平等」を実現するまちづくりの推進に努めてきました。

国が署名し批准をめざしている「障害者の権利に関する条約」では、障がいを理由とした差別をなくし、実質的な平等の確保と、そのための合理的配慮の理念が位置づけられており、今後の障がい者施策のあり方が大きく変わろうとしています。

「障害者の権利に関する条約」の理念を積極的に推進していく立場で、障がいを理由とした差別をなくし、すべての人がお互いに尊重し合い、人として分け隔てなく豊かに暮らすため、「住み慣れた地域で安心して暮らせる社会をめざして」を基本理念とし、障がい者施策のさらなる充実に取り組んでいきます。

## 第2節 基本目標

### 1 障がいのある人の人権を尊重する社会づくり

一人の主権者として障がいのある人は、その人格と個性が尊重され、自らの生活を主体的に営む権利があります。

障がいを理由とした偏見や差別をなくし、社会を構成する一員として、お互いを尊重し、自分らしく学び・働き・活動する社会づくりをめざします。

### 2 すべての人が安心して暮らすことのできる平等な社会づくり

社会を構成する一員として、地域で豊かな人間関係や社会参加の機会は、すべての市民に平等に保障されるべきものです。

障がいの種別や程度にかかわらず、その個性と能力を發揮し、社会に自由に参加・参画でき、住み慣れた地域で安心して生活ができる平等な社会をめざします。

### 3 地域の一員として共に生きる社会づくり

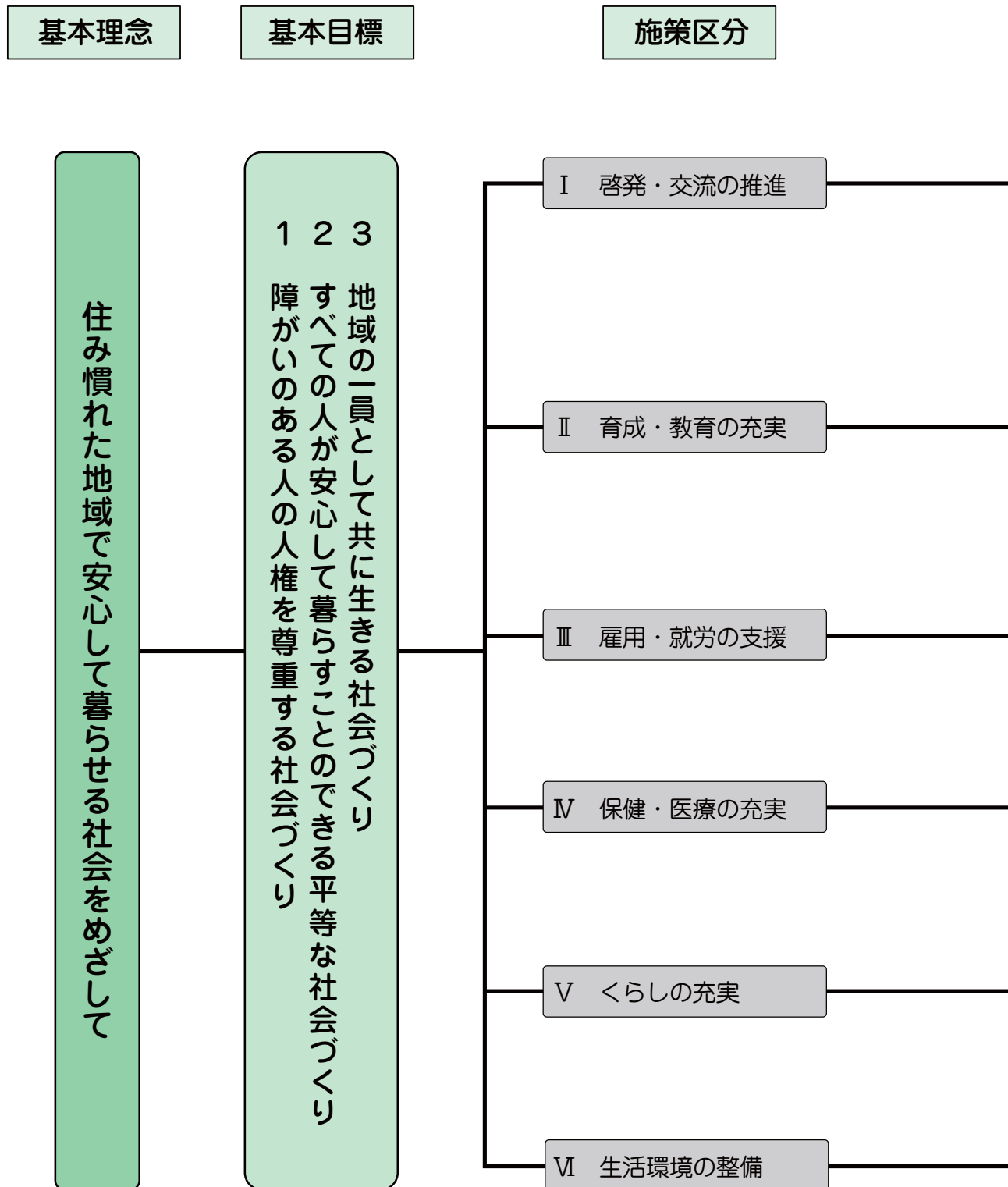
子どもから高齢者まで、障がいのある人もない人も、すべての人を一員として大切にする地域社会を実現するためには、行政としての役割を果し、市民と協働することが必要です。

障がいのある人が地域社会で自分らしく生活するために必要な施策の充実を図り、誰もが地域の一員として、共に安心して暮らすことのできるインクルーシブな社会をめざします。

### 第3節 施策の体系

3つの基本目標の実現に向け、6つの施策区分を設定し、それぞれについて施策の基本的な方向、重点施策、基本施策、具体的な取組（施策・事業）を策定します。

■図3-3-1 施策の体系図



重点施策

基本施策

(1) 啓発・交流活動の推進	<ul style="list-style-type: none"> <li>① 市民・事業所への啓発・広報活動の推進</li> <li>② 地域活動の推進</li> <li>③ 誰もが利用しやすい市役所づくり</li> </ul>
(2) 人材養成の充実	<ul style="list-style-type: none"> <li>① コミュニケーション支援等のための人材養成の推進</li> <li>② ボランティア活動への支援</li> </ul>
(3) 権利擁護の推進	<ul style="list-style-type: none"> <li>① 苦情解決制度の推進</li> <li>② 成年後見制度等の推進</li> <li>③ 人権侵害の防止</li> </ul>
(1) 療育・保育の充実	<ul style="list-style-type: none"> <li>① 早期発見・早期療育の推進</li> <li>② 療育・保育における支援体制の充実</li> <li>③ 障がい児保育の推進</li> </ul>
(2) 教育の充実	<ul style="list-style-type: none"> <li>① 学校教育における支援体制の充実</li> <li>② 学校教育の推進</li> <li>③ 学校施設のバリアフリー化の推進</li> </ul>
(3) 障がいのある子どもの日中活動支援の充実	<ul style="list-style-type: none"> <li>① 放課後・長期休業時の活動の場の充実</li> <li>② 日中一時支援の充実</li> </ul>
(1) 就労支援体制の充実	<ul style="list-style-type: none"> <li>① 総合的な支援体制の構築</li> <li>② 就労移行への支援</li> </ul>
(2) 一般就労の推進	<ul style="list-style-type: none"> <li>① 障がいのある人の雇用促進</li> <li>② 職場体験等の機会の提供</li> <li>③ 市役所における障がい者雇用の推進</li> </ul>
(3) 就労に向けた日中活動の推進	<ul style="list-style-type: none"> <li>① 就労に向けた日中活動の場の充実</li> <li>② 授産活動の促進</li> </ul>
(1) 健康づくりの推進	<ul style="list-style-type: none"> <li>① 保健事業の推進</li> <li>② こころの健康づくりの推進</li> </ul>
(2) 医療体制の充実	<ul style="list-style-type: none"> <li>① 医療相談支援、診療体制の充実</li> <li>② 保健・医療・福祉の連携強化</li> <li>③ 医療体制の整備</li> </ul>
(1) 相談支援体制の充実	<ul style="list-style-type: none"> <li>① 総合的な相談体制の充実</li> <li>② 地域自立支援協議会の推進</li> </ul>
(2) 地域生活支援の充実	<ul style="list-style-type: none"> <li>① 地域生活を支える福祉サービスの充実</li> <li>② 日中活動の場の整備</li> <li>③ 暮らしの場の確保の推進</li> <li>④ 精神保健施策の推進</li> </ul>
(3) 社会参加・参画の促進	<ul style="list-style-type: none"> <li>① 社会参加・参画の推進</li> </ul>
(1) 生活・住環境の整備	<ul style="list-style-type: none"> <li>① バリアフリーのまちづくりの推進</li> <li>② 障がい者に配慮した住宅整備等の推進</li> </ul>
(2) 安心安全なまちづくりの推進	<ul style="list-style-type: none"> <li>① 防災対策の推進</li> <li>② 防犯対策の推進</li> <li>③ 交通安全対策の推進</li> </ul>

## 第4節 基本方向と考え方

### I 啓発・交流の推進

～ 障がいや理由とした差別をなくし、共に生きる地域社会をめざして～

#### 1 現状と課題

昭和56年（1981年）の「国際障害者年」では、「完全参加と平等」をスローガンに「ノーマライゼーション」の理念に基づく社会のあり方が提起され、「すべての人間は、生まれながらにして自由であり、人間として尊ばれ、諸権利を有し、平等である」と示しているように、障がいのある人も社会の一員として、すべて「平等」という目標の実現を推進すると宣言されました。

また、平成18年（2006年）には、国連総会において「障害者の権利に関する条約」が採択され、障がいのある人への差別をなくし、実質的な平等を確保することを目標とされました。

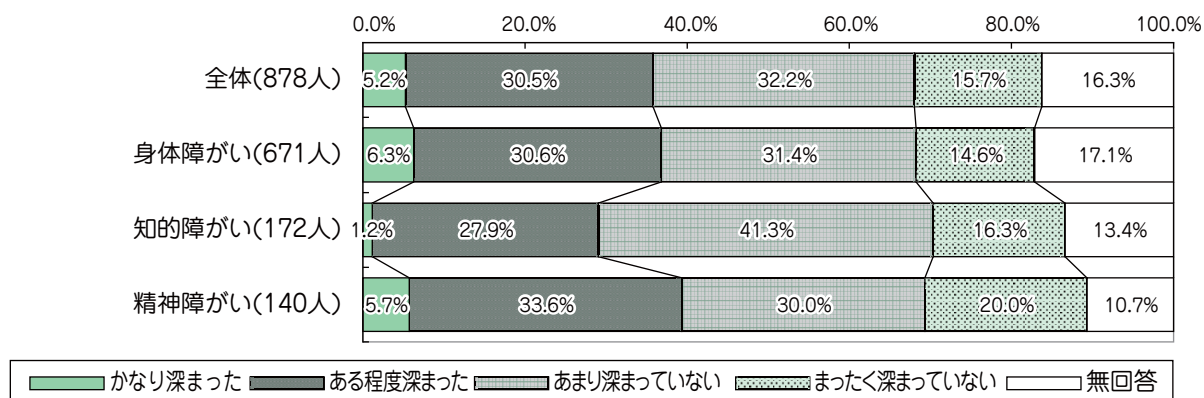
障がいのある人への「差別」や「虐待」は、障がいのある人の尊厳を著しく侵し、自立及び社会参加に深刻な影響を与えることから大きな社会問題となっており、人権擁護の観点からも、国においては、差別の禁止、虐待の防止などの法制度の構築が検討されています。

本市においても、障がいのある人もない人も、互いに支え合い、地域で生き生きと明るく豊かに暮らしていける社会をめざして、「ノーマライゼーション」の理念に基づき、障がいのある人の自立と社会参加を促進してきました。

今後、さらにすべての市民の障がいへの正しい理解・認識を深め、共に地域で生活する仲間として、障がいのある人の人権を尊重し、障がいを理由とした差別のない社会づくりを進めることが必要です。

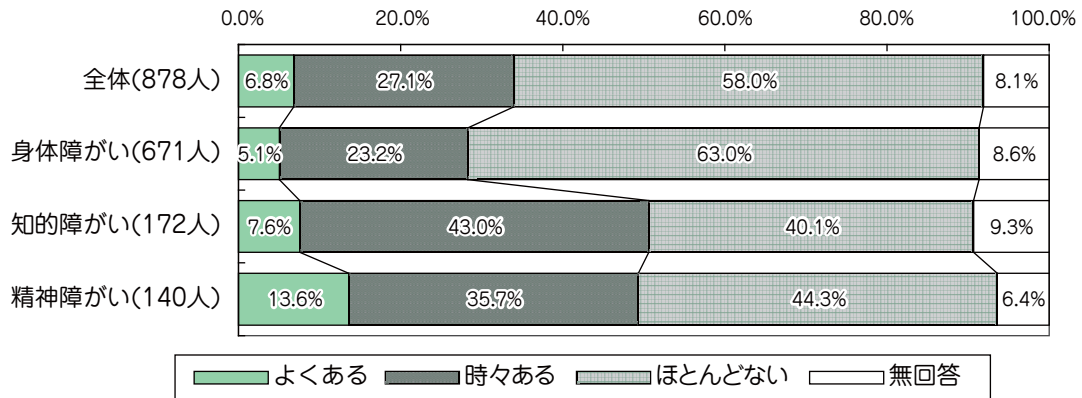
アンケート調査では、周囲の人の視線や言動、近所づきあい、就職活動、学校での生活、公共施設などで、不適切な対応をされたことがあり、障がいがあることで差別を受けたり、不快な思いをした経験がある人は少なくないという結果が出ています。

■ 図 3-4-1 障がいや障がいのある人への市民の理解の割合

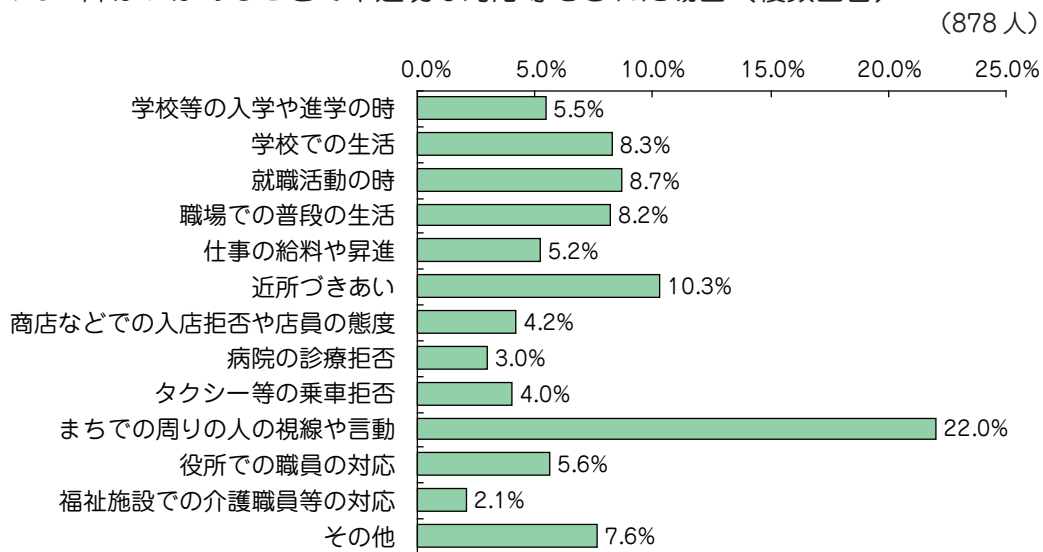


資料：第3期吹田市障がい者計画策定のためのアンケート調査結果

■ 図 3-4-2 障がいがあることで不適切な対応等をされた経験の有無



■ 図 3-4-3 障がいがあることで不適切な対応等をされた場面（複数回答）



資料：第3期吹田市障がい者計画策定のためのアンケート調査結果

これまで、生活に必要な保健、医療、福祉に関するサービス情報等については、手帳の交付時等に「障がい者（児）福祉のてびき」や「精神保健福祉のてびき」を配付しており、また、「点字版市報すいた」や「声の市報すいた」を発行してきましたが、誰もが利用しやすい情報提供を充実する必要があります。

さらに、市職員等へは、新規採用時や人権研修時に障がいにかかわる啓発研修を実施してきました。今後、障害者の権利に関する条約などの新たな課題に対する研修も実施し、障がいへの理解を深める必要があります。

また、12月の障がい者週間に授産施設の製品を展示、販売するなど市民参加型の交流・啓発活動の催しなどを行うことで、交流の機会も増え理解が広がりつつありますが、障がいについての正しい理解や交流機会の拡大など、これまで以上に充実させていく必要があります。

地域生活における参加と参画を促進するために、地域活動やボランティア活動を推進しており、手話通訳ボランティア、点訳ボランティア及び要約筆記者等の養成講習会を開催し、これらを受講した多くの方が地域のボランティアとして活躍しています。

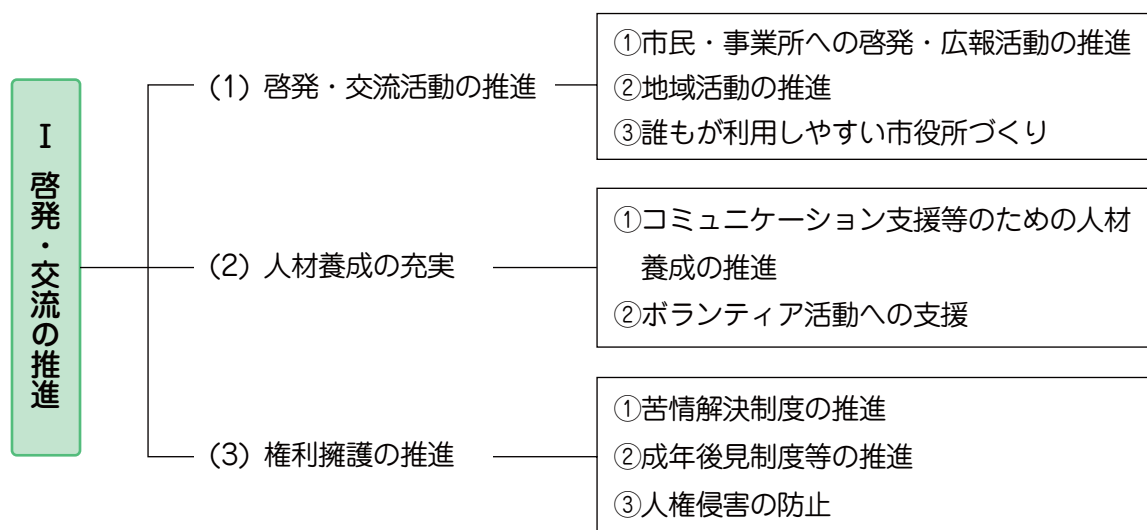
ボランティアをはじめとしてNPO法人などの市民活動を促進し、地域活動を活性化することは、障がいのある人が日常生活を送るうえで、公的サービスと同様に必要不可欠なものです。



## 2 施策の基本方向

- (1) 障がいへの偏見や障がいのある人への差別がないよう、地域住民の相互の理解を深めるための啓発・広報活動や交流活動を積極的に推進します。
- (2) ボランティアなどの人材養成に努めるとともに、さまざまな機会を捉え、障がいに関する正しい知識の普及と啓発に努め、障がいのある人の社会参加を促進します。
- (3) 社会の一員として、あらゆる分野に参加・参画し、生きがいを持って生活を営めるよう、障がいを理由とした差別をなくすとともに、人としての権利を尊重し、安心して暮らせる社会づくりを推進します。
- (4) 市職員の障がいへの理解を深めるとともに、あらゆる行政サービスを、すべての市民に対し公正かつ平等に提供します。

## 3 重点施策、具体的な取組



### (1) 啓発・交流活動の推進

基本施策	基本施策の内容	担当窓口
①市民・事業所への啓発・広報活動の推進	ア 市報、ホームページ、ケーブルテレビ等を活用した啓発・広報活動の推進 ●メディアを活用した市民への啓発・広報活動の充実	障がい者くらし支援室 広報課 人権平和室
	イ 情報のバリアフリー化を推進 ●「点字版市報すいた」「声の市報すいた」「声の議会だより」の発行 ●音声読み上げソフトに対応したホームページの作成 ●市の事業や計画などの情報提供における情報のバリアフリー化の推進 ●ケーブルテレビで手話放送等による情報提供の推進	障がい者くらし支援室 広報課 議会事務局 各室課
	ウ 啓発活動の充実 ●障がい者週間（12月）に啓発・交流行事の開催 ●啓発活動の充実	障がい者くらし支援室 人権平和室 こども支援交流センター

基本施策	基本施策の内容	担当窓口
②地域活動の推進	ア 相互の理解を深め合う交流機会や交流の場の提供 ●障がい者授産製品常設展示販売所の支援 ●気軽に参加できる地域情報の提供 ●障がいのある人も参加できるよう地域への働きかけ	障がい者くらし支援室 内本町地域保健福祉センター 亥の子谷地域保健福祉センター 各室課
	イ 地域行事等への参加促進 ●自ら社会に参加・参画できるよう情報提供の充実	障がい者くらし支援室 内本町地域保健福祉センター 亥の子谷地域保健福祉センター 各室課
③誰もが利用しやすい市役所づくり	ア 障がいへの理解向上のための市職員研修の充実 ●新規採用職員研修の充実 ●関係部署の職員研修の充実 ●人権研修等の充実 ●障がいの新たな課題に関する研修の実施	障がい者くらし支援室 職員研修所 人権平和室 各室課
	イ すべての人への平等なサービスの提供 ●市主催の講演会や説明会における手話通訳者等の配置などのコミュニケーション支援の充実 ●市役所本庁舎等のバリアフリー化の推進	障がい者くらし支援室 自治法務室 各室課

## (2) 人材養成の充実

基本施策	基本施策の内容	担当窓口
①コミュニケーション支援等のための人材養成の推進	ア ホームヘルパー・ガイドヘルパーの養成 ●養成講座の充実	障がい者くらし支援室
	イ 手話通訳、点訳、要約筆記者等の養成 ●各種養成講座の充実（手話通訳、点訳、音訳、対面朗読、要約筆記など）	障がい者くらし支援室 中央図書館
②ボランティア活動への支援	ア 自主的・主体的な地域活動への支援 ●ボランティア活動への支援	障がい者くらし支援室
	イ ボランティアセンターへの支援 ●拠点となるボランティアセンターの運営支援	福祉総務課

### (3) 権利擁護の推進

基本施策	基本施策の内容	担当窓口
①苦情解決制度の推進	ア 福祉オンブズパーソン制度の啓発・周知 ●公正中立な立場からの保健福祉サービスの提供	福祉総務課
②成年後見制度等の推進	ア 成年後見制度等の推進 ●成年後見制度利用支援事業の充実 ●日常生活自立支援事業の周知、利用促進	障がい者くらし支援室 内本町地域保健福祉センター 亥の子谷地域保健福祉センター 総合福祉会館 福祉総務課
③人権侵害の防止	ア 人権侵害の防止 ●人権を尊重し、差別のない社会づくりの推進 ●早期発見・早期対応を行うための救済体制の検討	障がい者くらし支援室 人権平和室
	イ 虐待の防止 ●早期発見・早期対応を行うための救済体制の検討 ●障がいのある人の虐待防止に向けた施策の検討	障がい者くらし支援室 人権平和室 こども政策室 総合福祉会館

### 4 施策区分ごとの取組状況における指標

項目	説明	現況値 平成 21 年度 (2009 年度)	目標値 平成 27 年度 (2015 年度)
障がいや障がいのある人についての「市民の理解の割合」	障がいのある人が感じる「市民の理解の割合」(注)	35.7%	50%

(注)

現況値(平成 21 年度)は、「第 3 期吹田市障がい者計画策定のためのアンケート調査」の 18 歳以上の障がい者手帳所持者対象調査の結果に基づく。

## Ⅱ 育成・教育の充実

～ 障がいのある子どもたちの健やかな成長・発達をめざして～

### 1 現状と課題

障がいのある子どもの健やかな成長・発達のために必要な療育・教育が受けられるよう、乳幼児から学校卒業まで一貫して支援し続ける仕組みが求められています。

平成 19 年（2007 年）11 月に、0 歳から 18 歳までの障がいのある子どもとその保護者を支援する拠点施設として、通園療育機能と地域療育機能を併せ持った「こども支援交流センター」を開設しました。

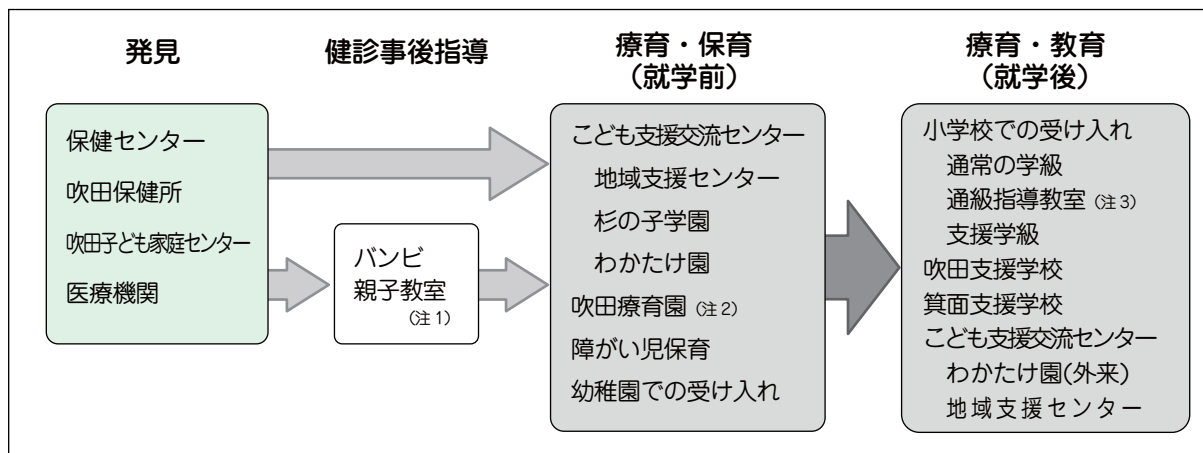
こども支援交流センターでは、通園療育機能として、わかたけ園（肢体不自由児通園施設）及び杉の子学園（知的障がい児通園施設）において、就学前の障がいのある子どもを対象に機能訓練・保育、小集団の療育を行い、また、地域療育機能として、地域支援センターが中心となって、学齢期を含む親子教室、専門相談、言語や運動の訓練、保育所、幼稚園、留守家庭児童育成室に出向く巡回相談などニーズに応じた療育支援等を行っています。

保育所でも、集団保育を受けることにより、その発達を援助する障がい児保育を実施しています。公立 18 か所、私立 24 か所の計 42 か所の保育所があり、平成 22 年（2010 年）4 月 1 日現在、障がいのある子どもの数は 143 人となっています。

一人ひとりの成長や障がいに応じて必要な療育が必要なときに受けられるよう、健診後の親子教室や療育施設の受け入れ体制の充実を図るとともに、地域の子育ての場ですべての子どもたちが、共に学び、育ち合うことができるよう、保育所、幼稚園、学校における障がいのある子どもの受け入れ体制の充実に引き続き取り組んでいく必要があります。

障がいのある子どもを抱える家庭の中には、ひとり親家庭や共働き家庭、障がいのある子どもが複数いる家庭等、さまざまな課題があり、支援の緊急性、必要性が高い保護者に家族の状況に応じた支援の充実を図っていきます。

■ 図 3-4-4 障がいの早期発見・早期療育のシステム



(注 1) 総合福祉会館内で実施している親子教室。1 歳 6 か月児健診事後指導事業として実施  
(注 2) 民間の肢体不自由児通園施設  
(注 3) 通常学級に在籍する心身に軽度の障がいがある児童を対象とした指導教室

こども支援交流センターでは、障がいのある子どもや保護者には、相談による支援や居場所・交流の場を提供し、地域生活を支援するためのボランティアの育成など、地域全体で障がいのある子どもの健やかな育ちを支援する基盤づくりを、引き続き推進していきます。

このような多様な状況において、保健、医療、福祉、教育等が連携し、乳幼児期から学齢期までの継続的な療育、保護者支援を進めるための療育システムの推進を図っていきます。

学校教育については、平成22年度（2010年度）では、吹田市及び近隣の支援学校等に約260人の児童・生徒が通っていますが、人権尊重と社会連帯の精神、ノーマライゼーションの理念に基づき、全校的な支援体制のもとに、障がいのある子どもへの理解を深め、すべての児童・生徒が、共に学び、共に育つよう、特別支援教育の推進を図っています。

また、特別な支援が必要な児童・生徒への的確な教育・指導にあたっては、特別支援教育に関する研修を実施し、専門的な知識や認識を深めています。

障がいのある子どもの社会参加、自立を実現させるため、個別の教育支援計画及び個別の指導計画を作成し、活用することで、療育、保健、福祉等の関係機関との連携、進路を見通した一人ひとりに応じた教育課程の編成・実施を行っています。

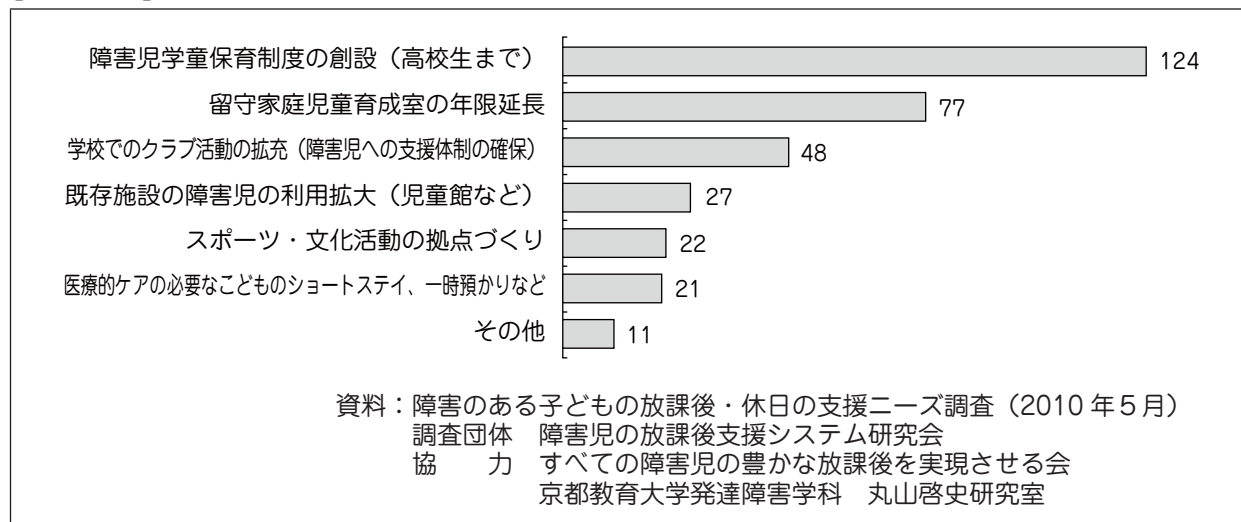
市教育委員会では、障がいの多様化、重度重複化、支援学級の在籍児童・生徒や発達障がいのある子どもの増加などの実態に対し、よりの確な対応を図るため、支援学級・通級指導教室の設置、施設・設備の改善、また、教育センターでの巡回相談の実施など、特別支援教育のより一層の充実を図っていく必要があります。

放課後等の支援対策として、現在、公立小学校35校のすべてに留守家庭児童育成室を設置し、保護者の就労等により保育に欠ける小学校1年生から小学校3年生までの障がいのある子どもを含む児童を対象に「留守家庭児童育成室事業」を実施しています。平成22年（2010年）4月1日現在の在籍児童数は2,089人であり、うち障がいのある子どもの数は102人となっています。

小学校4年生以上の放課後の支援対策については、保護者等が経済的な理由により働き続けなければならないなど、ニーズが高いものの十分ではなく、喫緊の課題となっています。

「障害児の放課後支援システム研究会」が、平成22年度（2010年度）に行ったアンケート調査（以下の「参考資料」を参照）でも、留守家庭児童育成室の小学校4年生以上の対象者の拡大や支援学校でのクラブ活動などの充実などが求められています。

【参考資料】吹田市に必要なだと考える施策（2つまで回答）181人 (人)



そのため、本市では、放課後や長期休業時に保護者の就労支援や一時的休息を行うため、子ども支援交流センターや竹見台多目的施設で、自主運営団体が行っている障がいのある子どもの見守りの場に支援を行い、対象者を中学生まで拡大し対応してきました。

また、障がいのある子どもの放課後や長期休業時の支援対策として、日中活動の場や保護者等の一時的休息を確保するため、障害者自立支援法に基づく日中一時支援事業を拡充し実施してきましたが、更に利用しやすいサービスとなるよう、あらゆる社会資源を活用して支援の充実に努める必要があります。

今後も、障がいのある子どもの放課後や長期休業時の支援対策は、保護者等のニーズや緊急性が高く、子どもたちが豊かに活動できる場を確保するうえで重要な課題であり、更なる支援の充実に検討していく必要があります。

そのほか、保健、医療、児童、教育との連携を図りながら、子どもたちの成長・発達の確認と育児支援を目的として乳幼児健康診査の実施など、さまざまなニーズに対応してきました。今後さらに、学習障がい（LD）や注意欠陥多動性障がい（ADHD）、高機能自閉症などの発達障がいのある子どもたちへは、ライフステージに応じた適切な支援やリハビリテーションの提供等の支援体制を充実していくことが必要です。

また、保護者が子どもの障がいを受け止め、その能力や可能性を最大限に伸ばし、自立し社会参加するために必要な力を培うため、一人ひとりの障がいの特性に応じ、専門的な相談・指導や情報提供など、きめ細やかな支援を行うことが必要です。

■図 3-4-5 全国の特別支援教育を受けている幼児・児童・生徒数

(人)

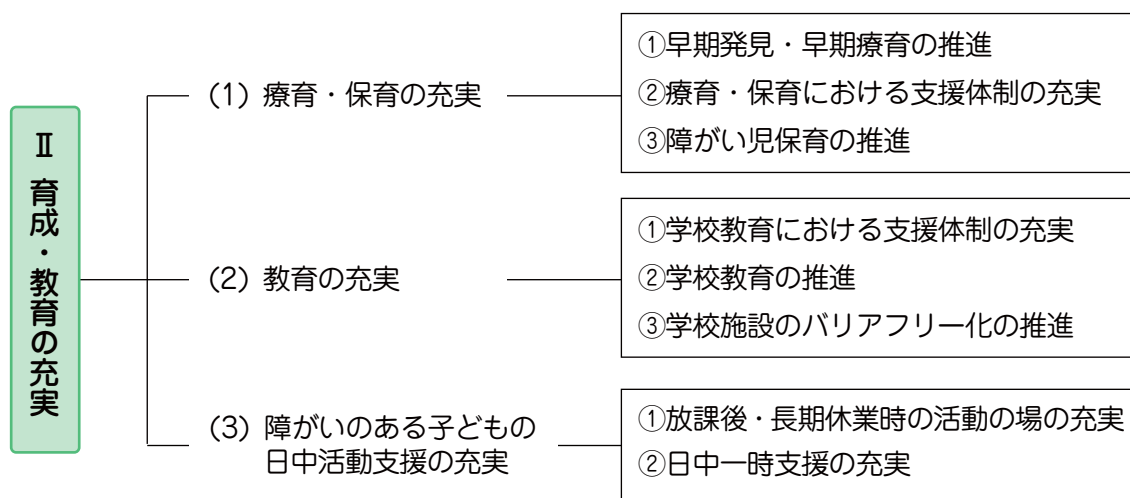
区分	在籍者数			
	幼稚部	小学部	中学部	高等部
視覚障がい	265	1,714	1,077	2,742
聴覚障がい	1,247	3,096	1,809	2,309
知的障がい	250	30,811	23,735	47,288
肢体不自由	188	13,507	7,979	9,412
病弱・身体虚弱	34	7,459	5,290	6,143
合計	1,984	56,587	39,890	67,894

資料：文部科学省「学校基本調査」（平成 21 年（2009 年）5 月 1 日現在）

## 2 施策の基本方向

- (1) 保健、医療、福祉、教育等各分野の関係機関との連携を強化し、保護者の不安を解消するため福祉・医療等の相談窓口の情報を発信するとともに、乳幼児期から学校卒業に至るまで一貫した相談支援及び療育・教育体制づくりに取り組みます。
- (2) 発達障がいを含めたすべての障がいのある子どもに、一人ひとりのニーズに応じた適切な教育を行うため、特別支援教育を推進します。
- (3) 保護者の就労支援や介護による負担などを軽減するため、放課後や長期休業時の支援内容を検討し、子どもたちの豊かな生活が確保できるよう努めます。
- (4) 障がいの特性に応じた支援体制の整備や、教育施設の設備、備品等のバリアフリー化などの環境整備に取り組みます。

## 3 重点施策、具体的な取組



### (1) 療育・保育の充実

基本施策	基本施策の内容	担当窓口
①早期発見・ 早期療育の推進	ア 早期発見・早期療育の推進 ●乳幼児健康診査による早期発見・早期療育の推進 ●療育へつなげるための療育機関や医療機関などの関係機関との連携強化	保健センター
	イ 健康診査後の相談支援体制の充実 ●各種健康診査後の経過観察を必要とする乳幼児への相談支援、事後指導教室の充実	保健センター こども支援交流センター 子育て支援課

基本施策	基本施策の内容	担当窓口
②療育・保育における支援体制の充実	ア 個々のニーズに合った療育支援体制の充実 <ul style="list-style-type: none"> <li>●療育システムの推進</li> <li>●こども支援交流センター（地域支援センター・杉の子学園・わかたけ園）の療育機能・整備の充実</li> <li>●保育所、幼稚園、留守家庭児童育成室への巡回相談の充実</li> <li>●療育施設での親子教室の充実</li> <li>●理学療法・作業療法等の外来訓練の充実</li> <li>●乳幼児期から学校へつなぐ一貫した療育の推進</li> </ul>	こども支援交流センター 保育課 幼稚園課
	イ 育児相談・指導の推進 <ul style="list-style-type: none"> <li>●コーディネーターなどによる発達相談、療育相談、言語相談の充実</li> </ul>	こども支援交流センター 保健センター
③障がい児保育の推進	ア 障がい児保育・教育の充実 <ul style="list-style-type: none"> <li>●発達障がいを含む障がいのある子どもの集団保育の受け入れの促進</li> <li>●保育所、幼稚園における障がい児保育・教育の充実</li> <li>●介助保育士・介助員の適正な配置</li> </ul>	こども支援交流センター 保育課 幼稚園課

## (2) 教育の充実

基本施策	基本施策の内容	担当窓口
①学校教育における支援体制の充実	ア 個々のニーズに合った支援体制の充実 <ul style="list-style-type: none"> <li>●就学相談・進路相談の充実</li> <li>●専門家による巡回指導の充実</li> <li>●教職員研修の充実による専門性の確保</li> </ul>	指導課 教育センター
	イ 教育センター機能の充実 <ul style="list-style-type: none"> <li>●発達障がいのある子どもへの支援のため、幼稚園、小学校、中学校への巡回相談の充実</li> <li>●特別支援教育研修の充実</li> </ul>	教育センター
②学校教育の推進	ア 個々の発達課題に応じた特別支援教育の充実 <ul style="list-style-type: none"> <li>●個別の教育支援計画及び個別の指導計画の作成、活用</li> <li>●教職員、障がい児介助員の適正な配置</li> </ul>	指導課 教職員課
	イ 人権教育・福祉教育の推進 <ul style="list-style-type: none"> <li>●児童、生徒が、障がいに関する理解を深めるための教育や交流活動の推進</li> </ul>	指導課 教育政策室
③学校施設のバリアフリー化の推進	ア 学校施設、設備等のバリアフリー化を促進 <ul style="list-style-type: none"> <li>●支障なく学校生活を送られるよう学校施設や設備、備品等のバリアフリー化の推進</li> </ul>	学校施設課 指導課 教育総務課



### (3) 障がいのある子どもの日中活動支援の充実

基本施策	基本施策の内容	担当窓口
①放課後・長期休業時の活動の場の充実	ア 保護者の就労等のための放課後等の支援の充実 ●留守家庭児童育成室事業の充実	障がい者くらし支援室 児童育成課
	イ 小学校4年生以上の放課後等の支援の充実 ●障がいのある子どもの放課後等対策の検討 ●放課後・休日支援事業の充実	障がい者くらし支援室 児童育成課 指導課 こどもプラザ推進室 こども支援交流センター
	ウ 障がいのある子どもを支える地域づくりの推進 ●障がいのある子どもの地域での活動への支援 ●障がいのある子どもと保護者の居場所・交流の場の提供	子育て支援課 こども支援交流センター
②日中一時支援の充実	ア 児童デイサービス、日中一時支援事業の充実 ●児童デイサービス、日中一時支援の実施事業所の充実	障がい者くらし支援室

#### 4 施策区分ごとの取組状況における指標

項目	説明	現況値 平成21年度 (2009年度)	目標値 平成27年度 (2015年度)
児童デイサービス、 日中一時支援事業所の充実	市内で児童デイサービス、 日中一時支援を実施する 事業所数	6事業所	12事業所

### Ⅲ 雇用・就労の支援

#### ～ 障がいのある人の就労の場の確保と豊かな活動をめざして ～

##### 1 現状と課題

障がいのある人が社会の一員として、自立した生活を営み、より一層、社会参加ができるようになるためには、能力や個性、希望に応じて社会参加し、生きがいを感じ、自己実現を図れるよう、多様な働き方が選択できる環境づくりを引き続き進める必要があります。

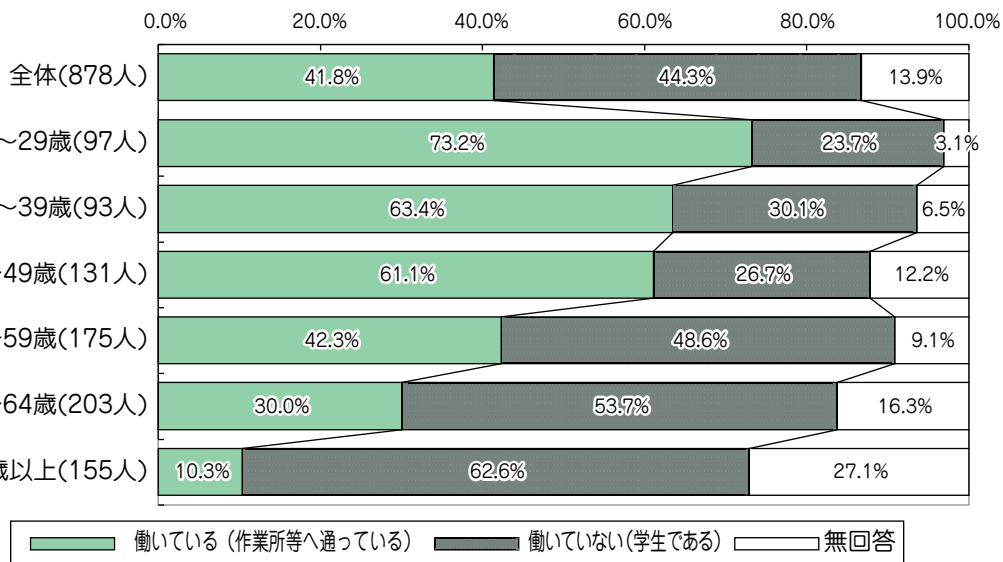
現在、国では「障害者の雇用の促進等に関する法律」の見直しが進められており、障がいのある人が自らの能力を發揮し、一般の就労者と同様に安全で健康的な労働環境を確保するため、障がいを理由とする差別の禁止、事業主への雇用条件の義務付け、労使間の紛争解決手続きの整備など具体的な方策について検討が行われています。

「障害者の雇用の促進等に関する法律」に基づく法定雇用率 1.8%を達成している全国の企業の割合は、平成 21 年度（2009 年度）では、45.5%（前年度 44.9%）です。雇用率が著しく低い企業に対しては、雇入れ計画の作成命令や企業名の公表など、雇用率達成に向け、国の指導が実施されています。

また、障がいのある人の雇用には格差があり、障がいの種別によって労働条件や賃金、安全かつ健康的な作業条件などが異なることから、抜本的な改善策が求められています。

平成 22 年（2010 年）6 月 1 日現在、市役所における障がいのある人の雇用率は 2.93%であり、法律で示されている法定雇用率の 2.1%を超える雇用状況ですが、第 2 期障害者計画で掲げた 3%の目標値には達しておらず、今後も、引き続き、雇用拡大の取組を進めていきます。

■ 図 3-4-6 年齢階層別就業率



資料：第 3 期吹田市障がい者計画策定のためのアンケート調査結果

就労支援としては、すいた障がい者就業・生活支援センターや各就労支援機関と連携し、障がいのある人の職業訓練から就職、職場定着に至るまでの相談・支援を行っています。

しかし、市民の生活を脅かす世界的な不況により、民間企業等での障がいのある人の雇用はますます厳しい状況にあります。

障がいのある人に多様な働き方を提供していくためには、企業が障がいに関する理解を深め、雇用するための施設や設備面での条件整備を行うとともに、従業員に対する指導や啓発なども必要です。

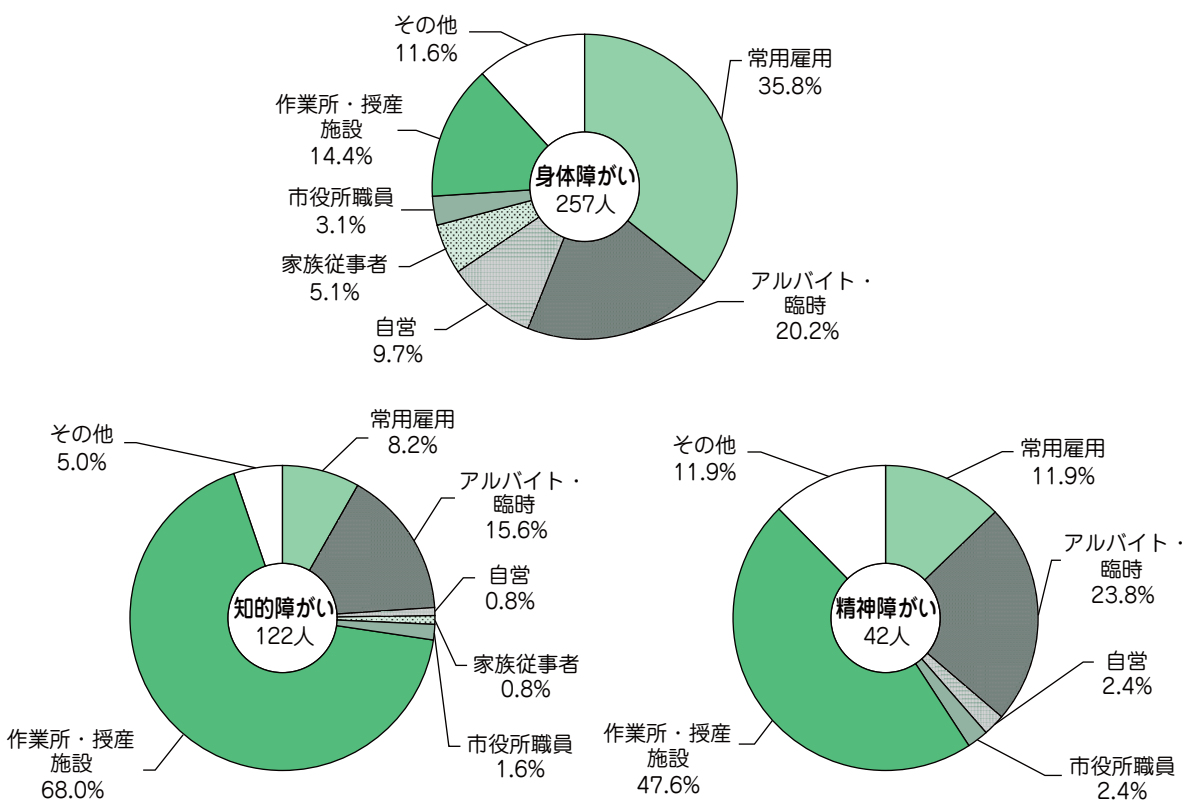
障がいのある人のさらなる雇用の促進を図るために、企業には障がいのある人の短期間試用雇用制度（トライアル雇用制度）の活用や職場実習の受け入れを行い、仕事の適性を図るなどの実践的な取組を働きかけていく必要もあります。

併せて、公的事業等においても、障がいのある人の雇用の促進につなげるための物品購入や、委託業務の発注による仕事量を確保するとともに、総合評価一般競争入札制度等の取組について検討を進めていく必要があります。

また、毎年、特別支援学校の高等部を50人程度の生徒が卒業していく見込みであり、職業訓練機会の確保や就業機会の拡大、法定雇用率の遵守など、雇用促進に向けて積極的な啓発と障がいへの理解を深めていく必要があります。

さらに、重度の障がいのある人の日中活動の場として、自立訓練、就労移行支援等の日中活動系サービスの充実や就労に関する情報提供、相談支援など、雇用・就労における関係機関の連携も図り、総合的な支援体制づくりが必要です。

■図 3-4-7 障がい別の就業実態



資料：第3期吹田市障がい者計画策定のためのアンケート調査結果

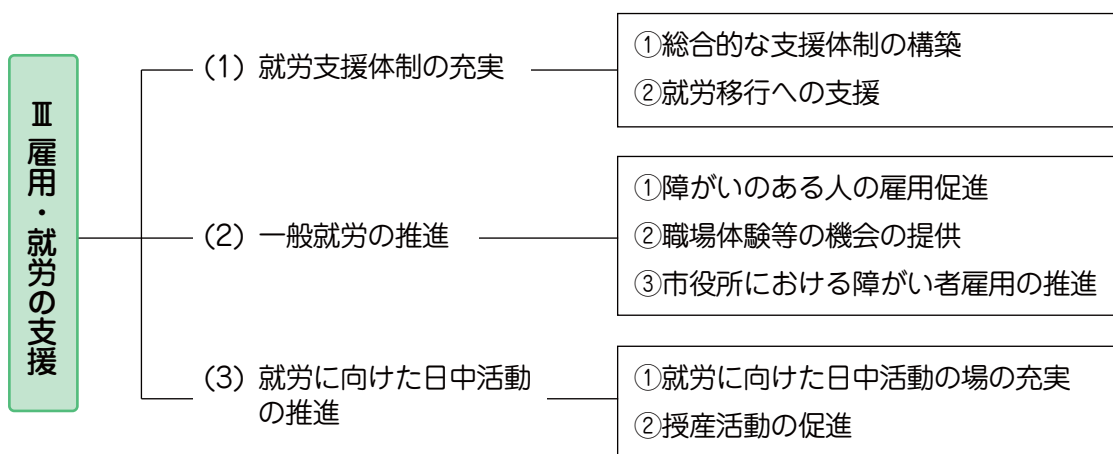
【特別支援学校高等部の卒業見込み生徒数について】

平成22年度：約30人、平成23年度：約50人、平成24年度：約60人

## 2 施策の基本方向

- (1) 公共職業安定所や福祉施設、支援学校等の地域関係機関の連携を強化し、一般就労に結び付ける相談体制の充実や就労専門員による支援体制の充実を図ります。
- (2) 障がいのある人への雇用・就労の促進を図るため、市内事業所に対し、雇用への理解と啓発等を行うとともに、就労しやすい環境づくりを推進します。
- (3) 障がいのある人が一般就労するために、計画的な訓練や指導、事業所における作業実習や職場体験を実施し、適性に応じた就労移行のための支援などを推進します。
- (4) 市役所において、障がい者雇用率3%を目標に、障がいのある人の雇用を推進します。
- (5) 障がいのある人が、生きがいを持って働くことができ、働く喜びを実感できる日中活動の場等の確保に努めます。

## 3 重点施策、具体的な取組



### (1) 就労支援体制の充実

基本施策	基本施策の内容	担当窓口
①総合的な支援体制の構築	ア 関係機関の連携による相談支援体制の充実 ● 公共職業安定所、すいた障がい者就業・生活支援センター、障がい者相談支援事業所、各就労支援機関の連携強化による相談体制の充実	労働政策室 障がい者くらし支援室
②就労移行への支援	ア 就労に必要な知識や能力を向上させる訓練の場の提供 ● 一般就労に結び付く就労移行支援の促進 ● 新体系事業所への運営支援	障がい者くらし支援室
	イ 就労に向けた支援体制の推進 ● ジョブコーチ、ジョブライフサポーターを活用した一般就労への支援の推進	労働政策室 障がい者くらし支援室

## (2) 一般就労の推進

基本施策	基本施策の内容	担当窓口
①障がいのある人の雇用促進	ア 法定雇用率の遵守と積極的な雇用の促進 ● 障害者雇用促進月間（9月）等での「障害者の雇用の促進等に関する法律」の啓発・周知 ● 障がいのある人の常用雇用の事業主への支援 ● すいた障がい者就業・生活支援センターを中心とする企業開拓と就労定着支援の充実	労働政策室 障がい者くらし支援室
	イ 公的事業の発注による雇用の促進 ● 障がい福祉サービス事業所の授産製品の購入 ● 障がい福祉サービス事業所への公的業務委託の促進 ● 総合評価一般競争入札制度などの障がいのある人の雇用促進につながる取組の検討	契約検査室 障がい者くらし支援室 各室課
②職場体験等の機会の提供	ア 一般就労に向けた支援の充実 ● 一般事業所等での就労体験実習・訓練の場の提供 ● 市役所での実習生の受け入れの推進 ● 就労のための移行支援事業の促進 ● 短期間試行雇用制度（トライアル雇用制度）の促進	障がい者くらし支援室 各室課
③市役所における障がい者雇用の推進	ア 市役所における障がいのある人の雇用の促進 ● 障がい種別による区分のない職員採用の検討 ● 障がいのある人の雇用率3%をめざす	人事課

## (3) 就労に向けた日中活動の推進

基本施策	基本施策の内容	担当窓口
①就労に向けた日中活動の場の充実	ア 障がいのある人のための日中活動の場の提供 ● 重度障がいのある人のための日中活動の場の整備 ● 重度障がいのある人の通所施設への支援の充実 ● 共同作業所等への運営支援 ● 新たな日中活動の場の整備	障がい者くらし支援室
	イ 障害者自立支援法に基づく新体系への移行支援 ● 共同作業所等の新体系事業への移行支援	障がい者くらし支援室
②授産活動の促進	ア 授産活動の支援 ● 授産製品の常設展示販売所の提供 ● 障がい福祉サービス事業所への公的業務委託の促進	障がい者くらし支援室 各室課

## 4 施策区分ごとの取組状況における指標

項目	説明	現況値 平成22年 (2010年)6月現在	目標値 平成27年度 (2015年度)
市役所の障がいのある人の雇用率	市役所の障がいのある人の雇用の割合	2.93%	3% (注)

(注)

【障害者雇用率制度の改定について】

平成22年(2010年)7月に、障害者の雇用の促進等に関する法律による障害者雇用率制度が改正され、短時間勤務者も障がい者雇用率の算出基礎に含むなど、算出方法の変更がありました。この改正により、平成23年(2011年)6月以降の本市の障がい者雇用率は、法定雇用率(2.1%)は達成しているものの、新たな算定基準では、現在の2.93%より下がることが見込まれるため、引き続き、障がい者雇用率を3%に設定しています。

## IV 保健・医療の充実

～ 住み慣れた地域で、安心して健康に暮らすために ～

### 1 現状と課題

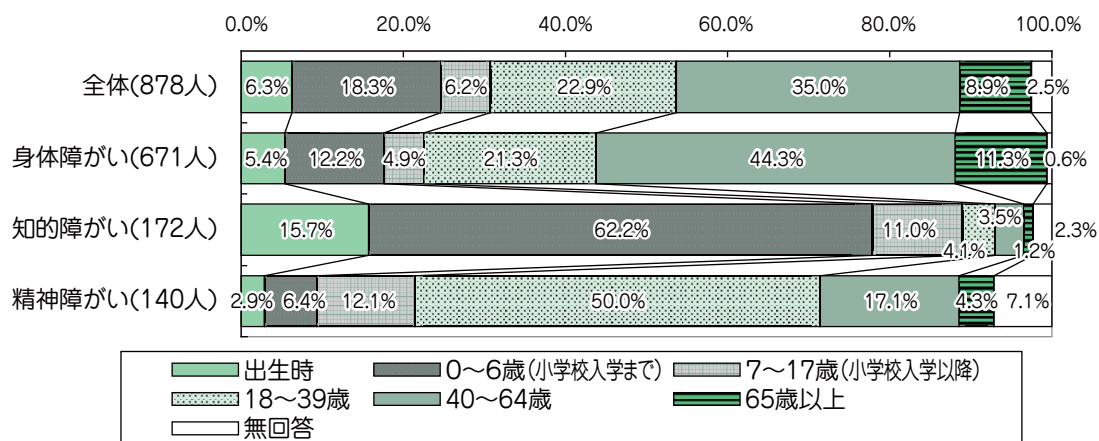
障がいは、できるだけ早期に必要な治療と指導訓練を行うことによって、障がいの軽減や基本的な生活能力の向上につながることから、早期発見、早期治療に結び付けていく体制づくりが重要です。

そのため、本市では身体発育及び精神発達の面から最も重要な時期である4か月児、1歳6か月児、3歳児の健康診査など、発達段階に応じた乳幼児健康診査を実施し、健康の保持増進を図るため、診査後の指導や療育相談など、保健師や栄養士、発達指導員等による専門的な支援を行っています。

また、平成17年度（2005年度）からは、歯科衛生の向上を図るため、成人歯科健康診査において満15歳以上の障がいのある人も健康診査の対象にするとともに、市内の障がい者福祉施設等において歯科健康診査も実施しています。

アンケート調査結果では、障がいが判明した際、「成長段階に応じて、適正かつ継続的な支援を受けられるか不安」、「療育・教育について相談できる専門の相談窓口がわからなかった」という回答が多く、本人やその家族の不安や悩みの解消とライフステージに応じた福祉サービスや医療費助成など、保健、医療、福祉の連携の強化や相談支援体制の充実を図る必要があります。

■ 図 3-4-8 障がいが判明した時期



資料：第3期吹田市障がい者計画策定のためのアンケート調査結果

平成13年（2001年）に開所した障害者支援交流センター「あいほうふ吹田」では、生活介護事業と短期入所（以下「ショートステイ」という。）事業を実施しています。生活介護事業では、主に重度重複障がいのある人、重度知的障がいのある人が、医療専門職と連携した身体のケア、自己主張や自己表現を大切にしながら多彩なプログラム活動、食事、入浴サービスなどを行いながら、生活の質の向上と社会参加の促進を図っています。また、ショートステイ事業では、平成20年度（2008年度）に2床を増床し、7床で実施しています。特に、ここ数年、重度障がいのある利用者が増加傾向にあり、支援体制の充実を図る必要があります。

障がいのある人が、地域で安心して暮らしていくためには、障がいへの正しい知識と市民病院をはじめとする各種医療機関の連携が重要であり、地域生活において受診できる診療環境やいつでも相談できる窓口などを整備し、障がいの早期発見・早期治療に結び付けていくことが必要です。

精神障がいのある人の中には、長期間の入院生活を送っていること、地域での生活の場を失っていることなどから、退院が可能な状態であっても、地域生活にスムーズに移行できずに社会的入院を続けざるを得ない人がいます。

退院が可能な精神障がいのある人の地域移行を進めるためには、保健、医療、福祉の連携を密にし、退院後の住まいや就労等の日中活動などの条件整備を行うとともに、退院前から地域での生活に向けた情報提供や訓練、不安解消のための相談支援などの取組を行う必要があります。

また、医療的ケアを必要とする施設入所者や精神障がいのある人が地域で安心して生活するためには、休日や夜間における障がいに起因する心身の状態の急変に対応できる24時間体制の相談支援や緊急医療体制の充実を図る必要があります。

特に、在宅で重度障がいのある人への対応については、医療機関との連携を図りながら、家族が急に介護できなくなった時などに医療的ケアの対応ができるショートステイや、訪問看護の充実が求められています。今後、医療的ケアが必要な障がいのある人が増加していく傾向であり、医療的ケアの対応ができる日中活動の場の整備をしていく必要があります。

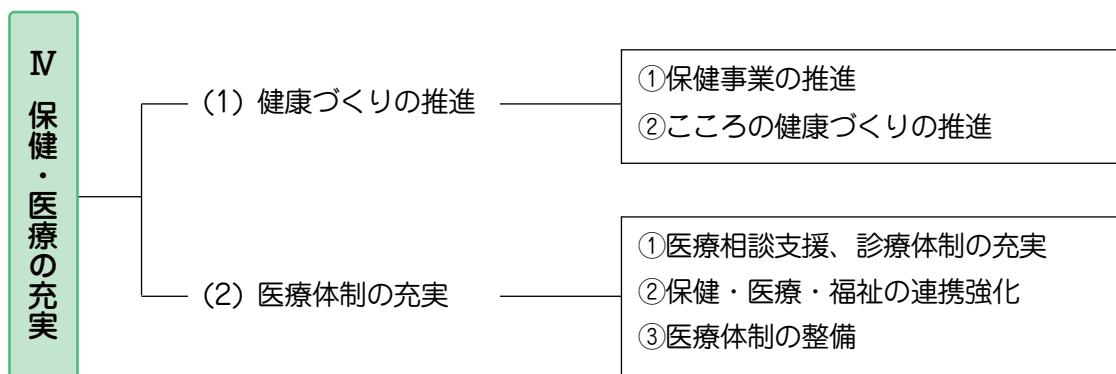
この数年、社会生活の多様化、複雑化により、こころの健康に問題を抱える人が増加し、社会問題になっています。その一方で、こころの健康に問題を抱える人への無理解による偏見も問題となっています。

自らの心身状態の変化に気づき、相談・受診等を行うことで、状態の悪化防止、改善につながることから、ストレスや精神疾患に関する正しい知識の普及を図るとともに、心身の不調に気づいたときに相談・受診できる相談窓口や医療機関に関する情報提供を充実していく必要があります。

## 2 施策の基本方向

- (1) 障がいの早期発見・早期療育を行うため、4か月児・1歳6か月児・3歳児を対象に健康診査を実施するとともに、各種健康診査の受診率の向上、受診後のフォロー体制など、きめ細やかな健康診査システムを提供し、保健、医療、福祉の連携を密にした体制を強化します。
- (2) 医療的ケアを必要とし、在宅で生活する重度障がいのある人への対応については、医療機関との連携を図り、医療的ケアの対応ができるショートステイなど体制づくりを検討します。
- (3) 精神疾患においては、相談窓口や必要な診察が受けられる医療機関の情報を広く市民に提供するとともに、精神疾患についての正しい知識の普及・啓発を図ります。
- (4) 退院が可能な精神障がいのある人の社会的入院の解消をめざし、入院中からの情報提供や相談支援、地域生活への移行に向けた訓練の実施など、保健、医療、福祉の連携を密にした体制づくりを推進します。

### 3 重点施策、具体的な取組



#### (1) 健康づくりの推進

基本施策	基本施策の内容	担当窓口
①保健事業の推進	ア 乳幼児期の疾病などを早期発見し、早期対応を図るための各種健康診査の充実 ● 4か月児・1歳6か月児・3歳児健康診査の充実 ● 診査後の指導、療育機関や医療機関など関係機関との連携による療育の推進	保健センター 子育て支援課 こども支援交流センター
	イ 生活習慣病等の予防のための各種健康診査の充実 ● がん検診の推進 ● 「健康すいた21」に基づく健康づくりの推進 ● 「食育推進計画」に基づく健康保持、増進	保健センター
	ウ 歯科健康診査の充実 ● 成人歯科健康診査の充実 ● 障がい者福祉施設での歯科健康診査の充実	保健センター 障がい者くらし支援室
②こころの健康づくりの推進	ア 精神保健施策の充実 ● 統合失調症や気分障がい（うつ病等）などの精神疾患についての理解の促進 ● 専門職員による相談等の支援体制の充実 ● 自殺予防対策の推進	保健センター 障がい者くらし支援室

#### (2) 医療体制の充実

基本施策	基本施策の内容	担当窓口
①医療相談支援、診療体制の充実	ア 市民病院等の診療体制の充実 ● 市民病院と地域の医療機関との連携により、適切な診療体制の充実 ● 障がいのある人のための診療体制の検討 ● 発達障がいのある人が受診できる環境の整備	市民病院 障がい者くらし支援室
②保健・医療・福祉の連携強化	ア 地域支援ネットワークの推進 ● 保健・医療・福祉の連携強化によるサポート体制づくりの検討	保健センター 市民病院 障がい者くらし支援室 内本町地域保健福祉センター 亥の子谷地域保健福祉センター



基本施策	基本施策の内容	担当窓口
②保健・医療・福祉の連携強化	イ 医療費の公的負担制度の充実 ●医療費の公的負担の継続による経済的負担の軽減	障がい者くらし支援室
③医療体制の整備	ア 地域生活での受診環境の充実 ●医療を受けやすい環境の整備 ●精神障がいのある人に配慮した医療体制の充実	障がい者くらし支援室 保健センター
	イ 医療体制の推進 ●医療機関や訪問看護等の連携による24時間体制の医療相談や医療体制の整備	障がい者くらし支援室 保健センター
	ウ 医療的ケアが行えるショートステイの整備 ●医療的ケアが行えるショートステイサービスの整備の検討 ●医療的ケアの対応ができる日中活動の場の整備	障がい者くらし支援室 市民病院
	エ 在宅難病患者の支援体制の充実 ●ホームヘルプサービスの実施 ●ショートステイサービスの実施	障がい者くらし支援室 市民病院

#### 4 施策区分ごとの取組状況における指標

項目	説明	現況値 平成21年度 (2009年度)	目標値 平成27年度 (2015年度)
医療的ケアが行えるショートステイの整備	医療的ケアが行えるショートステイ施設の床数	0床	4床

## V 暮らしの充実

### ～ 障がいのある人が自立して豊かに暮らしていくために ～

#### 1 現状と課題

障がいにかかわる施策は、障がいのある人の自立と社会参加を促進するための制度などが大きく変化し、特に、平成 15 年度（2003 年度）に導入された支援費制度では、それまで「措置制度」として提供されてきた障がい福祉サービスが、障がいのある人自身が選び、事業者と契約して利用する「契約制度」に変わり、障がいのある人の生活も大きく変化しました。

さらに、平成 18 年（2006 年）4 月には、障害者自立支援法による制度改革が行われ、「応益負担」の導入など福祉サービスは大きく転換しました。

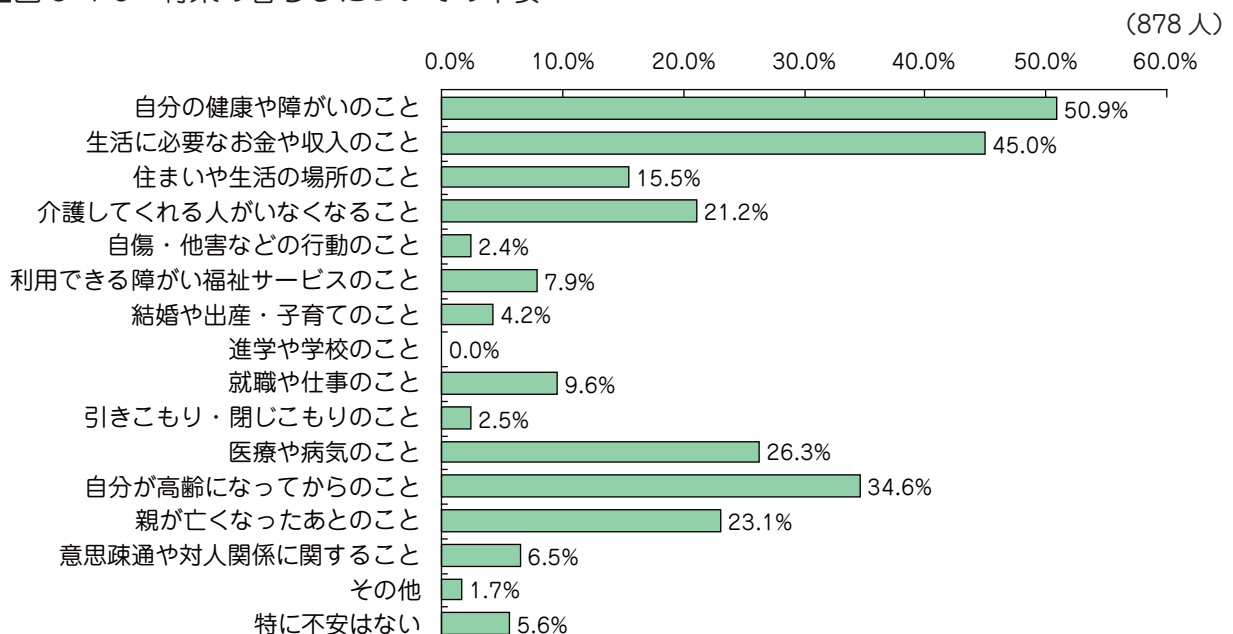
しかし、本市においても、年々、障がいのある人が増加していく中で、障がいの重度化、本人及び介護者の高齢化、また、発達障がいのある人・子どもの増加、障がいの多様化も進むなど、障がいのある人を取り巻く環境は変化し続けています。

国においても、現在、障害者自立支援法の抜本的な見直しや障害者の権利に関する条約の批准に向けた制度改革が進められており、保健、医療、福祉、教育、雇用等の分野を越えて一体的な支援を行うことが必要となっています。

平成 18 年（2006 年）の障害者自立支援法の施行にあたり、本市では、利用者の経済的負担を軽減する独自施策を実施し、障がいのある人や家族の負担を軽減してきました。また、平成 22 年（2010 年）4 月から、国の低所得者等の障がい福祉サービスに係る利用者負担額の無料化に併せ、移動支援事業や日常生活用具給付等事業などについても、市町村民税非課税世帯の利用者負担額を無料にするなどの対策を講じています。

アンケート調査では「将来の暮らしについての不安」という問いに対して、「生活に必要なお金や収入のこと」や「健康や障がいのこと」「介護する人がいなくなること」などの回答が上位を占め、自立した生活を送るための支援の必要性が高いことがわかります。

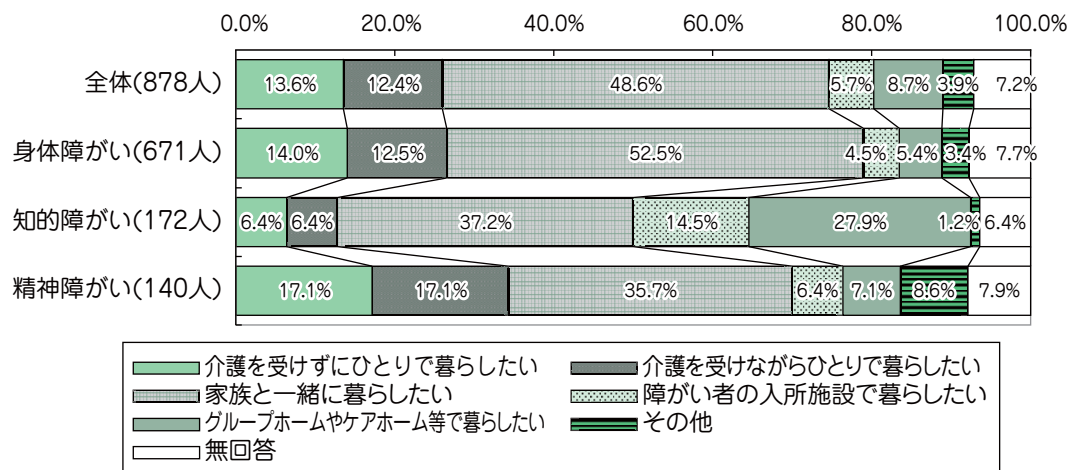
■ 図 3-4-9 将来の暮らしについての不安



資料：第 3 期吹田市障がい者計画策定のためのアンケート調査結果

障がいのある人やその介護者の高齢化により、介護者がいなくなった後の生活の場、退院可能な精神障がいのある人の生活の場としてグループホームやケアホームの需要が高まっており、将来を見据えていく上での生活の場の確保は、最も緊急性の高い重要な課題となっています。

■ 図 3-4-10 希望する将来の暮らし方



資料：第3期吹田市障がい者計画策定のためのアンケート調査結果

さらに、「住まい」があるだけでなく、サービスを受けるために必要な情報の提供や日中活動の場、普段からの見守りや生活上の困りごとについての相談支援、緊急時の支援、家族への支援など、さまざまなサポートも必要になります。

このため、地域の関係団体などと連携して、障がいのある人や家族のくらしの実態やニーズに基づき、本人の自立を見守りながら、生活に必要な手助けを行っていくための仕組みが求められています。

特に、精神障がいのある人が充実した生活を送るための必要な支援として、市民に対し精神疾患についての正しい理解を促進し、立ち遅れている精神障がいのある人へのサービスの充実を図るとともに、病院からの退院促進や日中活動をはじめとした生活全般にかかわる支援を行う必要があります。

さらに、難病や高次脳機能障がいなどの制度のはざまにある人への支援については、個々のニーズに基づいた生活支援や相談支援、医療情報の提供など施策の充実を図る必要があります。

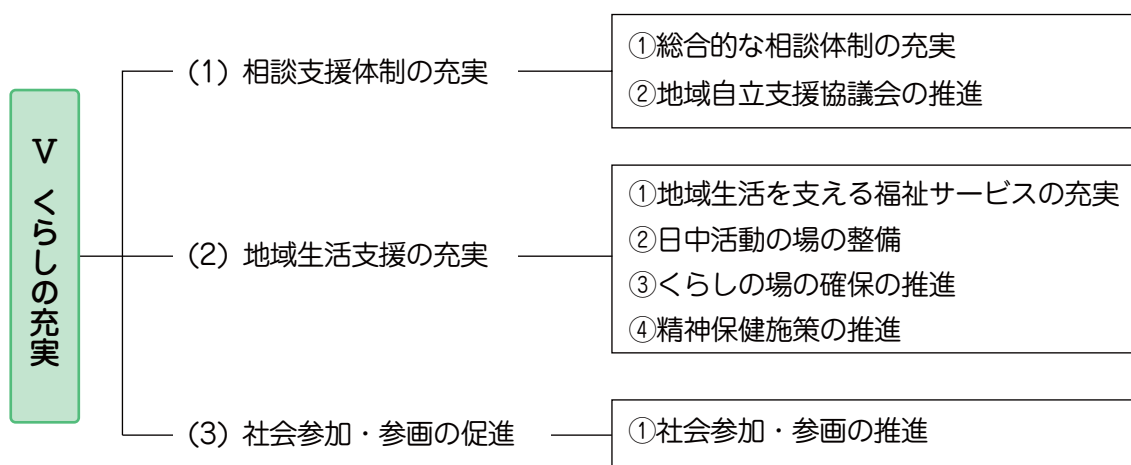
本市では、自立した日常生活や社会生活を営むことができる地域づくりのために、障がいのある人とその家族、事業者、地域の諸団体、保健・医療・福祉等の関係機関からなる吹田市地域自立支援協議会を設置しています。

今後、この協議会の活動を豊かに広げていくとともに、相談支援ネットワーク体制を強化することで、実態・ニーズに基づく施策の具体化を行政が積極的に進めて、地域における障がいのある人や家族が安心して暮らすことができる地域づくりを推進していきます。

## 2 施策の基本方向

- (1) 障がいの種別やさまざまなニーズに対応する相談支援体制を充実し、住み慣れた地域で安心して生活ができるよう、福祉サービスの充実に努めます。
- (2) 施設入所者や入院患者の地域生活への移行を進めるため、在宅支援に関するサービスを充実するとともに、グループホームやケアホームなどの住まいの場の確保に努めます。
- (3) 障がいのある人の中での活動の場を確保し、生活介護や自立訓練、就労支援等を行うとともに、医療的ケアの対応ができる日中活動の場などの整備について検討します。
- (4) 障がいのある人の社会参加・参画を促進するため、ボランティアなどの人材育成に努め、スポーツや芸術・文化活動を推進します。

## 3 重点施策、具体的な取組



### (1) 相談支援体制の充実

基本施策	基本施策の内容	担当窓口
①総合的な相談体制の充実	ア 相談支援体制の充実 <ul style="list-style-type: none"> <li>● 障がい者相談支援事業所の整備、支援</li> <li>● 地域自立支援協議会の連携強化による相談支援体制の充実</li> <li>● 身体障がい者相談員、知的障がい者相談員、精神障がい者相談員等による相談支援の充実</li> <li>● 相談員の研修によるスキルアップの促進</li> <li>● 難病患者の生活相談の充実</li> <li>● ピアカウンセラーの確保・育成</li> <li>● ケアマネジメント体制の充実</li> </ul>	障がい者くらし支援室内本町地域保健福祉センター 亥の子谷地域保健福祉センター
	イ 地域保健福祉センターの整備 <ul style="list-style-type: none"> <li>● 千里ニュータウン地域における地域保健福祉センターの整備</li> <li>● 未整備地域での整備計画の検討</li> </ul>	障がい者くらし支援室 介護保険課
②地域自立支援協議会の推進	ア 関係機関との連携強化と機能の充実 <ul style="list-style-type: none"> <li>● 地域の課題について関係機関との情報の共有と連携体制の強化・推進</li> </ul>	障がい者くらし支援室 各室課

## (2) 地域生活支援の充実

基本施策	基本施策の内容	担当窓口
①地域生活を支える福祉サービスの充実	<p>ア 地域で生活を営む上で必要な福祉サービスの充実</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>● 障がい福祉サービスや地域生活支援事業の充実</li> <li>● 障がい福祉サービスに係る利用者の経済的負担の軽減</li> <li>● ショートステイ提供事業所の拡充</li> <li>● 重度障がいのある人の入院時の生活支援の推進</li> <li>● 地域活動支援センターの機能強化の支援</li> <li>● 地域生活を支えるホームヘルパー等のマンパワーの確保</li> </ul>	障がい者くらし支援室
②日中活動の場の整備	<p>ア 日中活動の場の充実</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>● 障害者支援交流センター「あいほうふ吹田」の機能の充実</li> <li>● 医療的ケアの対応ができる日中活動の場の整備</li> <li>● 支援学校等の卒業生を見込んだ日中活動の場の検討</li> </ul>	障がい者くらし支援室
	<p>イ 地域生活の場の充実</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>● 気軽に集える日中の居場所の検討</li> </ul>	障がい者くらし支援室
③くらしの場の確保の推進	<p>ア 住まいの場の充実</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>● グループホーム、ケアホームの整備・拡充</li> <li>● 重度障がいのある人の住まいの場の確保</li> <li>● 施設入所者の地域生活への移行の推進</li> <li>● 公的賃貸住宅団地の再整備に際し、社会福祉施設の整備の検討</li> <li>● 公的な借家保証人制度の検討</li> </ul>	障がい者くらし支援室 住宅政策課
④精神保健施策の推進	<p>ア 精神障がいについての啓発活動の推進</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>● 精神障がいへの正しい理解・知識等の普及、啓発活動の推進</li> <li>● 相談窓口や福祉サービスに関する情報提供の充実</li> </ul>	障がい者くらし支援室 内本町地域保健福祉センター 亥の子谷地域保健福祉センター
	<p>イ 精神障がいのある人の自立と地域生活支援体制の強化</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>● 相談支援体制・ケアマネジメントの充実</li> <li>● 日中活動の場の整備・充実</li> <li>● 生活支援のための福祉サービスの充実</li> <li>● 関係機関の連携による社会復帰の促進</li> <li>● 社会復帰に向けたグループワーク事業等の推進</li> </ul>	障がい者くらし支援室 内本町地域保健福祉センター 亥の子谷地域保健福祉センター
	<p>ウ 社会的入院患者の地域移行の推進</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>● グループホーム、ケアホームの整備・拡充</li> <li>● 日中活動の場の拡充</li> <li>● 保健・医療・福祉等の関係機関の連携による精神障がいのある人の地域生活への移行の推進</li> </ul>	障がい者くらし支援室

### (3) 社会参加・参画の促進

基本施策	基本施策の内容	担当窓口
①社会参加・参画の推進	ア 余暇活動や社会参加のための移動の支援 ●移動支援事業の充実 ●福祉タクシー、福祉バスによる移動支援の充実 ●運転免許取得や自動車改造への支援	障がい者くらし支援室 高齢生きがい課
	イ 余暇活動や社会参加の推進 ●障がい者スポーツ大会等の振興 ●文化活動の振興 ●地域における学習機会の提供 ●コミュニケーションに必要なボランティアの派遣	障がい者くらし支援室 体育総務室 体育振興室 生涯学習課 各室課

### 4 施策区分ごとの取組状況における指標

項目	説明	現況値 平成21年度 (2009年度)	目標値 平成27年度 (2015年度)
グループホーム・ケアホームの整備	障がいのある人のグループホーム・ケアホームの床数	167床	300床

## Ⅵ 生活環境の整備

～暮らし続けたいと思える、住みよい環境をつくるために～

### 1 現状と課題

平成18年（2006年）12月に施行された「高齢者、障害者等の移動等の円滑化の促進に関する法律」（以下「バリアフリー新法」という。）に基づき、誰もが暮らしやすいまちづくりの実現に向け、建築物や道路、公園、公共交通機関などのバリアフリー化を推進しています。

日常生活における利便性を図るためには、住宅の玄関、階段、台所、便所、居室など心身の状況によりバリアフリー化が必要な場合に、改造費の一部を助成しています。

アンケート調査では、外出の際に困ることとして、「道路や駅の周辺、建物の段差で移動しにくい」や「道路や歩道の自転車や店の看板などが邪魔で通りにくい」、「公共施設や駅などのエレベーターやエスカレーターの場合がわかりにくい」などの結果が出ています。

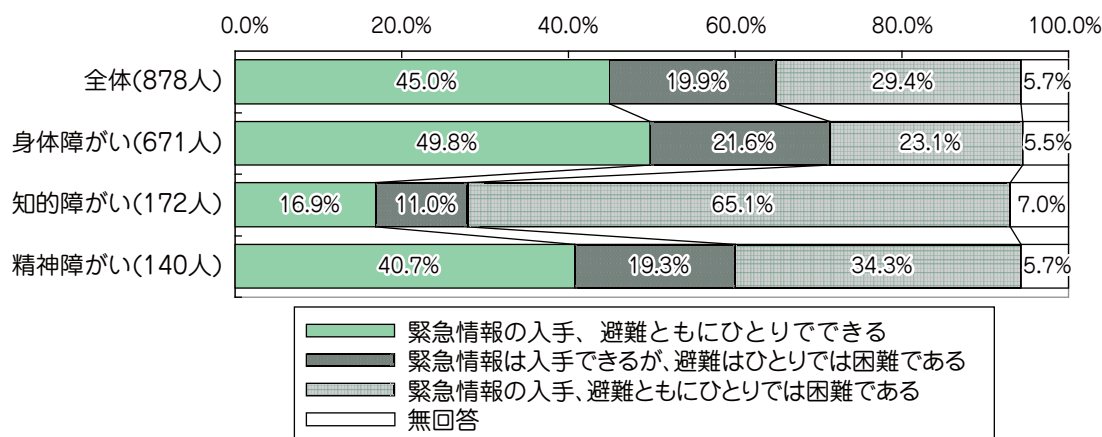
障がいのある人の心身の特性に応じた設備等の設置に配慮し、さまざまな利用者の視点を踏まえて整備を進め、整備後も違法に置かれている広告物や放置自転車のない歩行環境を確保するなど、「どこでも、誰でも、自由に、使いやすく」というユニバーサルデザインの考え方に基づいた、すべての人にやさしい福祉のまちづくりを進めていくことが重要です。

障がいのあるにかかわらず、すべての市民が、住み慣れた地域で安心安全に外出し、移動できるよう、公共施設や道路、歩道などの段差解消、案内表示の充実や、スポーツや文化活動を通じた憩いと交流の場となる公園整備など、「人にやさしいまちづくり」をめざして、より一層、バリアフリー化を進めていくことが必要です。

地域で安心安全に暮らすために、災害が発生した時や発生する危険性が高い時などの安否確認や避難誘導などの支援を行う「吹田市災害時要援護者登録制度」を活用し、安心安全のネットワークづくりを推進していきます。

アンケート調査では、災害時や緊急時にすぐに避難ができないことや、多くの避難所においての対応の問題、災害発生時の状況把握や情報入手などが困難と回答する人が多く、障がい者福祉施設や高齢者施設において悲惨な事案も発生していることから、災害に備えた事前の情報提供や伝達方法・避難誘導など、避難訓練等を通じた事前の体制づくりが求められています。

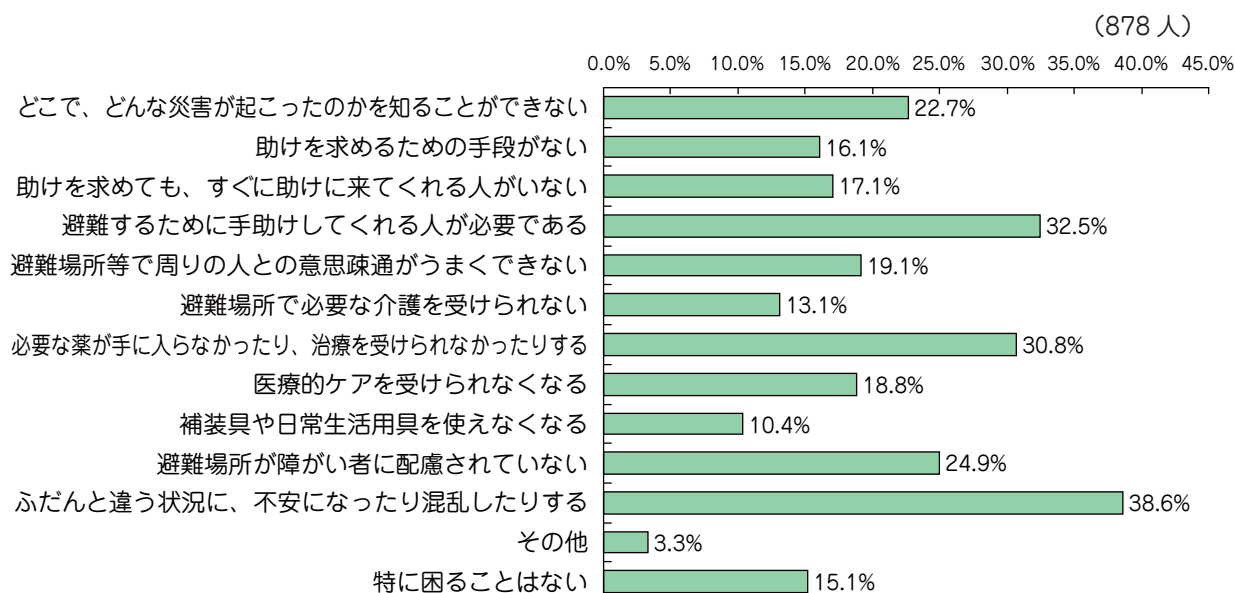
■図 3-4-11 災害発生時の緊急情報入手・避難能力



資料：第3期吹田市障がい者計画策定のためのアンケート調査結果

災害発生時に困ることとして「どこで、どんな災害が起きているかを知ることができない」「ふだんと違う状況に、不安になったり混乱したりする」「避難するために手助けしてくれる人が必要」「避難場所等で周りの人との意思疎通がうまくできない」などの回答が多数を占めています。

■図 3-4-12 災害発生時に困ること



資料：第3期吹田市障がい者計画策定のためのアンケート調査結果

また、吹田市地域防災計画に基づき、避難所のバリアフリー化や福祉的整備を図るとともに、障がいのある人や寝たきりの高齢者、妊産婦など、一般の避難所で共同生活が難しい人が安心して避難生活ができる「福祉避難所」の指定や、学校などの避難所に比べ介護等がしやすい宿泊施設などの「二次的避難所」の指定に努め、安心して生活ができる体制づくりを推進します。

さらに、災害だけでなく、悪質な手口により被害にあったとして、全国の消費生活センターなどに寄せられた、障がいのある人や認知症高齢者の相談件数は、平成20年度（2008年度）で13,669件となっています。

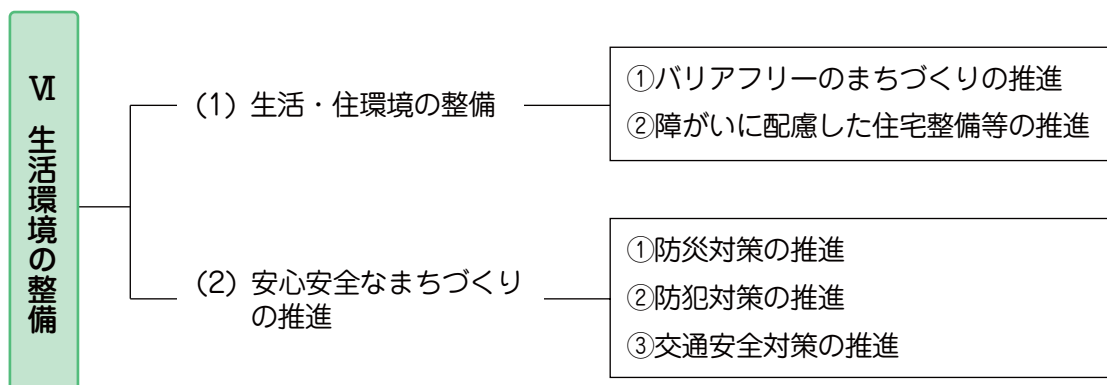
このような犯罪に巻き込まれそうになった場合や急病なども含めた緊急時の支援が行えるよう、相談体制の充実や地域を主体とした防犯・防災のための支援体制づくりなどの取組が必要となっています。

## 2 施策の基本方向

- (1) 安心して自由に行動ができ、いつでも、どこでも安全で快適な生活を営むことができるよう、バリアフリー新法に基づき、公共施設や民間施設、道路・歩道、公共交通機関などのバリアフリー化を推進します。
- (2) 重度障がいのある人の住宅改造費助成などの制度を周知し、住みよい環境づくりを促進します。
- (3) 障がいのある人を犯罪や災害時から守るため、地域住民や事業所などと協働で地域の防犯・防災対策などの充実を図り、安心して安全に地域で生活できる環境づくりを進めます。



### 3 重点施策、具体的な取組



#### (1) 生活・住環境の整備

基本施策	基本施策の内容	担当窓口
①バリアフリーのまちづくりの推進	ア 公共施設、公営住宅のバリアフリー化の推進 ●公共施設等のバリアフリー化の推進 ●公営住宅のバリアフリー化の推進	各室課 障がい者くらし支援室
	イ 道路、歩道等のバリアフリー化の推進 ●歩道の段差解消や誘導ブロック、防護柵の設置などの整備・改修 ●放置自転車禁止区域の啓発・周知及び放置自転車撤去の実施 ●違法屋外広告物の撤去	交通政策課 地域環境課
	ウ 憩いの場、活動の場としての公園整備の推進 ●障がいのある人が安心して利用できる公園等の整備	公園管理課 緑と水のふれあい課
	エ 社会参加・参画の促進 ●障がいのある人が自ら参加・参画できる環境の整備	障がい者くらし支援室 各室課
②障がい者に配慮した住宅整備等の推進	ア 安心安全で快適な住生活を営むための住宅改造等への支援 ●重度障がいのある人の住宅改造に対し支援 ●震災対策として家具転倒防止器具の設置に対し支援 ●福祉型借上公共賃貸住宅の供給	障がい者くらし支援室 住宅政策課

## (2) 安心安全なまちづくりの推進

基本施策	基本施策の内容	担当窓口
①防災対策の推進	ア 障がいに配慮した防災システムの充実 <ul style="list-style-type: none"> <li>● 災害時要援護者登録制度の支援体制の充実</li> <li>● 災害や緊急時におけるコミュニケーション支援体制の充実</li> <li>● 障がいのある人も含めた防災訓練の実施</li> <li>● 避難所のバリアフリー化の推進と福祉的整備</li> <li>● 福祉避難所や二次的避難所の指定促進</li> <li>● 障がいのある人の緊急通報システムの充実</li> </ul>	安心安全室 福祉総務課 障がい者くらし支援室
②防犯対策の推進	ア 地域防犯活動の推進 <ul style="list-style-type: none"> <li>● 地域防犯活動の推進</li> </ul>	安心安全室
	イ 消費者被害の防止のための啓発活動の推進 <ul style="list-style-type: none"> <li>● 警察署や消費生活センターとの連携による防犯に対する相談体制づくりの推進</li> </ul>	市民生活相談課 障がい者くらし支援室
③交通安全対策の推進	ア 警察署との連携による交通事故防止対策の推進 <ul style="list-style-type: none"> <li>● 交通安全・交通マナーの啓発の推進</li> </ul>	交通政策課

## 4 施策区分ごとの取組状況における指標

項目	説明	現況値 平成 21 年度 (2009 年度)	目標値 平成 27 年度 (2015 年度)
災害時のための要援護者登録者数	障がいのある人や高齢者などの災害時要援護者登録制度の全登録者数	1,170 人	3,000 人



## 第4章 計画の推進体制について



## 第1節 計画の推進体制

第3期障がい者計画の実現のためには、福祉分野のみならず、保健、医療、教育、労働、生活環境など、多岐の分野にわたっており、福祉保健部が中心となり、庁内関係室課、関係団体・機関、障がいのある人などと連携を図りながら、総合的かつ効果的に推進を図っていきます。

### 1 計画の推進体制

#### (1) 吹田市障がい者福祉事業推進本部

吹田市障がい者福祉事業推進本部においては、市長を本部長とする「本部会」、各部次長、室長で構成する「幹事会」を設置し、総合的かつ効果的に計画の推進を図っていきます。

#### (2) 吹田市障がい者施策推進委員会

吹田市障がい者施策推進委員会においては、学識経験者、市内の公共的団体の代表者、関係行政機関の職員の方々だけでなく、障がいのある人及び障がいのある人の福祉に関する事業に従事する方たちを構成員とし、それぞれの立場からの意見をいただき、計画及び施策の推進を図っていきます。

### 2 計画の効果的推進に向けて

基本方向ごとに具体的な施策を位置づけるとともに、施策区分ごとの指標を設定し、年度毎に進捗状況を把握し、着実な計画の推進に努めます。

### 3 国、府等の動きへの反映について

本計画においては、施策の推進を図るため、障がいのある人のニーズの把握に努め、進捗状況を定期的を確認し、施策運営に適切に反映していきます。

国においては、平成25年（2013年）8月までに障害者自立支援法を廃止し、「障害者総合福祉法（仮称）」の制定に向け審議が行われており、今後の法制度の動向、社会情勢の変化等を踏まえ、柔軟に対応していきます。



# 資料編





# 1 計画策定までの経過

## 【吹田市障がい者福祉事業推進本部】

<平成 22 年度（2010 年度）>

会 議	開 催 日	要 旨
第 1 回幹事会	平成 22 年 9 月 30 日	・第 3 期障がい者計画（素案）について
第 2 回幹事会	平成 23 年 3 月 3 日	・第 3 期障がい者計画（案）について
第 1 回本部会	3 月 22 日	・第 3 期障がい者計画（案）の決定について

## 【吹田市福祉審議会】

<平成 21 年度（2009 年度）>

会 議	開 催 日	要 旨
第 1 回	平成 21 年 7 月 28 日	・第 3 期障がい者計画の策定について
第 2 回	平成 22 年 2 月 26 日	・アンケート調査の結果について

<平成 22 年度（2010 年度）>

会 議	開 催 日	要 旨
第 1 回	平成 22 年 11 月 4 日	・第 3 期障がい者計画（素案）について
第 2 回	平成 23 年 2 月 15 日	・第 3 期障がい者計画（素案）に係るパブリックコメントの報告と計画（素案）について

## 【吹田市障がい者施策推進委員会】

<平成 21 年度（2009 年度）>

会 議	開 催 日	要 旨
第 1 回	平成 21 年 8 月 28 日	・第 3 期障がい者計画の策定について
第 2 回	平成 22 年 2 月 19 日	・アンケート調査の結果について

<平成 22 年度（2010 年度）>

会 議	開 催 日	要 旨
第 1 回	平成 22 年 7 月 8 日	・第 3 期障がい者計画の骨子（案）について
第 2 回	11 月 1 日	・第 3 期障がい者計画（素案）について
第 3 回	11 月 26 日	・障がい者団体を対象とした計画（素案）意見聴取会
第 4 回	平成 23 年 2 月 4 日	・第 3 期障がい者計画（素案）に係るパブリックコメント等の報告と計画（素案）について

## 【吹田市障がい者施策推進委員会 作業部会】

### <平成 21 年度（2009 年度）ワーキング>

会 議	開 催 日	要 旨
第 1 回	平成 21 年 6 月 3 日	・作業部会（ワーキング）の進め方について ・アンケート調査について
第 2 回	6 月 18 日	・第 2 期計画の進捗状況と今後の方向性について ・今後の進め方について
第 3 回	7 月 23 日	・第 3 期計画の策定にあたって
第 4 回	8 月 11 日	・第 2 期計画の進捗状況の照会について ・アンケート調査の内容について
第 5 回	9 月 9 日	・第 2 期計画の進捗状況について ・アンケート調査の内容について
第 6 回	10 月 7 日	・アンケート調査の内容について ・拡大ワーキングについて

### <平成 21 年度（2009 年度）拡大ワーキング>

会 議	開 催 日	要 旨
第 1 回	平成 21 年 10 月 15 日	・「くらし」についての課題整理
第 2 回	10 月 22 日	・「くらし」についての課題整理（2 回目）
第 3 回	11 月 11 日	・「日中活動」についての課題整理
第 4 回	11 月 17 日	・「日中活動」についての課題整理（2 回目）
第 5 回	12 月 1 日	・「就労」についての課題整理
第 6 回	12 月 24 日	・「就労」についての課題整理（2 回目）
第 7 回	平成 22 年 1 月 14 日	・「児童」についての課題整理
第 8 回	1 月 21 日	・「児童」についての課題整理（2 回目）
第 9 回	1 月 28 日	・「精神」についての課題整理
第 10 回	2 月 10 日	・「精神」についての課題整理（2 回目）
第 11 回	3 月 4 日	・「医療」についての課題整理
第 12 回	3 月 30 日	・「医療」についての課題整理（2 回目）

### <平成 22 年度（2010 年度）ワーキング>

会 議	開 催 日	要 旨
第 1 回	平成 22 年 4 月 8 日	・拡大ワーキングの課題の集約について ・今後のスケジュール等について
第 2 回	4 月 22 日	・第 2 期計画の評価と課題について ・第 3 期計画の施策の体系について
第 3 回	5 月 27 日	・第 3 期計画の構成（案）について ・施策の基本方向と考え方（案）について ・第 2 期計画の現状と課題について
第 4 回	6 月 10 日	・第 3 期計画の施策の基本方向と考え方について
第 5 回	6 月 17 日	・第 3 期計画の骨子（案）について
第 6 回	7 月 22 日	・第 3 期計画の骨子（案）について
第 7 回	8 月 19 日	・第 3 期計画の骨子（案）について
第 8 回	8 月 24 日	・第 3 期計画の骨子（案）について
第 9 回	9 月 9 日	・第 3 期計画（素案）について

### 【第3期吹田市障がい者計画策定のためのアンケート調査】

調査期間 平成21年（2009年）9月～12月

### 【第3期障がい者計画（素案）に係る意見提出（パブリックコメント）手続】

意見提出期間 平成22年（2010年）12月13日～平成23年（2011年）1月11日

意見提出件数 108通 248件

# 吹田市福祉審議会規則

平成4年3月31日

規則第13号

(趣旨)

第1条 この規則は、執行機関の附属機関に関する条例（昭和32年吹田市条例第302号）第3条の規定に基づき、吹田市福祉審議会（以下「審議会」という。）の組織、運営その他必要な事項を定めるものとする。

(任務)

第2条 審議会は、市長の諮問に応じ、次に掲げる事項について調査審議し、答申するものとする。

- (1) 高齢者の福祉に関する事項
- (2) 身体障害者、知的障害者及び精神障害者の福祉に関する事項
- (3) 児童の福祉に関する事項
- (4) その他社会福祉に関する事項

(組織)

第3条 審議会は、委員25人以内で組織する。

2 審議会の委員（以下「委員」という。）は、次の各号に掲げる者のうちから、市長が委嘱する。

- (1) 学識経験者 7人以内
- (2) 市内の福祉団体及び公共的団体の代表者 7人以内
- (3) 市議会議員 6人以内
- (4) 関係行政機関の職員 3人以内
- (5) 市民 2人以内

3 委員の任期は、2年とする。ただし、再任を妨げない。

4 補欠委員の任期は、前任者の残任期間とする。

(臨時委員)

第4条 特別の事項を調査審議するため市長が必要があると認めるときは、審議会に臨時委員を若干人置くことができる。

2 臨時委員は、審議会が調査審議する事項のうち、市長が必要と認める特別の事項についてのみ議事に参与する。

3 臨時委員は、市長が委嘱し、当該特別の事項に関する調査審議が終了したときに解嘱するものとする。

(会長)

第5条 審議会に会長を置き、委員の互選により定める。

2 会長は、審議会を代表し、会務を総理する。

3 会長に事故があるとき、又は会長が欠けたときは、あらかじめその指名する委員がその職務を代理する。

(会議)

第6条 審議会の会議は、会長が招集し、会長がその議長となる。

2 審議会は、委員及び議事に参与する臨時委員（以下「委員等」という。）の半数以上の出席がなければ、会議を開くことができない。

3 審議会の議事は、出席した委員等の過半数で決し、可否同数のときは、議長の決するところによる。

（部会）

第7条 審議会に、必要に応じ部会を置くことができる。

2 部会に属するべき委員及び臨時委員は、会長が指名する。

3 部会に部会長を置き、当該部会に属する委員の互選により定める。

4 部会長は、当該部会の会務を掌理し、当該部会における審議の状況及び結果を審議会に報告する。

5 部会の運営については、第5条第3項及び前条の規定を準用する。

（意見の聴取等）

第8条 審議会及び部会は、必要に応じ委員等以外の者に、会議への出席を求めてその意見若しくは説明を聴き、又は資料の提出を求めることができる。

（庶務）

第9条 審議会の庶務は、福祉保健部地域福祉室福祉総務課において処理する。

（委任）

第10条 この規則に定めるもののほか、審議会の運営について必要な事項は、審議会の意見を聴いて会長が定める。

附 則

この規則は、平成4年7月1日から施行する。

附 則（平成10年4月20日規則第27号）

この規則は、公布の日から施行する。

附 則（平成11年1月26日規則第3号）

（施行期日）

1 この規則は、平成11年4月1日から施行する。

（以下省略）

附 則（平成12年7月24日規則第50号）

（施行期日）

1 この規則は、公布の日から施行する。

（経過措置）

2 この規則の施行の日以後初めて委嘱するこの規則による改正後の吹田市福祉審議会規則第3条第2項第5号の委員の任期は、同条第3項本文の規定にかかわらず、平成14年7月31日までとする。

附 則（平成14年9月18日規則第48号）

この規則は、公布の日から施行する。

附 則（平成17年3月31日規則第17号）

この規則は、平成17年4月1日から施行する。

# 吹田市福祉審議会委員名簿

平成 23 年（2011 年）3 月 31 日現在

1号委員（学識経験者）		
井岡 勉	同志社大学名誉教授	会 長
岡橋 義弘	(社) 吹田市薬剤師会副会長	
小倉 信幸	(社) 吹田市医師会副会長	
小林 敏子	平成福祉会新高苑嘱託医	
千原 耕治	(社) 吹田市歯科医師会副会長	
濱岡 政好	佛教大学社会学部公共政策学科教授	会長職務代理者
矢野 秀利	関西大学社会学部教授	
2号委員（市内の福祉団体及び公共的団体の代表者）		
川井 悠子	吹田市民生・児童委員協議会会計監査	
北野 雅一	労働団体代表（吹田地区労働組合連合会幹事）	
阪本 武治	吹田市自治会連合協議会副会長	
立川 浩次	(福) 吹田市社会福祉協議会会長	
西岡 昌佐子	(社) 大阪エイフボランティアネットワーク吹田支部 吹田母子会会長	
廣瀬 弥生	吹田市消費者団体協議会委員	
三木 信次	労働団体代表（吹田市教職員組合執行委員長）	
3号委員（市議会議員）		
生野 秀昭	吹田市議会議員	
柿原 真生	吹田市議会議員	
梶川 文代	吹田市議会議員	
木村 裕	吹田市議会議員	
塩見 みゆき	吹田市議会議員	
豊田 稔	吹田市議会議員	
4号委員（関係行政機関の職員）		
木村 百合	大阪府吹田子ども家庭センター 所長	
高野 正子	大阪府吹田保健所長	
5号委員（市民）		
梅原 佳子	市民委員	
松下 睦子	市民委員	

(各号委員ごとに五十音順)

# 吹田市障がい者施策推進委員会設置要領

制 定 平成9年6月10日

最近改正 平成21年3月2日

## (設 置)

第1条 吹田市障がい者計画に定める施策の推進に関し、障がい者及び関係者の意見を反映し、事業の円滑かつ効果的な運営に資するため、吹田市障がい者施策推進委員会（以下「委員会」という。）を置く。

## (任 務)

第2条 委員会は、市長の求めに応じ、次に掲げる事項について調査及び検討する。

(1) 吹田市障がい者計画の推進に関する事項

(2) その他市長が必要と認める事項

## (組 織)

第3条 委員会は委員20人以内で組織する。

2 委員は、次の各号に掲げる者のうちから、市長が委嘱し、又は任命する。

(1) 学識経験者

(2) 市内の公共的団体の代表者

(3) 市内の障がい者等及び障がい者の福祉に関する事業に従事する者

(4) 関係行政機関の職員

(5) 市職員

3 委員の任期は2年とする。ただし、再任を妨げない。

4 補欠委員の任期は、前任者の残任期間とする。

5 第2項第5号に掲げる委員は、産業労働にぎわい部長、児童部長、学校教育部長の職にある者を充て、委員の任期は、任命した時の職に在任する期間中とする。

## (委員長)

第4条 委員会に委員長を置き、委員の互選により定める。

2 委員長は、委員会を代表し、会務を総理する。

3 委員長に事故があるとき、又は委員長が欠けたときは、あらかじめ委員長の指名する委員がその職務を代理する。

## (会 議)

第5条 委員会の会議は、委員長が招集し、委員長がその議長となる。

2 委員会は、委員の半数以上の出席がなければ、会議を開くことができない。

3 委員会の議事は、出席委員の過半数で決し、可否同数のときは、委員長の決するところによる。

## (専門部会)

第6条 委員会に、必要に応じ専門部会を置くことができる。

2 専門部会に属するべき委員は、委員長が指名する。

3 専門部会に部会長を置き、当該部会に属する委員の互選により定める。



- 4 部会長は、当該部会の会務を掌理し、当該部会における調査及び検討の状況及び結果を委員会に報告する。
- 5 専門部会の運営については、第4条第3項及び前条の規定を準用する。

(意見の聴取等)

第7条 委員会及び専門部会は、必要に応じ委員以外の者に、会議への出席を求めてその意見若しくは説明を聴き、又は資料の提出を求めることができる。

(庶務)

第8条 委員会の庶務は、福祉保健部障がい者くらし支援室において処理する。

(委任)

第9条 この要領に定めるもののほか、委員会の運営について必要な事項は、委員長が定める。

附 則

この要領は、平成20年4月1日から施行する。

附 則

この要領は、決裁の日から施行する。(決裁日平成21年3月2日)

ただし、第8条の規定は、平成21年4月1日から施行する。

# 吹田市障がい者施策推進委員会委員名簿

平成 23 年（2011 年）3 月 31 日現在

1 号委員（学識経験者）		
井岡 勉	同志社大学名誉教授、吹田市福祉審議会会長	
小倉 信幸	吹田市医師会副会長	委員長職務代理者
矢野 秀利	関西大学社会学部教授、吹田市福祉審議会委員	委員長
2 号委員（市内の公共的団体の代表者）		
有田 八郎	労働団体代表	
谷合 文広	吹田商工会議所代表	
由佐 満雄	吹田市社会福祉協議会副会長	
渡邊 達雄	吹田市民生・児童委員協議会副会長	
3 号委員（市内の障がい者等及び障がい者の福祉に関する事業に従事する者）		
馬垣 安芳	社会福祉法人ぷくぷく福祉会理事長	ワーキング委員
小西 清	吹田市身体障害者福祉会会長	
鈴木 英夫	社会福祉法人さつき福祉会理事長	ワーキング委員
播本 裕子	吹田市手をつなぐ親の会事務局長	
平形 恒雄	社会福祉法人のぞみ福祉会統括施設長	ワーキング委員
牧野 篤子	社会福祉法人コミュニティキャンパス理事長	
山口 剛	吹田市障害児・者を守る連絡協議会運営委員	ワーキング委員
4 号委員（関係行政機関の職員）		
木村 百合	大阪府吹田子ども家庭センター所長	
下川 繁裕	淀川公共職業安定所業務部長	
住山 明子	大阪府吹田保健所参事	
5 号委員（市職員）		
赤松 祐子	自治文化にぎわい総括監（産業労働にぎわい部長）	
西山 均	児童部長	
原田 勝	学校教育部長	

（各号委員ごとに五十音順）

# 吹田市障がい者福祉事業推進本部設置要領

制 定 昭和 55 年 9 月 29 日  
最近改正 平成 23 年 3 月 1 日

## (設 置)

第 1 条 庁内における障がい福祉事業の連絡調整を図り、当該事業を総合的かつ効果的に実施するため、吹田市障がい者福祉事業推進本部（以下「推進本部」という。）を設置する。

## (所掌事務)

第 2 条 推進本部は、次の各号に掲げる事務を所掌する。

- (1) 障がい者の自立更生と社会参加を推進するための施策の調整に関する事。
- (2) 地域社会の障がい者への理解と協力を得るための啓発活動に関する事。
- (3) 前 2 号に掲げるもののほか、本部長が必要と認める事。

## (組 織)

第 3 条 推進本部に、本部会及び幹事会を置く。

本部会は、本部長・副本部長及び本部員をもって組織する。

- 2 本部長は、市長をもって充てる。
- 3 副本部長は、副市長、教育長、水道事業管理者及び病院事業管理者をもって充てる。
- 4 本部員は、次に掲げる職にある者をもって充てる。

政策企画総括監、政策財務総括監、政策推進総括監、自治文化にぎわい総括監、こどもくらし健康総括監、都市創造総括監、教育次長、総括理事（みんなで支えるまちづくり推進担当）、政策企画部長、秘書長、総務部長、政策推進部長、危機管理監、財務部長、自治人権部長、市民文化部長、産業労働にぎわい部長、児童部長、福祉保健部長、障がい者くらし支援室担当理事、環境部長、都市整備部長、建設緑化部長、下水道部長、消防長、水道部長、市民病院事務局長、学校教育部長、教育監、地域教育部長、体育振興部長

## (職 務)

第 4 条 本部長は、推進本部の事務を総括する。

- 2 副本部長は、本部長を補佐し、本部長に事故あるときは、あらかじめ本部長が定めた順序によりその職務を代理する。
- 3 本部員は、本部長又は副本部長の命を受け、本部の事務に従事する。

## (本部会議)

第 5 条 本部会議は、必要に応じて本部長が招集し、本部長がその議長となる。

- 2 本部長は、必要があると認めるときは、本部員以外の者の出席を求め、その意見を聴くことができる。

## (専門部会)

第 6 条 本部会議に、その所掌事務を調査研究等をするため必要があるときは、専門部会（以下「部会」という。）を置くことができる。

- 2 部会に属する本部員は、本部長が指名する。
- 3 部会に部会長及び副部会長を置き、それぞれ本部長が指名する本部員をもって充てる。
- 4 部会長は、部会に会務を掌理する。
- 5 副部会長は、部会長を補佐し、部会長に事故あるとき、又は部会長が欠けたときは、その

職務を代理する。

6 部会の会議は、必要に応じて部会長が招集し、部会長がその議長となる。

7 前条第2項に規定は、部会について準用する。その場合において、同項中「本部長」とあるのは「部会長」と読みかえるものとする。

(幹事)

第7条 推進本部に幹事を置く。

2 幹事は、本部長の命を受けて推進本部の所掌事務について本部員を補佐する。

3 幹事は、次に掲げる職にある者をもって充てる。

ただし、主管の部次長を置かないときは、部の庶務を所管する室の室長をもって充てる。政策企画部次長、総務部次長、総務部人事室長、政策推進部次長、財務部次長、自治人権部次長、市民文化部次長、産業労働にぎわい部労働政策室長、児童部次長、福祉保健部次長、福祉事務所長、環境部次長、都市整備部次長、建設緑化部次長、下水道部次長、消防本部次長、水道部次長、市民病院事務局病院総務室長、学校教育部次長、地域教育部次長、体育振興部次長

(作業部会)

第8条 本部会議に、その所掌事務を調査研究等をするため必要があるときは、作業部会を置くことができる。

2 作業部会に属する部会員は、本部長が指名する。

3 作業部会に部会長及び副部会長を置き、それぞれ本部長が指名する。

4 部会長は、部会に会務を掌理する。

5 副部会長は、部会長を補佐し、部会長に事故あるとき、又は部会長が欠けたときは、その職務を代理する。

6 部会の会議は、必要に応じて部会長が招集し、部会長がその議長となる。

(庶務)

第9条 本部会の庶務は、福祉保健部障がい者くらし支援室において処理する。

(委任)

第10条 この要領に定めるもののほか、推進本部の運営に関して必要のある事項は本部長が定める。

附則

この要綱は、昭和55年9月29日から施行する。

附則

この要綱は、昭和57年4月1日から施行する。

附則

この要綱は、昭和60年6月10日から施行する。

附則

この要綱は、平成元年1月20日から施行する。

附則

この要綱は、平成4年11月17日から施行する。

附則

この要綱は、平成5年11月8日から施行する。

附 則

この要綱は、平成8年12月1日から施行する。

附 則

この要綱は、平成10年4月20日から施行する。

附 則

この要綱は、平成12年4月17日から施行する。

附 則

この要綱は、平成17年4月1日から施行する。

附 則

この要領は、決裁の日から施行する。(決裁日平成19年8月7日)

附 則

この要領は、平成19年11月12日から施行する。

附 則

この要領は、決裁の日から施行する。(決裁日平成21年3月2日)

ただし、第3条及び第9条の規定は、平成21年4月1日から施行する。

附 則

この要領は、平成21年4月1日から施行する。

附 則

この要領は、平成23年3月1日から施行する。

## 2 計画関連資料

### 障がい者施策の動き

西暦	昭和	国連	法律	国	大阪府	吹田市				
1970年	45	障害者の権利に関する宣言 (昭和50年)	心身障害者対策基本法の制定 (昭和45年)	【関連法】 ○ 身体障害者福祉法 (昭和24年) ○ 精神衛生法 (昭和25年) ⇒ 精神保健法に改正 (昭和62年) ⇒ 精神保健及び精神障害者福祉法に改正 (平成7年) ○ 精神薄弱者福祉法 (昭和35年) ⇒ 知的障害者福祉法に改正 (平成11年) ○ 身体障害者雇用促進法 (昭和35年) ⇒ 改正 (昭和51年) ⇒ 障害者の雇用促進等の法律に改正 (昭和62年) ⇒ 改正 (平成9年・平成18年) ○ 発達障害者支援法 (平成17年)	障害者対策に関する長期計画 (昭和58年～平成4年)	障害者対策に関する大阪府長期計画 (昭和58年～平成4年)				
1979年	54									
1980年	55									
1981年	56						国際障害者年 (昭和56年)			
1982年	57						障害者に関する世界行動計画 (昭和57年)			
1983年	58									
1984年	59									
1985年	60									
1986年	61									
1987年	62	国連障害者の十年 (昭和58年～平成4年)	障害者対策に関する長期計画 (昭和58年～平成4年)	後期重点施策 (昭和62年～平成4年)	障害者対策に関する大阪府長期計画 (昭和58年～平成4年)					
1988年	63									
1989年	平成元年									
1990年	2									
1991年	3									
1992年	4									
1993年	5									
1994年	6									
1995年	7									
1996年	8									
1997年	9	ESCAP アジア太平洋障害者の十年 (平成5年～平成14年)	障害者基本法に改正 (平成5年)	障害者対策に関する新長期計画 (平成5年～平成14年)	障害者プラン ノーマライゼーション 7か年戦略 (平成8年～平成14年)	新大阪府障害者計画 (ふれあいおおさか障害者計画) (平成5年～平成14年)				
1998年	10									
1999年	11									
2000年	12									
2001年	13									
2002年	14					新大阪府障害者計画 後期行動計画 (平成11年～平成14年)				
2003年	15						第1期吹田市障害者計画 (平成8年～平成17年)			
2004年	16	障害者の権利に関する条約の採択 (平成18年)	支障費制度の導入 (平成15年)	障害者基本計画 (平成15年～平成24年)	重点施策実施5か年計画 (平成15年～平成19年)	第3次大阪府障がい者計画 (平成15年～平成24年)				
2005年	17									
2006年	18									
2007年	19						障害者自立支援法の制定 (平成18年)			
2008年	20									
2009年	21	ESCAP 「新十年」 ひわこ ミレニアム・フレームワーク (平成15年～平成24年)	障害者基本法の一部改正 (平成16年)	障害者自立支援法の一部改正 (平成22年)	重点施策実施5か年計画 (平成20年～平成24年)	第1期障害福祉計画 (平成18年～平成20年)	第2期障がい福祉計画 (平成21年～平成23年)	吹田市民のくらしと健康を支える福祉基本条例 (平成23年)		
2010年	22									

# 吹田市民のくらしと健康を支える福祉基本条例

制定 平成23年1月5日

## 目 次

### 前 文

#### 第1章 総則（第1条・第2条）

#### 第2章 基本理念（第3条）

#### 第3章 市民等の役割及び市の責務（第4条―第6条）

#### 第4章 くらしと健康を支えるための福祉の増進に関する基本的施策（第7条―第12条）

#### 第5章 くらしの支援のための施策

##### 第1節 市民福祉に関する施策（第13条―第15条）

##### 第2節 高齢者福祉に関する施策（第16条―第18条）

##### 第3節 障害者福祉に関する施策（第19条―第21条）

##### 第4節 児童福祉に関する施策（第22条―第25条）

#### 第6章 健康の増進のための施策（第26条―第29条）

#### 第7章 雑則（第30条）

### 附 則

### 前 文

吹田は、古くから農業や商工業が営まれ、人々のくらしの場として栄えてきました。人々は地域において互いに助け合い、協力し合うことで良好な近隣関係を築き上げ、自らのくらしを守ってきました。そして、現在では、行政の力だけでなく、市民や事業者を含め、行政と地域が一体となってくらしと健康を守る地域福祉活動が展開されています。

しかしながら、地域を取り巻く社会情勢が日々変化していく中で、私たちのまわりでは、貧困と格差の問題、少子高齢化と核家族化の進行、近隣関係の希薄化、さらに児童や高齢者への虐待といった生命にかかわる課題が山積しています。そうした課題を解決し、市民のくらしと健康を支えるためには、市が、公的な責務を果たしながら、自助、互助、公助の役割分担を認識しつつ、市民及び事業者との協働により、互いに助け合っくらしと健康を支える取組を推進するとともに、地域の実情に応じた福祉の増進に関する施策を総合的に実施することがこれまで以上に求められています。

このような状況において、日本国憲法で規定されている健康で文化的な最低限度の生活を営む権利をあらゆる市民が有することを踏まえ、市民の福祉の増進についての基本理念を定めることにより、市民、事業者及び市は、一定の方向性の下で市民のくらしと健康を支える取組を行い、だれもが住み慣れた地域において健康で安心して暮らすことができるまちづくりの推進を図るため、この条例を制定します。

#### 第1章 総則

##### （目的）

第1条 この条例は、市民の福祉の増進について基本理念を定め、市民及び事業者の役割並びに市の責務を明らかにすることにより、市民のくらしと健康を支えるための福祉の増進に関する施策を総合的かつ計画的に推進し、もって、だれもが住み慣れた地域において健康で安

心して暮らせるまちづくりを進めることを目的とする。

(定義)

第2条 この条例において「市民」とは、本市に居住し、通勤し、又は通学する者をいう。

2 この条例において「事業者」とは、市内に事業所を置き事業活動その他の活動を行う者及び団体をいう。

## 第2章 基本理念

第3条 市民、事業者及び市は、市民の福祉の増進に当たっては、次に掲げる事項を目指して行わなければならない。

- (1) あらゆる市民が基本的人権を保障されること。
- (2) あらゆる市民が健康で安心して暮らすことができるまちづくりの推進に寄与すること。
- (3) あらゆる市民が生涯にわたって生きがいを持つことができるようにすること。
- (4) すべての子どもがその権利を尊重され、健やかに育つこと。

2 市民、事業者及び市は、市民の福祉の増進に当たっては、地域において様々な課題を共有し、互いに支え合うことにより行わなければならない。

## 第3章 市民等の役割及び市の責務

(市民の役割)

第4条 市民は、前条に定める基本理念（以下「基本理念」という。）に基づき、福祉の増進について主体的に取り組むとともに、互いにくらしと健康を支える役割を果たすものとする。

(事業者の役割)

第5条 事業者は、基本理念に基づき、地域社会の一員として、市民のくらしと健康を支えるための福祉の増進に関する取組に協力するよう努めるものとする。

2 事業者は、事業に従事する者に対する子育て支援、介護支援その他のくらしの支援及び健康の増進に努めるものとする。

(市の責務)

第6条 市は、基本理念に基づき、国及び他の地方自治体との連携並びに市民及び事業者との協働により、市民のくらしと健康を支えるための福祉の増進に関する施策を総合的かつ計画的に推進しなければならない。

2 市は、市民のくらしと健康を支えるための福祉の増進に関する施策を推進するために必要な財政上の措置を講ずるものとする。

3 市は、あらゆる施策の実施に当たっては、市民のくらしと健康を支えるための福祉の増進に配慮しなければならない。

4 市は、市民及び事業者が行う市民のくらしと健康を支えるための福祉の増進に関する取組を支援するものとする。

## 第4章 くらしと健康を支えるための福祉の増進に関する基本的施策

(基本方針)

第7条 市民、事業者及び市は、あらゆる市民に健康で文化的な最低限度の生活を営む権利が保障されるよう努め、だれもが住み慣れた地域において、健康で安心して暮らすことができる社会の実現を目指すものとする。



(各種計画の策定及び施策の推進)

第8条 市は、基本理念に基づき、地域の実情に配慮して市民の暮らしと健康を支えるための福祉の増進に関する各種計画を策定し、施策を推進するものとする。

(取組への支援)

第9条 市は、事業者とともに、市民が暮らしと健康を支えるための福祉の増進に関する取組をする機会の充実を図るため、情報の提供その他の必要な施策を講ずるものとする。

(人材の育成)

第10条 市は、市民及び事業者とともに、市民の暮らしと健康を支えるための福祉の増進に関する意識の高揚を図り、暮らしと健康を支えるための福祉の増進を担う人材及び団体を育成するために必要な施策を講ずるものとする。

(啓発)

第11条 市は、次に掲げる事項に対する市民及び事業者の理解を深めるための啓発を行うものとする。

- (1) 高齢者の尊厳及び権利に関すること。
- (2) 障害及び障害者の権利に関すること。
- (3) 子どもの権利に関すること。
- (4) 健康の増進及び健康被害等の防止に関すること。

(顕彰)

第12条 市は、市民の暮らしと健康を支えるための福祉の増進に関し功績のあった個人及び団体の顕彰に努めるものとする。

## 第5章 暮らしの支援のための施策

### 第1節 市民福祉に関する施策

(基本方針)

第13条 市民、事業者及び市は、高齢者、障害者及び子どもを含むあらゆる市民の暮らしに応じた様々な支援を推進することにより、だれもが住み慣れた地域において、安心して自立した暮らしを続けることができる社会の実現を目指すものとする。

(施策の推進)

第14条 市は、あらゆる市民が安心して暮らすことができるよう、住宅の確保、就労の支援その他の暮らしを支える施策の充実に努めるものとする。

- 2 市は、市民及び事業者とともに、あらゆる市民が安全かつ快適に暮らすことができるよう、バリアフリーのまちづくりに必要な施策を講ずるものとする。
- 3 市は、あらゆる市民に移動の自由が得られるよう、必要な支援に努めるものとする。

(地域における相互支援の促進)

第15条 市は、住み慣れた地域において市民が暮らしを支え合い、地域福祉の向上が図られるよう、市民、事業者及び福祉施設の相互交流及び連携の促進に努めるものとする。

- 2 市は、市民及び事業者とともに、地域の支援ネットワークを強化し、だれもが安心して安全に暮らすことができるよう、見守り体制の構築に努めるものとする。

### 第2節 高齢者福祉に関する施策

(基本方針)

第16条 市民、事業者及び市は、高齢者について、自立した一人の人間として健康で潤いの

ある生活が保障される社会の実現を目指すものとする。

(施策の推進)

第17条 市は、高齢者の健康状態及び介護状態に応じた施策を推進するものとする。

2 市は、高齢者の介護に携わるすべての人に対する支援に努めるものとする。

3 市は、高齢者の生きがいつくりへの支援に努めるものとする。

(介護事業等の充実)

第18条 市は、事業者とともに、高齢者が住み慣れた地域において暮らし続けることができるよう、介護事業等の充実を図るものとする。

### 第3節 障害者福祉に関する施策

(基本方針)

第19条 市民、事業者及び市は、障害を理由とした偏見及び差別をなくし、共に生き、共に働く社会の実現を目指すものとする。

(施策の推進)

第20条 市は、障害者の権利を擁護する施策を推進するものとする。

2 市は、障害者の相談支援体制の整備等、地域におけるくらしの支援に努めるものとする。

3 市は、障害者の介護に携わるすべての人に対する支援に努めるものとする。

4 市は、事業者とともに、障害者の雇用の促進に努めるものとする。

(障害福祉事業の充実等)

第21条 市は、事業者とともに、障害者が住み慣れた地域において日常生活及び社会生活を営むことができるよう、障害福祉事業の充実を図るものとする。

2 市は、障害者が働く喜びを実感できる場の提供に努めるものとする。

### 第4節 児童福祉に関する施策

(基本方針)

第22条 市民、事業者及び市は、すべての子どもが健やかで幸福に育ち、すべての家庭において、夢を育み、喜びを持って子どもを生み育てることができる社会の実現を目指すものとする。

(施策の推進)

第23条 市は、市民とともに、すべての子育て家庭において子育てにおける孤独感、不安感等の心身の負担が軽減されるよう、施策の推進に努めるものとする。

2 市は、地域との緊密な連携を図ることにより、児童虐待の防止に関する施策の推進に努めるものとする。

(子育て支援事業の充実等)

第24条 市は、市民及び事業者とともに、子育て支援事業等の充実を図るものとする。

2 市は、仕事と子育ての両立ができるよう、保育所等の施設の整備に努めるものとする。

3 市は、市民が心身ともにゆとりを持って子育てができるよう、情報の提供、安全対策等の生活環境の整備に努めるものとする。

(子どもの権利の擁護)

第25条 市は、市民及び事業者とともに、子どもの権利を擁護し、子どもの最善の利益が尊重されるよう配慮するものとする。

2 市は、児童虐待等により配慮を要する子ども及び家庭に対する支援のために必要な施策の充実を図るものとする。

## 第6章 健康の増進のための施策

### (基本方針)

第26条 市民、事業者及び市は、あらゆる市民が心身ともに健康に暮らすことができる社会の実現を目指すものとする。

### (施策の推進)

第27条 市は、あらゆる市民の命を守り、健康を増進するため、健康診査等の保健事業の推進に努めるとともに、その健康状態に応じて市民を適切な医療につなげるものとする。

2 市は、健康の増進のために必要な情報の収集及び調査を行うものとする。

3 市は、食生活の向上に資する情報その他の健康の増進に関する情報の提供に努めるものとする。

### (医療を受ける市民に対する支援施策の充実)

第28条 市は、高齢者、障害者、子どもその他医療を要する市民が適切に医療を受けることができるよう、必要な施策の充実を図るものとする。

### (活動及び交流の場の提供)

第29条 市は、市民及び事業者とともに、地域における健康の増進に関する活動及び交流の場の提供に努め、その活性化を図るものとする。

## 第7章 雑則

### (委任)

第30条 この条例の施行に関し必要な事項は、市長が定める。

## 附 則

この条例は、公布の日から施行する。

## 第1章 総則

(目的)

**第1条** この法律は、障害者の自立及び社会参加の支援等のための施策に関し、基本的理念を定め、及び国、地方公共団体等の責務を明らかにするとともに、障害者の自立及び社会参加の支援等のための施策の基本となる事項を定めること等により、障害者の自立及び社会参加の支援等のための施策を総合的かつ計画的に推進し、もつて障害者の福祉を増進することを目的とする。

(定義)

**第2条** この法律において「障害者」とは、身体障害、知的障害又は精神障害（以下「障害」と総称する。）があるため、継続的に日常生活又は社会生活に相当な制限を受ける者をいう。

(基本的理念)

**第3条** すべて障害者は、個人の尊厳が重んぜられ、その尊厳にふさわしい生活を保障される権利を有する。

2 すべて障害者は、社会を構成する一員として社会、経済、文化その他あらゆる分野の活動に参加する機会が与えられる。

3 何人も、障害者に対して、障害を理由として、差別することその他の権利利益を侵害する行為をしてはならない。

(国及び地方公共団体の責務)

**第4条** 国及び地方公共団体は、障害者の権利の擁護及び障害者に対する差別の防止を図りつつ障害者の自立及び社会参加を支援すること等により、障害者の福祉を増進する責務を有する。

(国民の理解)

**第5条** 国及び地方公共団体は、国民が障害者について正しい理解を深めるよう必要な施策を講じなければならない。

(国民の責務)

**第6条** 国民は、社会連帯の理念に基づき、障害者の福祉の増進に協力するよう努めなければならない。

2 国民は、社会連帯の理念に基づき、障害者の人権が尊重され、障害者が差別されることなく、社会、経済、文化その他あらゆる分野の活動に参加することができる社会の実現に寄与するよう努めなければならない。

(障害者週間)

**第7条** 国民の間に広く障害者の福祉についての関心と理解を深めるとともに、障害者が社会、経済、文化その他あらゆる分野の活動に積極的に参加する意欲を高めるため、障害者週間を設ける。

2 障害者週間は、12月3日から12月9日までの1週間とする。

3 国及び地方公共団体は、障害者週間の趣旨にふさわしい事業を実施するよう努めなければならない。

(施策の基本方針)

**第8条** 障害者の福祉に関する施策は、障害者の年齢及び障害の状態に応じて、かつ、有機的連携の下に総合的に、策定され、及び実施されなければならない。

2 障害者の福祉に関する施策を講ずるに当たっては、障害者の自主性が十分に尊重され、かつ、障害者が、可能な限り、地域において自立した日常生活を営むことができるよう配慮されなければならない。

(障害者基本計画等)

**第9条** 政府は、障害者の福祉に関する施策及び障害の予防に関する施策の総合的かつ計画的な推進を図るため、障害者のための施策に関する基本的な計画（以下「障害者基本計画」という。）を策定しなければならない。

2 都道府県は、障害者基本計画を基本とするとともに、当該都道府県における障害者の状況等を踏まえ、当該都道府県における障害者のための施策に関する基本的な計画（以下「都道府県障害者計画」という。）を策定しなければならない。

3 市町村は、障害者基本計画及び都道府県障害者計画を基本とするとともに、地方自治法（昭和22年法律第67号）第2条第4項の基本構想に即し、かつ、当該市町村における障害者の状況等を踏まえ、当該市町村における障害者のための施策に関する基本的な計画（以下「市町村障害者計画」という。）を策定しなければならない。

4 内閣総理大臣は、関係行政機関の長に協議するとともに、中央障害者施策推進協議会の意見を聴いて、障害者基本計画の案を作成し、閣議の決定を求めなければならない。

5 都道府県は、都道府県障害者計画を策定するに当たっては、地方障害者施策推進協議会の意見を聴かななければならない。

6 市町村は、市町村障害者計画を策定するに当たっては、地方障害者施策推進協議会を設置している場合にあつてはその意見を、その他の場合にあつては障害者その他の関係者の意見を聴かななければならない。

7 政府は、障害者基本計画を策定したときは、これを国会に報告するとともに、その要旨を公表しなければならない。

8 第2項又は第3項の規定により都道府県障害者計画又は市町村障害者計画が策定されたときは、都道府県知事又は市町村長は、これを当該都道府県の議会又は当該市町村の議会に報告するとともに、その要旨を公表しなければならない。

9 第4項及び第7項の規定は障害者基本計画の変更

について、第5項及び前項の規定は都道府県障害者計画の変更について、第6項及び前項の規定は市町村障害者計画の変更について準用する。

(法制上の措置等)

**第10条** 政府は、この法律の目的を達成するため、必要な法制上及び財政上の措置を講じなければならない。

(年次報告)

**第11条** 政府は、毎年、国会に、障害者のために講じた施策の概況に関する報告書を提出しなければならない。

## 第2章 障害者の福祉に関する基本的施策

(医療、介護等)

**第12条** 国及び地方公共団体は、障害者が生活機能を回復し、取得し、又は維持するために必要な医療の給付及びリハビリテーションの提供を行うよう必要な施策を講じなければならない。

2 国及び地方公共団体は、前項に規定する医療及びリハビリテーションの研究、開発及び普及を促進しなければならない。

3 国及び地方公共団体は、障害者がその年齢及び障害の状態に応じ、医療、介護、生活支援その他自立のための適切な支援を受けられるよう必要な施策を講じなければならない。

4 国及び地方公共団体は、第1項及び前項に規定する施策を講ずるために必要な専門的技術職員その他の専門的知識又は技能を有する職員を育成するよう努めなければならない。

5 国及び地方公共団体は、福祉用具及び身体障害者補助犬の給付又は貸与その他障害者が日常生活を営むのに必要な施策を講じなければならない。

6 国及び地方公共団体は、前項に規定する施策を講ずるために必要な福祉用具の研究及び開発、身体障害者補助犬の育成等を促進しなければならない。

(年金等)

**第13条** 国及び地方公共団体は、障害者の自立及び生活の安定に資するため、年金、手当等の制度に関し必要な施策を講じなければならない。

(教育)

**第14条** 国及び地方公共団体は、障害者が、その年齢、能力及び障害の状態に応じ、十分な教育を受けられるようにするため、教育の内容及び方法の改善及び充実を図る等必要な施策を講じなければならない。

2 国及び地方公共団体は、障害者の教育に関する調査及び研究並びに学校施設の整備を促進しなければならない。

3 国及び地方公共団体は、障害のある児童及び生徒と障害のない児童及び生徒との交流及び共同学習を積極的に進めることによつて、その相互理解を促進しなければならない。

(職業相談等)

**第15条** 国及び地方公共団体は、障害者の職業選択の自由を尊重しつつ、障害者がその能力に応じて適切な職業に従事することができるようにするため、その障害の状態に配慮した職業相談、職業指導、職業訓練及び職業紹介の実施その他必要な施策を講じなければならない。

2 国及び地方公共団体は、障害者に適した職種及び職域に関する調査及び研究を促進しなければならない。

3 及び地方公共団体は、障害者の地域における作業活動の場及び障害者の職業訓練のための施設の拡充を図るため、これに必要な費用の助成その他必要な施策を講じなければならない。

(雇用の促進等)

**第16条** 国及び地方公共団体は、障害者の雇用を促進するため、障害者に適した職種又は職域について障害者の優先雇用の施策を講じなければならない。

2 事業主は、社会連帯の理念に基づき、障害者の雇用に関し、その有する能力を正当に評価し、適切な雇用の場を与えるとともに適正な雇用管理を行うことによりその雇用の安定を図るよう努めなければならない。

3 国及び地方公共団体は、障害者を雇用する事業主に対して、障害者の雇用のための経済的負担を軽減し、もつてその雇用の促進及び継続を図るため、障害者が雇用されるのに伴い必要となる施設又は設備の整備等に要する費用の助成その他必要な施策を講じなければならない。

(住宅の確保)

**第17条** 国及び地方公共団体は、障害者の生活の安定を図るため、障害者のための住宅を確保し、及び障害者の日常生活に適するような住宅の整備を促進するよう必要な施策を講じなければならない。

(公共的施設のバリアフリー化)

**第18条** 国及び地方公共団体は、障害者の利用の便宜を図ることによつて障害者の自立及び社会参加を支援するため、自ら設置する官公庁施設、交通施設その他の公共的施設について、障害者が円滑に利用できるような施設の構造及び設備の整備等の計画的推進を図らなければならない。

2 交通施設その他の公共的施設を設置する事業者は、障害者の利用の便宜を図ることによつて障害者の自立及び社会参加を支援するため、社会連帯の理念に基づき、当該公共的施設について、障害者が円滑に利用できるような施設の構造及び設備の整備等の計画的推進に努めなければならない。

3 国及び地方公共団体は、前2項の規定により行われる公共的施設の構造及び設備の整備等が総合的かつ計画的に推進されるようにするため、必要な施策を講じなければならない。

4 国、地方公共団体及び公共的施設を設置する事業者は、自ら設置する公共的施設を利用する障害者の

補助を行う身体障害者補助犬の同伴について障害者の利用の便宜を図らなければならない。

(情報の利用におけるバリアフリー化)

**第19条** 国及び地方公共団体は、障害者が円滑に情報を利用し、及びその意思を表示できるようにするため、障害者が利用しやすい電子計算機及びその関連装置その他情報通信機器の普及、電気通信及び放送の役務の利用に関する障害者の利便の増進、障害者に対して情報を提供する施設の整備等が図られるよう必要な施策を講じなければならない。

2 国及び地方公共団体は、行政の情報化及び公共分野における情報通信技術の活用の推進に当たっては、障害者の利用の便宜が図られるよう特に配慮しなければならない。

3 電気通信及び放送その他の情報の提供に係る役務の提供並びに電子計算機及びその関連装置その他情報通信機器の製造等を行う事業者は、社会連帯の理念に基づき、当該役務の提供又は当該機器の製造等に当たっては、障害者の利用の便宜を図るよう努めなければならない。

(相談等)

**第20条** 国及び地方公共団体は、障害者に関する相談業務、成年後見制度その他の障害者の権利利益の保護等のための施策又は制度が、適切に行われ又は広く利用されるようにしなければならない。

(経済的負担の軽減)

**第21条** 国及び地方公共団体は、障害者及び障害者を扶養する者の経済的負担の軽減を図り、又は障害者の自立の促進を図るため、税制上の措置、公共的施設の利用料等の減免その他必要な施策を講じなければならない。

(文化的諸条件の整備等)

**第22条** 国及び地方公共団体は、障害者の文化的意欲を満たし、若しくは障害者に文化的意欲を起こさせ、又は障害者が自主的かつ積極的にレクリエーションの活動をし、若しくはスポーツを行うことができるようにするため、施設、設備その他の諸条件の整備、文化、スポーツ等に関する活動の助成その他必要な施策を講じなければならない。

### 第3章 障害の予防に関する基本的施策

**第23条** 国及び地方公共団体は、障害の原因及び予防に関する調査及び研究を促進しなければならない。

2 国及び地方公共団体は、障害の予防のため、必要な知識の普及、母子保健等の保健対策の強化、障害の原因となる傷病の早期発見及び早期治療の推進その他必要な施策を講じなければならない。

3 国及び地方公共団体は、障害の原因となる難病等の予防及び治療が困難であることにかんがみ、障害の原因となる難病等の調査及び研究を推進するとともに、難病等に起因する障害があるため継続的に日常生活又は社会生活に相当な制限を受ける者に対す

る施策をきめ細かく推進するよう努めなければならない。

### 第4章 障害者施策推進協議会

(中央障害者施策推進協議会)

**第24条** 内閣府に、障害者基本計画に関し、第9条第4項(同条第9項において準用する場合を含む。)に規定する事項を処理するため、中央障害者施策推進協議会(以下「中央協議会」という。)を置く。

**第25条** 中央協議会は、委員30人以内で組織する。

2 中央協議会の委員は、障害者、障害者の福祉に関する事業に従事する者及び学識経験のある者のうちから、内閣総理大臣が任命する。この場合において、委員の構成については、中央協議会が様々な障害者の意見を聴き障害者の実情を踏まえた協議を行うことができることとなるよう、配慮されなければならない。

3 中央協議会の委員は、非常勤とする。

4 前三項に定めるもののほか、中央協議会の組織及び運営に関し必要な事項は、政令で定める。

(地方障害者施策推進協議会)

**第26条** 都道府県(地方自治法第252条の19第1項の指定都市(以下「指定都市」という。)を含む。以下同じ。)に、地方障害者施策推進協議会を置く。

2 都道府県に置かれる地方障害者施策推進協議会は、次に掲げる事務をつかさどる。

一 都道府県障害者計画に関し、第9条第5項(同条第9項において準用する場合を含む。)に規定する事項を処理すること。

二 当該都道府県における障害者に関する施策の総合的かつ計画的な推進について必要な事項を調査審議すること。

三 当該都道府県における障害者に関する施策の推進について必要な関係行政機関相互の連絡調整を要する事項を調査審議すること。

3 都道府県に置かれる地方障害者施策推進協議会の組織及び運営に関し必要な事項は、条例で定める。

4 市町村(指定都市を除く。)は、条例で定めるところにより、地方障害者施策推進協議会を置くことができる。

5 第2項及び第3項の規定は、前項の規定により地方障害者施策推進協議会が置かれた場合に準用する。この場合において、第2項中「都道府県に」とあるのは「市町村(指定都市を除く。)」に」と、同項第1号中「都道府県障害者計画」とあるのは「市町村障害者計画」と、「第9条第5項(同条第9項において準用する場合を含む。)」とあるのは「第9条第6項(同条第9項において準用する場合を含む。)」と、第3項中「都道府県」とあるのは「市町村(指定都市を除く。)」と読み替えるものとする。

附 則（抄）

（施行期日）

- 1 この法律は、公布の日から施行する。

附 則（平成 16 年 6 月 4 日法律第 80 号）（抄）

（施行期日）

**第 1 条** この法律は、公布の日から施行する。ただし、第 2 条及び次条（内閣府設置法（平成 11 年法律第 89 号）第 37 条第 3 項の表の改正規定に限る。）の規定は公布の日から起算して 1 年を超えない範囲内において政令で定める日から、第 3 条の規定は平成 19 年 4 月 1 日から施行する。

（検討）

**第 3 条** 政府は、この法律の施行後 5 年を目途として、この法律による改正後の規定の実施状況、障害者を取り巻く社会経済情勢の変化等を勘案し、障害者に関する施策の在り方について検討を加え、その結果に基づいて必要な措置を講ずるものとする。

平成 18 年 12 月 13 日 ニューヨークで採択

平成 19 年 9 月 28 日 ニューヨークで署名

この仮訳文は署名のための閣議に提出したものであり、今後の国会提出へ向けた作業において変更の可能性があります。

## 前 文

この条約の締約国は、

- (a) 国際連合憲章において宣明された原則が、人類社会のすべての構成員の固有の尊厳及び価値並びに平等のかつ奪い得ない権利が世界における自由、正義及び平和の基礎を成すものであると認めていることを想起し、
- (b) 国際連合が、世界人権宣言及び人権に関する国際規約において、すべての人はいかなる差別もなしに同宣言及びこれらの規約に掲げるすべての権利及び自由を享有することができることを宣明し、及び合意したことを認め、
- (c) すべての人権及び基本的自由が普遍的であり、不可分のものであり、相互に依存し、かつ、相互に関連を有すること並びに障害者がすべての人権及び基本的自由を差別なしに完全に享有することを保障することが必要であることを再確認し、
- (d) 経済的、社会的及び文化的権利に関する国際規約、市民的及び政治的権利に関する国際規約、あらゆる形態の人種差別の撤廃に関する国際条約、女子に対するあらゆる形態の差別の撤廃に関する条約、拷問及び他の残虐な、非人道的な又は品位を傷つける取扱い又は刑罰に関する条約、児童の権利に関する条約及びすべての移住労働者及びその家族の構成員の権利の保護に関する国際条約を想起し、
- (e) 障害が、発展する概念であり、並びに障害者と障害者に対する態度及び環境による障壁との間の相互作用であって、障害者が他の者と平等に社会に完全かつ効果的に参加することを妨げるものによって生ずることを認め、
- (f) 障害者に関する世界行動計画及び障害者の機会均等化に関する標準規則に定める原則及び政策上の指針が、障害者の機会均等を更に促進するための国内的、地域的及び国際的な政策、計画及び行動の促進、作成及び評価に影響を及ぼす上で重要であることを認め、
- (g) 持続可能な開発の関連戦略の不可分の一部として障害に関する問題を主流に組み入れることが重要であることを強調し、
- (h) また、いかなる者に対する障害を理由とする差

別も、人間の固有の尊厳及び価値を侵害するものであることを認め、

- (i) さらに、障害者の多様性を認め、
- (j) すべての障害者（より多くの支援を必要とする障害者を含む。）の人権を促進し、及び保護することが必要であることを認め、
- (k) これらの種々の文書及び約束にもかかわらず、障害者が、世界のすべての地域において、社会の平等な構成員としての参加を妨げる障壁及び人権侵害に依然として直面していることを憂慮し、
- (l) あらゆる国（特に開発途上国）における障害者の生活条件を改善するための国際協力が重要であることを認め、
- (m) 障害者が地域社会における全般的な福祉及び多様性に対して既に又は潜在的に貢献していることを認め、また、障害者による人権及び基本的自由の完全な享有並びに完全な参加を促進することにより、その帰属意識が高められること並びに社会の人的、社会的及び経済的開発並びに貧困の撲滅に大きな前進がもたらされることを認め、
- (n) 障害者にとって、個人の自律（自ら選択する自由を含む。）及び自立が重要であることを認め、
- (o) 障害者が、政策及び計画（障害者に直接関連する政策及び計画を含む。）に係る意思決定の過程に積極的に関与する機会を有すべきであることを考慮し、
- (p) 人種、皮膚の色、性、言語、宗教、政治的意見その他の意見、国民的な、種族的な、原住民としての若しくは社会的な出身、財産、出生、年齢又は他の地位に基づく複合的又は加重的な形態の差別を受けている障害者が直面する困難な状況を憂慮し、
- (q) 障害のある女子が、家庭の内外で暴力、傷害若しくは虐待、放置若しくは怠慢な取扱い、不当な取扱い又は搾取を受け一層大きな危険にしばしばさらされていることを認め、
- (r) 障害のある児童が、他の児童と平等にすべての人権及び基本的自由を完全に享有すべきであることを認め、また、このため、児童の権利に関する条約の締約国が負う義務を想起し、
- (s) 障害者による人権及び基本的自由の完全な享有を促進するためのあらゆる努力に性別の視点を組み込む必要があることを強調し、
- (t) 障害者の大多数が貧困の状況下で生活している事実を強調し、また、この点に関し、貧困が障害者に及ぼす悪影響に対処することが真に必要なであることを認め、
- (u) 国際連合憲章に定める目的及び原則の十分な尊



重並びに人権に関する適用可能な文書の遵守に基づく平和で安全な状況が、特に武力紛争及び外国による占領の期間中における障害者の十分な保護に不可欠であることに留意し、

- (v) 障害者がすべての人権及び基本的自由を完全に享有することを可能とするに当たっては、物理的、社会的、経済的及び文化的な環境、健康及び教育並びに情報及び通信についての機会が提供されることが重要であることを認め、
- (w) 個人が、他人に対し及びその属する地域社会に対して義務を負うこと並びに人権に関する国際的な文書において認められる権利の増進及び擁護のために努力する責任を有することを認識し、
- (x) 家族が、社会の自然かつ基礎的な単位であること並びに社会及び国家による保護を受ける権利を有することを確信し、また、障害者及びその家族の構成員が、障害者の権利の完全かつ平等な享有に向けて家族が貢献することを可能とするために必要な保護及び支援を受けるべきであることを確信し、
- (y) 障害者の権利及び尊厳を促進し、及び保護するための包括的かつ総合的な国際条約が、開発途上国及び先進国において、障害者の社会的に著しく不利な立場を是正することに重要な貢献を行うこと並びに障害者が市民的、政治的、経済的、社会的及び文化的分野に均等な機会により参加することを促進することを確信して、

次のとおり協定した。

## 第1条 目的

この条約は、すべての障害者によるあらゆる人権及び基本的自由の完全かつ平等な享有を促進し、保護し、及び確保すること並びに障害者の固有の尊厳の尊重を促進することを目的とする。

障害者には、長期的な身体的、精神的、知的又は感覚的な障害を有する者であって、様々な障壁との相互作用により他の者と平等に社会に完全かつ効果的に参加することを妨げられることのあるものを含む。

## 第2条 定義

この条約の適用上、

「意思疎通」とは、言語、文字表記、点字、触覚を使った意思疎通、拡大文字、利用可能なマルチメディア並びに筆記、聴覚、平易な言葉及び朗読者による意思疎通の形態、手段及び様式並びに補助的及び代替的な意思疎通の形態、手段及び様式（利用可能な情報通信技術を含む。）をいう。

「言語」とは、音声言語及び手話その他の形態の非音声言語をいう。

「障害を理由とする差別」とは、障害を理由とするあらゆる区別、排除又は制限であって、政治的、経済的、社会的、文化的、市民的その他のあらゆる分野において、他の者と平等にすべての人権及び基本的自由を認識し、享有し、又は行使することを害し、又は妨げる

目的又は効果を有するものをいう。障害を理由とする差別には、あらゆる形態の差別（合理的配慮の否定を含む。）を含む。

「合理的配慮」とは、障害者が他の者と平等にすべての人権及び基本的自由を享有し、又は行使することを確保するための必要かつ適当な変更及び調整であって、特定の場合において必要とされるものであり、かつ、均衡を失した又は過度の負担を課さないものをいう。

「ユニバーサルデザイン」とは、調整又は特別な設計を必要とすることなく、最大限可能な範囲ですべての人が使用することのできる製品、環境、計画及びサービスの設計をいう。ユニバーサルデザインは、特定の障害者の集団のための支援装置が必要な場合には、これを排除するものではない。

## 第3条 一般原則

この条約の原則は、次のとおりとする。

- (a) 固有の尊厳、個人の自律（自ら選択する自由を含む。）及び個人の自立を尊重すること。
- (b) 差別されないこと。
- (c) 社会に完全かつ効果的に参加し、及び社会に受け入れられること。
- (d) 人間の多様性及び人間性の一部として、障害者の差異を尊重し、及び障害者を受け入れること。
- (e) 機会の均等
- (f) 施設及びサービスの利用を可能にすること。
- (g) 男女の平等
- (h) 障害のある児童の発達しつつある能力を尊重し、及び障害のある児童がその同一性を保持する権利を尊重すること。

## 第4条 一般的義務

1 締約国は、障害を理由とするいかなる差別もなしに、すべての障害者のあらゆる人権及び基本的自由を完全に実現することを確保し、及び促進することを約束する。このため、締約国は、次のことを約束する。

- (a) この条約において認められる権利の実現のため、すべての適当な立法措置、行政措置その他の措置をとること。
- (b) 障害者に対する差別となる既存の法律、規則、慣習及び慣行を修正し、又は廃止するためのすべての適当な措置（立法を含む。）をとること。
- (c) すべての政策及び計画において障害者の人権の保護及び促進を考慮に入れること。
- (d) この条約と両立しないいかなる行為又は慣行も差し控え、かつ、公の当局及び機関がこの条約に従って行動することを確保すること。
- (e) 個人、団体又は民間企業による障害を理由とする差別を撤廃するためのすべての適当な措置をとること。
- (f) 障害者による利用可能性及び使用を促進し、並びに基準及び指針の整備に当たりユニバーサルデザインを促進するため、第二条に定めるすべての

人が使用することのできる製品、サービス、設備及び施設であって、障害者に特有のニーズを満たすために可能な限り最低限の調整及び最小限の費用を要するものについての研究及び開発を約束し、又は促進すること。

- (g) 障害者に適した新たな技術（情報通信技術、移動補助具、装置及び支援技術を含む。）であって、妥当な費用であることを優先させたものについての研究及び開発を約束し、又は促進し、並びにその新たな技術の利用可能性及び使用を促進すること。
- (h) 移動補助具、装置及び支援技術（新たな技術を含む。）並びに他の形態の援助、支サービス及び施設に関する情報であって、障害者にとって利用可能なものを提供すること。
- (i) この条約において認められる権利によって保障される支援及びサービスをより良く提供するため、障害者と共に行動する専門家及び職員に対する研修を促進すること。

2 締約国は、経済的、社会的及び文化的権利に関しては、これらの権利の完全な実現を漸進的に達成するため、自国における利用可能な手段を最大限に用いることにより、また、必要な場合には国際協力の枠内で、措置をとることを約束する。ただし、この条約に定める義務であって、国際法に従って直ちに適用可能なものに影響を及ぼすものではない。

3 締約国は、この条約を実施するための法令及び政策の作成及び実施に当たり、並びにその他の障害者に関する問題についての意思決定過程において、障害者（障害のある児童を含む。）を代表する団体を通じ、障害者と緊密に協議し、及び障害者を積極的に関与させる。

4 この条約のいかなる規定も、締約国の法律又は締約国について効力を有する国際法に含まれる規定であって障害者の権利の実現に一層貢献するものに影響を及ぼすものではない。この条約のいずれかの締約国において法律、条約、規則又は慣習によって認められ、又は存する人権及び基本的自由については、この条約がそれらの権利若しくは自由を認めていないこと又はその認める範囲がより狭いことを理由として、それらの権利及び自由を制限し、又は侵してはならない。

5 この条約は、いかなる制限又は例外もなしに、連邦国家のすべての地域について適用する。

#### 第5条 平等及び差別されないこと

- 1 締約国は、すべての者が、法律の前に又は法律に基づいて平等であり、並びにいかなる差別もなしに法律による平等の保護及び利益を受ける権利を有することを認める。
- 2 締約国は、障害を理由とするあらゆる差別を禁止するものとし、いかなる理由による差別に対しても平等のかつ効果的な法的保護を障害者に保障する。

3 締約国は、平等を促進し、及び差別を撤廃することを目的として、合理的配慮が提供されることを確保するためのすべての適当な措置をとる。

4 障害者の事実上の平等を促進し、又は達成するために必要な特別の措置は、この条約に規定する差別と解してはならない。

#### 第6条 障害のある女子

1 締約国は、障害のある女子が複合的な差別を受けていることを認識し、及びこの点に関し、障害のある女子がすべての人権及び基本的自由を完全かつ平等に享有することを確保するための措置をとる。

2 締約国は、女子に対してこの条約に定める人権及び基本的自由を行使し、及び享有することを保障することを目的として、女子の完全な能力開発、向上及び自律的な意思決定力を確保するためのすべての適当な措置をとる。

#### 第7条 障害のある児童

1 締約国は、障害のある児童が他の児童と平等にすべての人権及び基本的自由を完全に享有することを確保するためのすべての必要な措置をとる。

2 障害のある児童に関するすべての措置をとるに当たっては、児童の最善の利益が主として考慮されるものとする。

3 締約国は、障害のある児童が、自己に影響を及ぼすすべての事項について自由に自己の意見を表明する権利並びにこの権利を実現するための障害及び年齢に適した支援を提供される権利を有することを確保する。この場合において、障害のある児童の意見は、他の児童と平等に、その児童の年齢及び成熟度に従って相応に考慮されるものとする。

#### 第8条 意識の向上

1 締約国は、次のことのための即時の、効果的なかつ適当な措置をとることを約束する。

(a) 障害者に関する社会全体（家族を含む。）の意識を向上させ、並びに障害者の権利及び尊厳に対する尊重を育成すること。

(b) あらゆる活動分野における障害者に関する定型化された観念、偏見及び有害な慣行（性及年齢を理由とするものを含む。）と戦うこと。

(c) 障害者の能力及び貢献に関する意識を向上させること。

2 このため、1の措置には、次のことを含む。

(a) 次のことのための効果的な公衆の意識の啓発活動を開始し、及び維持すること。

(i) 障害者の権利に対する理解を育てること。

(ii) 障害者に対する肯定的認識及び一層の社会の啓発を促進すること。

(iii) 障害者の技術、価値及び能力並びに職場及び労働市場に対する障害者の貢献についての認識を促進すること。

(b) 教育制度のすべての段階（幼年期からのすべて

の児童に対する教育制度を含む。)において、障害者の権利を尊重する態度を育成すること。

- (c) すべてのメディア機関が、この条約の目的に適合するように障害者を描写するよう奨励すること。
- (d) 障害者及びその権利に関する啓発のための研修計画を促進すること。

#### 第9条 施設及びサービスの利用可能性

1 締約国は、障害者が自立して生活し、及び生活のあらゆる側面に完全に参加することを可能にすることを目的として、障害者が、他の者と平等に、都市及び農村の双方において、自然環境、輸送機関、情報通信（情報通信技術及び情報通信システムを含む。）並びに公衆に開放され、又は提供される他の施設及びサービスを利用することができることを確保するための適当な措置をとる。この措置は、施設及びサービスの利用可能性における障害及び障壁を特定し、及び撤廃することを含むものとし、特に次の事項について適用する。

- (a) 建物、道路、輸送機関その他の屋内及び屋外の施設（学校、住居、医療施設及び職場を含む。）
  - (b) 情報、通信その他のサービス（電子サービス及び緊急事態に係るサービスを含む。）
- 2 締約国は、また、次のことのための適当な措置をとる。
- (a) 公衆に開放され、又は提供される施設及びサービスの利用可能性に関する最低基準及び指針の実施を奨励させ、公表し、及び監視すること。
  - (b) 公衆に開放され、又は提供される施設及びサービスを提供する民間の団体が、障害者にとっての施設及びサービスの利用可能性のあらゆる側面を考慮することを確保すること。
  - (c) 障害者が直面している施設及びサービスの利用可能性に係る問題についての研修を関係者に提供すること。
  - (d) 公衆に開放された建物その他の施設において、点字の標識及び読みやすく、かつ、理解しやすい形式の標識を提供すること。
  - (e) 公衆に開放された建物その他の施設の利用可能性を容易にするための生活支援及び仲介する者（案内者、朗読者及び専門の手話通訳を含む。）を提供すること。
  - (f) 障害者による情報の利用を確保するため、障害者に対する他の適当な形態の援助及び支援を促進すること。
  - (g) 障害者による新たな情報通信技術及び情報通信システム（インターネットを含む。）の利用を促進すること。
  - (h) 情報通信技術及び情報通信システムを最小限の費用で利用可能とするため、早い段階で、利用可能な情報通信技術及び情報通信システムの設計、開発、生産及び分配を促進すること。

#### 第10条 生命に対する権利

締約国は、すべての人間が生命に対する固有の権利を有することを再確認するものとし、障害者が他の者と平等にその権利を効果的に享有することを確保するためのすべての必要な措置をとる。

#### 第11条 危険な状況及び人道上の緊急事態

締約国は、国際法（国際人道法及び国際人権法を含む。）に基づく自国の義務に従い、危険な状況（武力紛争、人道上の緊急事態及び自然災害の発生を含む。）において障害者の保護及び安全を確保するためのすべての必要な措置をとる。

#### 第12条 法律の前にひとしく認められる権利

- 1 締約国は、障害者がすべての場所において法律の前に人として認められる権利を有することを再確認する。
- 2 締約国は、障害者が生活のあらゆる側面において他の者と平等に法的能力を享有することを認める。
- 3 締約国は、障害者がその法的能力の行使に当たって必要とする支援を利用することができるようにするための適当な措置をとる。
- 4 締約国は、法的能力の行使に関連するすべての措置において、濫用を防止するための適当かつ効果的な保護を国際人権法に従って定めることを確保する。当該保護は、法的能力の行使に関連する措置が、障害者の権利、意思及び選好を尊重すること、利益相反を生じさせず、及び不当な影響を及ぼさないこと、障害者の状況に応じ、かつ、適合すること、可能な限り短い期間に適用すること並びに権限のある、独立の、かつ、公平な当局又は司法機関による定期的な審査の対象とすることを確保するものとする。当該保護は、当該措置が障害者の権利及び利益に及ぼす影響の程度に応じたものとする。
- 5 締約国は、この条の規定に従うことを条件として、障害者が財産を所有し、又は相続し、自己の会計を管理し、及び銀行貸付け、抵当その他の形態の金融上の信用について均等な機会を有することについての平等の権利を確保するためのすべての適当かつ効果的な措置をとるものとし、障害者がその財産を恣意的に奪われないことを確保する。

#### 第13条 司法手続の利用

- 1 締約国は、障害者がすべての法的手続（捜査段階その他予備的な段階を含む。）において直接及び間接の参加者（証人を含む。）として効果的な役割を果たすことを容易にするため、手続上の配慮及び年齢に適した配慮が提供されること等により、障害者が他の者と平等に司法手続を効果的に利用することを確保する。
- 2 締約国は、障害者が司法手続を効果的に利用することに役立てるため、司法に係る分野に携わる者（警察官及び刑務官を含む。）に対する適当な研修を促進する。

#### 第14条 身体的自由及び安全

- 1 締約国は、障害者に対し、他の者と平等に次のこ

とを確保する。

- (a) 身体の自由及び安全についての権利を享有すること。
  - (b) 不法に又は恣（し）意的に自由を奪われないこと、いかなる自由のほうも奪も法律に従って行われること及びいかなる場合においても自由のほうも奪が障害の存在によって正当化されないこと。
- 2 締約国は、障害者がいずれの通過して自由を奪われた場合であっても、当該障害者が、他の者と平等に国際人権法による保障を受ける権利を有すること並びにこの条約の目的及び原則に従って取り扱われること（合理的配慮の提供によるものを含む。）を確保する。

#### 第15条 拷問又は残虐な、非人道的な若しくは品位を傷つける取扱い若しくは刑罰からの自由

- 1 いかなる者も、拷問又は残虐な、非人道的な若しくは品位を傷つける取扱い若しくは刑罰を受けない。特に、いかなる者も、その自由な同意なしに医学的又は科学的実験を受けない。
- 2 締約国は、障害者が拷問又は残虐な、非人道的な若しくは品位を傷つける取扱い若しくは刑罰を受けることを防止するため、他の者との平等を基礎として、すべての効果的な立法上、行政上、司法上その他の措置をとる。

#### 第16条 搾取、暴力及び虐待からの自由

- 1 締約国は、家庭の内外におけるあらゆる形態の搾取、暴力及び虐待（性別を理由とするものを含む。）から障害者を保護するためのすべての適当な立法上、行政上、社会上、教育上その他の措置をとる。
- 2 また、締約国は、特に、障害者及びその家族並びに介護者に対する適当な形態の性別及び年齢に配慮した援助及び支援（搾取、暴力及び虐待の事案を防止し、認識し、及び報告する方法に関する情報及び教育を提供することによるものを含む。）を確保することにより、あらゆる形態の搾取、暴力及び虐待を防止するためのすべての適当な措置をとる。締約国は、保護事業が年齢、性別及び障害に配慮したものであることを確保する。
- 3 締約国は、あらゆる形態の搾取、暴力及び虐待の発生を防止するため、障害者に役立つことを意図したすべての施設及び計画が独立した当局により効果的に監視されることを確保する。
- 4 締約国は、あらゆる形態の搾取、暴力又は虐待の被害者となる障害者の身体的、認知的及び心理的な回復及びリハビリテーション並びに社会復帰を促進するためのすべての適当な措置（保護事業の提供によるものを含む。）をとる。このような回復及び復帰は、障害者の健康、福祉、自尊心、尊厳及び自律を育成する環境において行われるものとし、性別及び年齢に応じたニーズを考慮に入れる。
- 5 締約国は、障害者に対する搾取、暴力及び虐待の事案が特定され、捜査され、及び適当な場合には訴

追されることを確保するための効果的な法令及び政策（女子及び児童に重点を置いた法令及び政策を含む。）を実施する。

#### 第17条 個人が健全であることの保護

すべての障害者は、他の者と平等に、その心身が健全であることを尊重される権利を有する。

#### 第18条 移動の自由及び国籍についての権利

- 1 締約国は、障害者に対して次のことを確保すること等により、障害者が他の者と平等に移動の自由、居住の自由及び国籍についての権利を有することを認める。
  - (a) 国籍を取得し、及び変更する権利を有すること並びにその国籍を恣意的に又は障害を理由として奪われないこと。
  - (b) 国籍に係る文書若しくは身元に係る他の文書を手入し、所有し、及び利用すること又は移動の自由についての権利の行使を容易にするために必要とされる関連手続（例えば、出入国の手続）を利用することを、障害を理由として奪われないこと。
  - (c) いずれの国（自国を含む。）からも自由に離れることができること。
  - (d) 自国に戻る権利を恣し意的に又は障害を理由として奪われないこと。
- 2 障害のある児童は、出生の後直ちに登録される。障害のある児童は、出生の時から氏名を有する権利及び国籍を取得する権利を有するものとし、また、できる限りその父母を知り、かつ、その父母によって養育される権利を有する。

#### 第19条 自立した生活及び地域社会に受け入れられること

この条約の締約国は、すべての障害者が他の者と平等の選択の機会をもって地域社会で生活する平等の権利を認めるものとし、障害者が、この権利を完全に享受し、並びに地域社会に完全に受け入れられ、及び参加することを容易にするための効果的かつ適当な措置をとる。この措置には、次のことを確保することによるものを含む。

- (a) 障害者が、他の者と平等に、居住地を選択し、及びどこで誰と生活するかを選択する機会を有すること並びに特定の居住施設で生活する義務を負わないこと。
- (b) 地域社会における生活及び地域社会への受入れを支援し、並びに地域社会からの孤立及び隔離を防止するために必要な在宅サービス、居住サービスその他の地域社会支援サービス（人的支援を含む。）を障害者が利用することができること。
- (c) 一般住民向けの地域社会サービス及び施設が、障害者にとって他の者と平等に利用可能であり、かつ、障害者のニーズに対応していること。

#### 第20条 個人的な移動を容易にすること

締約国は、障害者ができる限り自立して移動することを容易にすることを確保するための効果的な措置を

とる。この措置には、次のことによるものを含む。

- (a) 障害者が、自ら選択する方法で、自ら選択する時に、かつ、妥当な費用で個人的に移動することを容易にすること。
- (b) 障害者が質の高い移動補助具、装置、支援技術、生活支援及び仲介者を利用することを容易にすること（これらを妥当な費用で利用可能なものとするを含む。）。
- (c) 障害者及び障害者と共に行動する専門職員に対し、移動技術に関する研修を提供すること。
- (d) 移動補助具、装置及び支援技術を生産する事業者に対し、障害者の移動のあらゆる側面を考慮するよう奨励すること。

#### 第 21 条 表現及び意見の自由並びに情報の利用

締約国は、障害者が、第二条に定めるあらゆる形態の意思疎通であって自ら選択するものにより、表現及び意見の自由（他の者と平等に情報及び考えを求め、受け、及び伝える自由を含む。）についての権利を行使することができることを確保するためのすべての適当な措置をとる。この措置には、次のことによるものを含む。

- (a) 障害者に対し、様々な種類の障害に相応した利用可能な様式及び技術により、適時に、かつ、追加の費用を伴わず、一般公衆向けの情報を提供すること。
- (b) 公的な活動において、手話、点字、補助的及び代替的な意思疎通並びに障害者が自ら選択する他のすべての利用可能な意思疎通の手段、形態及び様式を用いることを受け入れ、及び容易にすること。
- (c) 一般公衆に対してサービス（インターネットによるものを含む。）を提供する民間の団体が情報及びサービスを障害者にとって利用可能又は使用可能な様式で提供しよう要請すること。
- (d) マスメディア（インターネットを通じて情報を提供する者を含む。）がそのサービスを障害者にとって利用可能なものとするよう奨励すること。
- (e) 手話の使用を認め、及び促進すること。

#### 第 22 条 プライバシーの尊重

- 1 いかなる障害者も、居住地又は居住施設のいかなるを問わず、そのプライバシー、家族、住居し又は通信その他の形態の意思疎通に対して恣意的に又は不法に干渉されず、また、名誉及び信用を不法に攻撃されない。障害者は、このような干渉又は攻撃に対する法律の保護を受ける権利を有する。
- 2 締約国は、他の者と平等に、障害者の個人、健康及びリハビリテーションに関する情報に係るプライバシーを保護する。

#### 第 23 条 家庭及び家族の尊重

- 1 締約国は、他の者と平等に、婚姻、家族及び親子関係に係るすべての事項に関し、障害者に対する差別を撤廃するための効果的かつ適当な措置をとる。この措置は、次のことを確保することを目的とする。

- (a) 婚姻をすることができる年齢のすべての障害者が、両当事者の自由かつ完全な合意に基づいて婚姻をし、かつ、家族を形成する権利を認めること。
- (b) 障害者が子の数及び出産の間隔を自由にかつ責任をもって決定する権利並びに障害者が年齢に適した情報、生殖及び家族計画に係る教育を享受する権利を認め、並びに障害者がこれらの権利を行使することを可能とするために必要な手段を提供されること。
- (c) 障害者（児童を含む。）が、他の者と平等に生殖能力を保持すること。

2 締約国は、子の後見、養子縁組又はこれらに類する制度が国内法令に存在する場合には、それらの制度に係る障害者の権利及び責任を確保する。あらゆる場合において、子の最善の利益は至上である。締約国は、障害者が子の養育についての責任を遂行するに当たり、当該障害者に対して適当な援助を与える。

3 締約国は、障害のある児童が家庭生活について平等の権利を有することを確保する。締約国は、この権利を実現し、並びに障害のある児童の隠匿、遺棄、放置及び隔離を防止するため、障害のある児童及びその家族に対し、包括的な情報、サービス及び支援を早期に提供することを約束する。

4 締約国は、児童がその父母の意思に反してその父母から分離されないことを確保する。ただし、権限のある当局が司法の審査に従うことを条件として適用のある法律及び手続に従いその分離が児童の最善の利益のために必要であると決定する場合は、この限りでない。いかなる場合にも、児童は、自己が障害を有すること又は父母の一方若しくは双方が障害を有することを理由として父母から分離されない。

5 締約国は、近親の家族が障害のある児童を監護することができない場合には、一層広い範囲の家族の中で代替的な監護を提供し、及びこれが不可能なときは、地域社会の中で家庭的な環境により代替的な監護を提供するようあらゆる努力を払うことを約束する。

#### 第 24 条 教育

1 締約国は、教育についての障害者の権利を認める。締約国は、この権利を差別なしに、かつ、機会の均等を基礎として実現するため、次のことを目的とするあらゆる段階における障害者を包容する教育制度及び生涯学習を確保する。

- (a) 人間の潜在能力並びに尊厳及び自己の価値についての意識を十分に発達させ、並びに人権、基本的自由及び人間の多様性の尊重を強化すること。
- (b) 障害者が、その人格、才能及び創造力並びに精神的及び身体的な能力をその可能な最大限度まで発達させること。
- (c) 障害者が自由な社会に効果的に参加することを可能とすること。

2 締約国は、1の権利の実現に当たり、次のことを

確保する。

- (a) 障害者が障害を理由として教育制度一般から排除されないこと及び障害のある児童が障害を理由として無償のかつ義務的な初等教育から又は中等教育から排除されないこと。
  - (b) 障害者が、他の者と平等に、自己の生活する地域社会において、包容され、質が高く、かつ、無償の初等教育の機会及び中等教育の機会を与えられること。
  - (c) 個人に必要とされる合理的配慮が提供されること。
  - (d) 障害者が、その効果的な教育を容易にするために必要な支援を教育制度一般の下で受けること。
  - (e) 学問的及び社会的な発達を最大にする環境において、完全な包容という目標に合致する効果的で個別化された支援措置がとられることを確保すること。
- 3 締約国は、障害者が地域社会の構成員として教育に完全かつ平等に参加することを容易にするため、障害者が生活する上での技能及び社会的な発達のための技能を習得することを可能とする。このため、締約国は、次のことを含む適当な措置をとる。
- (a) 点字、代替的な文字、意思疎通の補助的及び代替的な形態、手段及び様式並びに適応及び移動のための技能の習得並びに障害者相互による支援及び助言を容易にすること。
  - (b) 手話の習得及び聴覚障害者の社会の言語的な同一性の促進を容易にすること。
  - (c) 視覚障害若しくは聴覚障害又はこれらの重複障害のある者（特に児童）の教育が、その個人にとって最も適当な言語並びに意思疎通の形態及び手段で、かつ、学問的及び社会的な発達を最大にする環境において行われることを確保すること。
- 4 締約国は、1の権利の実現の確保を助長することを目的として、手話又は点字について能力を有する教員（障害のある教員を含む。）を雇用し、並びに教育のすべての段階に従事する専門家及び職員に対する研修を行うための適当な措置をとる。この研修には、障害についての意識の向上を組み入れ、また、適当な意思疎通の補助的及び代替的な形態、手段及び様式の使用並びに障害者を支援するための教育技法及び教材の使用を組み入れるものとする。
- 5 締約国は、障害者が、差別なしに、かつ、他の者と平等に高等教育一般、職業訓練、成人教育及び生涯学習の機会を与えられることを確保する。このため、締約国は、合理的配慮が障害者に提供されることを確保する。

#### 第25条 健康

締約国は、障害者が障害を理由とする差別なしに到達可能な最高水準の健康を享受する権利を有することを認める。締約国は、障害者が性別に配慮した保健サービス（保健に関連するリハビリテーションを含む。）

を利用することができることを確保するためのすべての適当な措置をとる。締約国は、特に、次のことを行う。

- (a) 障害者に対して他の者に提供されるものと同じ範囲、質及び水準の無償の又は妥当な保健及び保健計画（性及び生殖に係る健康並びに住民のための公衆衛生計画の分野を含む。）を提供すること。
- (b) 障害者が特にその障害のために必要とする保健サービス（適当な場合には、早期発見及び早期関与を含む。）並びに特に児童及び高齢者の間で障害の悪化を最小限にし、及び防止するためのサービスを提供すること。
- (c) これらの保健サービスを、障害者自身が属する地域社会（農村を含む。）の可能な限り近くにおいて提供すること。
- (d) 保健に従事する者に対し、特に、研修を通じて及び公私の保健に関する倫理基準を定めることによって障害者の人権、尊厳、自立及びニーズに関する意識を高めることにより、他の者と同じの質の医療（例えば、情報に基づく自由な同意を基礎とした医療）を障害者に提供しよう要請すること。
- (e) 健康保険及び国内法により認められている場合には生命保険の提供に当たり、公正かつ妥当な方法で行い、及び障害者に対する差別を禁止すること。
- (f) 保健若しくは保健サービス又は食糧及び飲料の提供に関し、障害を理由とする差別的な拒否を防止すること。

#### 第26条 リハビリテーション

- 1 締約国は、障害者が、最大限の自立並びに十分な身体的、精神的、社会的及び職業的な能力を達成し、及び維持し、並びに生活のあらゆる側面に完全に受け入れられ、及び参加することを達成し、及び維持することを可能とするための効果的かつ適当な措置（障害者相互による支援を通じたものを含む。）をとる。このため、締約国は、特に、保健、雇用、教育及び社会に係るサービスの分野において、包括的なリハビリテーションのサービス及びプログラムを企画し、強化し、及び拡張する。この場合において、これらのサービス及びプログラムは、次のようなものとする。
- (a) 可能な限り初期の段階において開始し、並びに個人のニーズ及び長所に関する総合的な評価を基礎とすること。
  - (b) 地域社会及び社会のあらゆる側面への参加及び受入れを支援し、自発的なものとし、並びに障害者自身が属する地域社会（農村を含む。）の可能な限り近くにおいて利用可能なものとする。
- 2 締約国は、リハビリテーションのサービスに従事する専門家及び職員に対する初期研修及び継続的な研修の充実を促進する。
- 3 締約国は、障害者のために設計された支援装置及び支援技術であって、リハビリテーションに関連するものの利用可能性、知識及び使用を促進する。

## 第 27 条 労働及び雇用

1 締約国は、障害者が他の者と平等に労働についての権利を有することを認める。この権利には、障害者に対して開放され、障害者を受け入れ、及び障害者にとって利用可能な労働市場及び労働環境において、障害者が自由に選択し、又は承諾する労働によって生計を立てる機会を有する権利を含む。締約国は、特に次のことのための適当な措置（立法によるものを含む。）をとることにより、労働についての障害者（雇用の過程で障害を有することとなった者を含む。）の権利が実現されることを保障し、及び促進する。

- (a) あらゆる形態の雇用に係るすべての事項（募集、採用及び雇用の条件、雇用の継続、昇進並びに安全かつ健康的な作業条件を含む。）に関し、障害を理由とする差別を禁止すること。
  - (b) 他の者と平等に、公正かつ良好な労働条件（例えば、均等な機会及び同一価値の労働についての同一報酬）、安全かつ健康的な作業条件（例えば、嫌がらせからの保護）及び苦情に対する救済についての障害者の権利を保護すること。
  - (c) 障害者が他の者と平等に労働組合についての権利を行使することができることを確保すること。
  - (d) 障害者が技術及び職業の指導に関する一般的な計画、職業紹介サービス並びに職業訓練及び継続的な訓練を効果的に利用することを可能とすること。
  - (e) 労働市場において障害者の雇用機会の増大を図り、及びその昇進を促進すること並びに職業を求め、これに就き、これを継続し、及びその職業に復帰する際の支援を促進すること。
  - (f) 自営活動の機会、起業能力、協同組合の発展及び自己の事業の開始を促進すること。
  - (g) 公的部門において障害者を雇用すること。
  - (h) 適当な政策及び措置（積極的差別是正措置、奨励措置その他の措置を含めることができる。）を通じて、民間部門における障害者の雇用を促進すること。
  - (i) 職場において合理的配慮が障害者に提供されることを確保すること。
  - (j) 開かれた労働市場において障害者が実務経験を取得することを促進すること。
  - (k) 障害者の職業リハビリテーション、職業の保持及び職場復帰計画を促進すること。
- 2 締約国は、障害者が、奴隷の状態又は隷属状態に置かれること及び他の者と平等に強制労働から保護されることを確保する。

## 第 28 条 相当な生活水準及び社会的な保障

1 締約国は、障害者及びその家族の相当な生活水準（相当な食糧、衣類及び住居を含む。）についての障害者の権利並びに生活条件の不断の改善についての障害者の権利を認めるものとし、障害を理由とする

差別なしにこの権利を実現することを保障し、及び促進するための適当な措置をとる。

2 締約国は、社会的な保障についての障害者の権利及び障害を理由とする差別なしにこの権利を享受することについての障害者の権利を認めるものとし、この権利の実現を保障し、及び促進するための適当な措置をとる。この措置には、次の措置を含む。

- (a) 障害者が清浄な水のサービスを平等に利用することを確保し、及び障害者が障害に関連するニーズに係る適当かつ利用可能なサービス、装置その他の援助を利用することを確保するための措置
- (b) 障害者（特に、障害のある女子及び高齢者）が社会的な保障及び貧困削減に関する計画を利用することを確保するための措置
- (c) 貧困の状況において生活している障害者及びその家族が障害に関連する費用を伴った国の援助（適当な研修、カウンセリング、財政的援助及び休息介護を含む。）を利用することを確保するための措置
- (d) 障害者が公営住宅計画を利用することを確保するための措置
- (e) 障害者が退職に伴う給付及び計画を平等に利用することを確保するための措置

## 第 29 条 政治的及び公的活動への参加

締約国は、障害者に対して政治的権利を保障し、及び他の者と平等にこの権利を享受する機会を保障するものとし、次のことを約束する。

- (a) 特に次のことを行うことにより、障害者が、直接に、又は自由に選んだ代表者を通じて、他の者と平等に政治的及び公的活動に効果的かつ完全に参加することができること（障害者が投票し、及び選挙される権利及び機会を含む。）を確保すること。
  - (i) 投票の手続、設備及び資料が適当であり、利用可能であり、並びにその理解及び使用が容易であることを確保すること。
  - (ii) 適当な場合には技術支援及び新たな技術の使用を容易にすることにより、障害者が、選挙及び国民投票において脅迫を受けることなく秘密投票によって投票する権利並びに選挙に立候補する権利並びに政府のあらゆる段階において効果的に在職し、及びあらゆる公務を遂行する権利を保護すること。
  - (iii) 選挙人としての障害者の意思の自由な表明を保障すること。このため、必要な場合には、障害者の要請に応じて当該障害者が選択する者が投票の際に援助することを認めること。
- (b) 障害者が、差別なしに、かつ、他の者と平等に政治に効果的かつ完全に参加することができる環境を積極的に促進し、及び政治への障害者の参加を奨励すること。政治への参加には、次のことを含む。

- (i) 国の公的及び政治的活動に関係のある非政府機関及び非政府団体に参加し、並びに政党の活動及び運営に参加すること。
- (ii) 国際、国内、地域及び地方の各段階において障害者を代表するための組織を結成し、並びにこれに参加すること。

### 第30条 文化的な生活、レクリエーション、余暇及びスポーツへの参加

- 1 締約国は、障害者が他の者と平等に文化的な生活に参加する権利を認めるものとし、障害者が次のことを行うことを確保するためのすべての適当な措置をとる。
  - (a) 利用可能な様式を通じて、文化的な作品を享受すること。
  - (b) 利用可能な様式を通じて、テレビジョン番組、映画、演劇その他の文化的な活動を享受すること。
  - (c) 文化的な公演又はサービスが行われる場所（例えば、劇場、博物館、映画館、図書館、観光サービス）へのアクセスを享受し、並びにできる限り自国の文化的に重要な記念物及び遺跡へのアクセスを享受すること。
- 2 締約国は、障害者が、自己の利益のためのみでなく、社会を豊かにするためにも、創造的、芸術的及び知的な潜在能力を開発し、及び活用する機会を有することを可能とするための適当な措置をとる。
- 3 締約国は、国際法に従い、知的財産権を保護する法律が、障害者が文化的な作品を享受する機会を妨げる不当な又は差別的な障壁とならないことを確保するためのすべての適当な措置をとる。
- 4 障害者は、他の者と平等に、その独自の文化的及び言語的な同一性（手話及び聴覚障害者の文化を含む。）の承認及び支持を受ける権利を有する。
- 5 締約国は、障害者が他の者と平等にレクリエーション、余暇及びスポーツの活動に参加することを可能とすることを目的として、次のことのための適当な措置をとる。
  - (a) 障害者があらゆる水準の一般のスポーツ活動に可能な限り参加することを奨励し、及び促進すること。
  - (b) 障害者が障害に応じたスポーツ活動及びレクリエーション活動を組織し、及び発展させ、並びにこれらに参加する機会を有することを確保すること。このため、適当な指導、研修及び資源が他の者と平等に提供されるよう奨励すること。
  - (c) 障害者がスポーツ、レクリエーション及び観光の場所へのアクセスを認められることを確保すること。
  - (d) 障害のある児童が遊び、レクリエーション、余暇及びスポーツ活動（学校制度におけるこれらの活動を含む。）への参加について均等な機会を享受することを確保すること。
  - (e) 障害者がレクリエーション、観光、余暇及びス

ポーツ活動の企画に関与する者によるサービスを利用することを確保すること。

### 第31条 統計及び資料の収集

- 1 締約国は、この条約を実現するための政策を立案し、及び実施することを可能とするための適当な情報（統計資料及び研究資料を含む。）を収集することを約束する。この情報を収集し、及び保存する過程は、次のことを満たさなければならない。
  - (a) 障害者の秘密の保持及びプライバシーの尊重を確保するため、法令によって定められた保護（資料の保護に関する法令を含む。）を遵守すること。
  - (b) 人権及び基本的自由を保護するための国際的に受け入れられた規範並びに統計の収集及び利用に関する倫理上の原則を遵守すること。
- 2 この条の規定に従って収集された情報は、適宜分類されるものとし、この条約に基づく締約国の義務の履行の評価に役立つため、並びに障害者がその権利を行使する際に直面する障壁を特定し、及び当該障壁に対処するために利用される。
- 3 締約国は、これらの統計の普及について責任を負うものとし、障害者及び他の者が当該統計を利用可能とすることを確保する。

### 第32条 国際協力

- 1 締約国は、この条約の目的及び趣旨を実現するための自国の努力を支援するために国際協力及びその促進が重要であることを認識し、この点に関し、国家間において並びに適当な場合には関連のある国際的及び地域的機関並びに市民社会（特に障害者の組織）と連携して、適当かつ効果的な措置をとる。これらの措置には、特に次のことを含むことができる。
  - (a) 国際協力（国際的な開発計画を含む。）が、障害者を受け入れ、かつ、障害者にとって利用可能なものであることを確保すること。
  - (b) 能力の開発（情報、経験、研修計画及び最良の実例の交換及び共有を通じたものを含む。）を容易にし、及び支援すること。
  - (c) 研究における協力並びに科学及び技術に関する知識の利用を容易にすること。
  - (d) 適当な場合には、技術援助及び経済援助（利用可能な支援技術の利用及び共有を容易にすることによる援助並びに技術移転を通じた援助を含む。）を提供すること。
- 2 この条の規定は、この条約に基づく義務を履行する各締約国の義務に影響を及ぼすものではない。

### 第33条 国内における実施及び監視

- 1 締約国は、自国の制度に従い、この条約の実施に関連する事項を取り扱う一又は二以上の中央連絡先を政府内に指定する。また、締約国は、異なる部門及び段階における関連のある活動を容易にするため、政府内における調整のための仕組みの設置又は指定に十分な考慮を払う。
- 2 締約国は、自国の法律上及び行政上の制度に従い、



この条約の実施を促進し、保護し、及び監視するための枠組み（適当な場合には、一又は二以上の独立した仕組みを含む。）を自国内において維持し、強化し、指定し、又は設置する。締約国は、このような仕組みを指定し、又は設置する場合には、人権の保護及び促進のための国内機構の地位及び役割に関する原則を考慮に入れる。

3 市民社会（特に、障害者及び障害者を代表する団体）は、監視の過程に十分に関与し、かつ、参加する。

### 第 34 条 障害者の権利に関する委員会

1 障害者の権利に関する委員会（以下「委員会」という。）を設置する。委員会は、以下に定める任務を遂行する。

2 委員会は、この条約の効力発生の時は 12 人の専門家で構成する。更に 60 の国がこの条約を批准し、又はこれに加入した後は、委員会の委員の数を 6 人まで増加させ、最大で 18 人とする。

3 委員会の委員は、個人の資格で職務を遂行するものとし、徳望が高く、かつ、この条約が対象とする分野において能力及び経験を認められた者とする。締約国は、委員の候補者を指名するに当たり、第四条 3 の規定に十分な考慮を払うよう要請される。

4 委員会の委員については、締約国が、委員の配分が地理的に衡平に行われること、異なる文明形態及び主要な法体系が代表されること、男女が衡平に代表されること並びに障害のある専門家が参加することを考慮に入れて選出する。

5 委員会の委員は、締約国会議の会合において、締約国により当該締約国の国民の中から指名された者の名簿の中から秘密投票により選出される。締約国会議の会合は、締約国の 3 分の 2 をもって定足数とする。これらの会合においては、出席し、かつ、投票する締約国の代表によって投じられた票の過半数で、かつ、過半数の票を得た者をもって委員会に選出された委員とする。

6 委員会の委員の最初の選挙は、この条約の効力発生の日の後六箇月以内に行う。国際連合事務総長は、委員会の委員の選挙の日の遅くとも四箇月前までに、締約国に対し、自国が指名する者の氏名を二箇月以内に提出するよう書簡で要請する。その後、同事務総長は、指名された者のアルファベット順による名簿（これらの者を指名した締約国名を表示した名簿とする。）を作成し、この条約の締約国に送付する。

7 委員会の委員は、4 年の任期で選出される。委員は、一回のみ再選される資格を有する。ただし、最初の選挙において選出された委員のうち 6 人の委員の任期は、2 年で終了するものとし、これらの 6 人の委員は、最初の選挙の後直ちに、5 に規定する会合の議長によりくじ引で選ばれる。

8 委員会の 6 人の追加的な委員の選挙は、この条約の関連する規定に従って定期選挙の際に行われる。

9 委員会の委員が死亡し、辞任し、又は他の理由のために職務を遂行することができなくなったことを宣言した場合には、当該委員を指名した締約国は、残余の期間職務を遂行する他の専門家であって、資格を有し、かつ、この条約の関連規定に定める条件を満たすものを任命する。

10 委員会は、その手続規則を定める。

11 国際連合事務総長は、委員会がこの条約に定める任務を効果的に遂行するために必要な職員及び便益を提供するものとし、委員会の最初の会合を招集する。

12 この条約に基づいて設置される委員会の委員は、国際連合総会が委員会の任務の重要性を考慮して決定する条件に従い、同総会の承認を得て、国際連合の財源から報酬を受ける。

13 委員会の委員は、国際連合の特権及び免除に関する条約の関連規定に規定する国際連合のための職務を遂行する専門家の便益、特権及び免除を享受する。

### 第 35 条 締約国による報告

1 各締約国は、この条約に基づく義務を履行するためにとった措置及びこれらの措置によりもたらされた進歩に関する包括的な報告を、この条約が自国について効力を生じた後 2 年以内に国際連合事務総長を通じて委員会に提出する。

2 その後、締約国は、少なくとも 4 年ごとに、更に委員会が要請するときはいつでも、その後の報告を提出する。

3 委員会は、報告の内容について適用される指針を決定する。

4 委員会に対して包括的な最初の報告を提出した締約国は、その後の報告においては、既に提供した情報を繰り返す必要はない。締約国は、委員会に対する報告を作成するに当たり、公開され、かつ、透明性のある過程において作成することを検討し、及び第四条 3 の規定に十分な考慮を払うよう要請される。

5 報告には、この条約に基づく義務の履行の程度に影響を及ぼす要因及び障害を記載することができる。

### 第 36 条 報告の検討

1 委員会は、各報告を検討する。委員会は、当該報告について、適当と認める提案及び一般的な性格を有する勧告を行うことができるものとし、これらの提案及び一般的な性格を有する勧告を関係締約国に送付する。当該関係締約国は、委員会に対し、自国が選択する情報を提供することにより回答することができる。委員会は、この条約の実施に関連する追加の情報を当該関係締約国に要請することができる。

2 いずれかの締約国による報告の提出が著しく遅延している場合には、委員会は、委員会にとって利用可能な信頼し得る情報を基礎として当該締約国におけるこの条約の実施状況を審査することができることを当該締約国に通報することができる。ただし、この審査は、関連する報告がその通報の後三箇

月以内に提出されない場合にのみ行われる。委員会は、当該締約国がその審査に参加するよう要請する。当該締約国が関連する報告を提出することにより回答する場合には、1の規定を適用する。

- 3 国際連合事務総長は、1の報告をすべての締約国が利用することができるようにする。
- 4 締約国は、1の報告を自国において公衆が広く利用することができるようにし、これらの報告に関連する提案及び一般的な性格を有する勧告の利用を容易にする。
- 5 委員会は、適当と認める場合には、締約国からの報告に記載されている技術的な助言若しくは援助の要請又はこれらの必要性の記載に対処するため、これらの要請又は必要性の記載に関する委員会の見解及び勧告がある場合には当該見解及び勧告とともに、国際連合の専門機関、基金及び計画その他の権限のある機関に当該報告を送付する。

#### 第37条 締約国と委員会との間の協力

- 1 各締約国は、委員会と協力するものとし、委員の任務の遂行を支援する。
- 2 委員会は、締約国との関係において、この条約の実施のための当該締約国の能力を向上させる方法及び手段（国際協力を通じたものを含む。）に十分な考慮を払う。

#### 第38条 委員会と他の機関との関係

この条約の効果的な実施を促進し、及びこの条約が対象とする分野における国際協力を奨励するため、

- (a) 専門機関その他の国際連合の機関は、その任務の範囲内にある事項に関するこの条約の規定の実施についての検討に際し、代表を出す権利を有する。委員会は、適当と認める場合には、専門機関その他の権限のある機関に対し、これらの機関の任務の範囲内にある事項に関するこの条約の実施について専門家の助言を提供するよう要請することができる。委員会は、専門機関その他の国際連合の機関に対し、これらの機関の任務の範囲内にある事項に関するこの条約の実施について報告を提出するよう要請することができる。
- (b) 委員会は、その任務を遂行するに当たり、それぞれの報告に係る指針、提案及び一般的な性格を有する勧告の整合性を確保し、並びにその任務の遂行における重複を避けるため、適当な場合には、人権に関する国際条約によって設置された他の関連する組織と協議する。

#### 第39条 委員会の報告

委員会は、その活動につき2年ごとに国際連合総会及び経済社会理事会に報告するものとし、また、締約国から得た報告及び情報の検討に基づく提案及び一般的な性格を有する勧告を行うことができる。これらの提案及び一般的な性格を有する勧告は、締約国から意見がある場合にはその意見とともに、委員会の報告に記載する。

#### 第40条 締約国会議

- 1 締約国は、この条約の実施に関する事項を検討するため、定期的に締約国会議を開催する。
- 2 締約国会議は、この条約が効力を生じた後六箇月以内に国際連合事務総長が招集する。その後の締約国会議は、2年ごとに又は締約国会議の決定に基づき同事務総長が招集する。

#### 第41条 寄託

この条約の寄託者は、国際連合事務総長とする。

#### 第42条 署名

この条約は、2007年3月30日から、ニューヨークにある国際連合本部において、すべての国及び地域的な統合のための機関による署名のために開放しておく。

#### 第43条 拘束されることについての同意

この条約は、署名国によって批准されなければならない。また、署名した地域的な統合のための機関によって正式確認されなければならない。この条約は、これに署名していない国及び地域的な統合のための機関による加入のために開放しておく。

#### 第44条 地域的な統合のための機関

- 1 「地域的な統合のための機関」とは、特定の地域の主権国家によって構成される機関であって、この条約が規律する事項に関してその構成国から権限の委譲を受けたものをいう。地域的な統合のための機関は、この条約の規律する事項に関するその権限の範囲をこの条約の正式確認書又は加入書において宣言する。その後、当該機関は、その権限の範囲の実質的な変更を寄託者に通報する。
- 2 この条約において「締約国」についての規定は、地域的な統合のための機関の権限の範囲内で当該機関について適用する。
- 3 次条1並びに第47条2及び3の規定の適用上、地域的な統合のための機関が寄託する文書は、これを数に加えてはならない。
- 4 地域的な統合のための機関は、その権限の範囲内の事項について、この条約の締約国であるその構成国の数と同数の票を締約国会議において投ずる権利を行使することができる。当該機関は、その構成国が自国の投票権を行使する場合には、投票権を行使してはならない。その逆の場合も、同様とする。

#### 第45条 効力発生

- 1 この条約は、20番目の批准書又は加入書が寄託された後30日目の日に効力を生ずる。
- 2 この条約は、20番目の批准書、正式確認書又は加入書が寄託された後にこれを批准し、若しくは正式確認し、又はこれに加入する国又は地域的な統合のための機関については、その批准書、正式確認書又は加入書の寄託の後30日目の日に効力を生ずる。

#### 第46条 留保

- 1 この条約の趣旨及び目的と両立しない留保は、認められない。
- 2 留保は、いつでも撤回することができる。

## 第47条 改正

- 1 いずれの締約国も、この条約の改正を提案し、及び改正案を国際連合事務総長に提出することができる。同事務総長は、締約国に対し、改正案を送付するものとし、締約国による改正案の審議及び決定のための締約国の会議の開催についての賛否を通報するよう要請する。その送付の日から四箇月以内に締約国の3分の1以上が会議の開催に賛成する場合には、同事務総長は、国際連合の主催の下に会議を招集する。会議において出席し、かつ、投票する締約国の3分の2以上の多数によって採択された改正案は、同事務総長により、承認のために国際連合総会に送付され、その後受諾のためにすべての締約国に送付される。
- 2 1の規定により採択され、かつ、承認された改正は、当該改正の採択の日における締約国の3分の2以上が受諾書を寄託した後30日目の日に効力を生ずる。その後は、当該改正は、いずれの締約国についてもその受諾書の寄託の後30日目の日に効力を生ずる。改正は、それを受諾した締約国のみを拘束する。
- 3 締約国会議がコンセンサス方式によって決定する場合には、1の規定により採択され、かつ、承認された改正であって、第34条及び第38条から第40条までにのみ関連するものは、当該改正の採択の日における締約国の3分の2以上が受諾書を寄託した後30日目の日に効力を生ずる。

## 第48条 廃棄

締約国は、国際連合事務総長に対して書面による通告を行うことにより、この条約を廃棄することができる。廃棄は、同事務総長がその通告を受領した日の後1年で効力を生ずる。

## 第49条 利用可能な様式

この条約は、利用可能な様式で提供される。

## 第50条 正文

この条約は、アラビア語、中国語、英語、フランス語、ロシア語及びスペイン語をひとしく正文とする。

以上の証拠として、下名の全権委員は、各自の政府から正当に委任を受けてこの条約に署名した。

## 3 基本的な用語集

### <あ行>

#### 医療的ケア

たんの吸引や鼻などから管を通して栄養剤を流し込む経管栄養など、在宅で家族が日常的に行っている医療的介助行為を、医師法上の「医療行為」と区別して「医療的ケア」と呼んでいる。

#### インクルーシブ（インクルージョン）

「包み込む」「包含する」という意味で、障がいのある人も他の人と一緒に地域の学校で学び、地域で働く場を確保し、必要なときに必要な援助や支援を受けて生活するために社会資源を充実し、住民ネットワークで障がいのある人を地域社会の中で包み込んで、ともに支えていくこと。

#### NPO（NPO 法人）

「Nonprofit Organization」の略で、非営利組織のことをいう。医療や福祉、環境、文化、まちづくりなどのさまざまな分野において、営利を目的とせず、社会的使命を意識した活動を行う民間の組織。特定非営利活動促進法（NPO 法）の認証を受けた団体を「NPO 法人」（特定非営利活動法人）という。

### <か行>

#### ガイドヘルパー

単独での外出が困難な知的障がいや重度の視覚障がいのある人等を対象に、外出の際に付き添い介護を行う人。

#### 学習障がい（LD）

LDは「Learning Disorders, Learning Disabilities」の略。学習障がいとは、基本的には全般的な知的発達に遅れはないが、聞く、話す、読む、書く、計算する又は推論する能力のうち、特定のものの習得と使用に著しい困難を示すさまざまな状態を指すものである。学習障がいは、その原因として、中枢神経系に何らかの機能障がいがあると推定されるが、視覚障がい、聴覚障がい、知的障がい、情緒障がいなどの障がいや環境的な要因が直接の原因となるものではない。

#### 共生社会

障がいのあるないにかかわらず、国民誰もが相互に人格と個性を尊重し支え合う社会であるとともに、障がいのある人が社会の対等な構成員として人権を尊重され、自己選択と自己決定の下に社会のあらゆる活動に参加、参画し、その一員として責任を分担する社会のこと。

## 協働

地域の自治、まちづくりの分野においては、市民と事業者、行政が、地域社会の課題の解決など共通の目的を実現するため、信頼と理解のもと、それぞれの役割と責任を自覚しながら、お互いの立場の違いを認めた上で尊重し合い、協力すること。

## 共同作業所

法的に日中活動系サービス事業所の諸基準を満たさないために、国の助成制度を受けられないが、障がいのある人、親、職員等が共同で働く場をつくり、自主的に運営している無認可の障がい者施設のこと。小規模作業所、福祉作業所の名称で呼ばれる場合がある。

## グループホーム（共同生活援助事業）

障がいのある人が世話人の援助を受けながら、数人で共同生活を行う住居（マンション、一戸建て、公的住宅等）のこと。同居あるいは近隣に居住している世話人が、食事の提供、相談、その他の日常生活上の援助を行う事業。

## グループワーク事業

精神障がいのある人の生活能力や対人関係能力の回復を促し、社会参加の促進を図ることを目的として、ミーティングやスポーツ、レクリエーション活動（外出）などのプログラムを行う事業。

## ケアホーム（共同生活介護事業）

比較的程度の重い障がいのある人が、世話人の援助や介護を受けながら、数人で共同生活を行う住居（マンション、一戸建て、公的住宅等）のこと。同居あるいは近隣に居住している世話人が主に夜間行われる入浴、排泄、食事の援助や介護等を行う事業。

## ケアマネジメント

個々の要援護者の生活状態にあわせて、要援護者のニーズを明らかにし、ニーズに合致する社会資源についてのきめ細かいケアプランを作成し、これに基づいて実際にサービス等の社会資源を提供していく仕組みのこと。さらに、要援護者の状態を継続的に見守ることと、包括的・継続的に支援やサービスの提供体制を確保する支援の方法のこと。

## 健康すいた21

市民の自主的で積極的な健康づくりを支援することを目指して、吹田市が平成18年（2006年）3月に策定した計画であり、健康増進法第8条に基づく市町村健康増進計画。

疾病の発病を未然に防ぐ一次予防に重点を置き、栄養・食生活の改善、たばこ対策の推進、寝たきり・閉じこもり予防など8つの重点項目を設定している。

## 高機能自閉症

高機能自閉症とは、3歳位までに現れ、他人との社会的関係の形成の困難さ、言葉の発達の遅れ、興味や関心が狭く特定のものにこだわることを特徴とする行動の障がいである

自閉症のうち、知的発達が遅れを伴わないものをいう。また、中枢神経系に何らかの要因による機能不全があると推定される。

#### 高次脳機能障がい

交通事故等による頭部外傷、脳血管障がい等による脳の損傷の後遺症として、記憶障がい、注意障がい、遂行機能障がい、社会的行動障がいなどの認知障がいが生じ、これに起因して、日常生活・社会生活への適応が困難となる障がいのこと。

#### 高齢者、障害者等の移動等の円滑化の促進に関する法律（バリアフリー新法）

一定の地区において、不特定多数の人が利用する公共交通機関の旅客施設及び車両、建築物、それらに至る経路を構成する道路等のバリアフリー等の一体的な整備を推進し、障がいのある人等の移動、施設の利用における利便性及び安全性の向上を図ることを目的とする法律。

### <さ行>

#### 災害時要援護者登録制度

大規模な災害が発生した時に、障がいのある人など支援が必要な市民（災害時要援護者）に対して、安否確認や避難誘導などの支援が行えるよう、自治会・自主防災組織等と連携により、地域で支える安心・安全のネットワークづくりを進める吹田市の事業。

#### 社会的入院

医学的には病状が安定しており、入院の必要がなく、在宅での療養が可能であるにもかかわらず、家族等の支援者や住まいがないなど受け入れ体制が整っていないため、入院生活を余儀なくされている状態のこと。

#### 障がい者週間

平成16年（2004年）の障害者基本法の改正により、国民が障がいのある人の福祉についての関心と理解を深めるとともに、障がいのある人が社会、経済、文化その他あらゆる分野の活動に積極的に参加する意欲を高めることを目的として、従来の「障がい者の日」（12月9日）に代わるものとして設定された。「障がい者週間」は毎年12月3日から12月9日の1週間で、この期間を中心に、国、地方公共団体、関係団体等においてさまざまな意識啓発に係る取組を展開する。

#### 障害者の雇用の促進等に関する法律

障がいのある人が、職業生活において能力を発揮する機会が与えられること、職業人として自立するよう努めることを基本理念とし、障がいのある人の雇用と在宅就労の促進について定めた法律。「障害者雇用促進法」とも呼ばれる。この法律において、一定規模以上の事業所の事業主は、障がいのある人を一定の割合以上雇用する義務を負うことが定められている。

たとえば、一般の民間企業のうち、常用労働者数が56人以上の事業所では1.8%、国・地方公共団体では2.1%、都道府県等の教育委員会では2.0%などと定められている。

### ジョブコーチ

障害者の雇用の促進等に関する法律に基づく制度。障害者職業センターと協定書を締結した施設の職員（指定された研修等を修了した者）が、障がいのある人の就労に当たり、出来ることと出来ないことを事業所に伝達するなど、障がいのある人が円滑に就労できるように、職場内外の支援環境を調整しながら、仕事の手順や通勤などの援助を行う人のこと。

### ジョブライフサポーター

大阪府の単独制度。障がい者就業・就労サポート協働機構と協定書を締結した施設の職員（指定された研修等を修了した者）が、企業実習に参加し、体験することで、職場環境を調整しながら、障がいのある人が仕事面、職業生活面で自立するためのあらゆるサポートする人のこと。

### 成年後見制度

知的障がいや精神障がい、認知症などの理由により、判断能力が十分ではなく、自分ひとりで契約行為や財産管理などを行うことが困難な人を法的に支援する制度。

### 総合評価一般競争入札制度

通常の一般競争入札等は、地方自治法により「政令の定めるところにより、契約の目的に応じ、予定価格の制限の範囲内で最高又は最低の価格をもって申込みをした者を契約の相手方とするものとする」と定められています。

ただし、同法には「予定価格の制限の範囲内の価格をもって申込みをした者のうち最低の価格をもって申込みをした者以外の者を契約の相手方とすることができる」とされています。

総合評価一般競争入札制度とは、価格のほかに優れた技術の提供、環境に配慮した取組、障がいのある人の雇用など福祉に配慮した取組など、それぞれの評価項目を得点化し、総合的に評価、判断して契約の相手方の決定を行う入札制度。

## <た行>

### 太陽の広場

放課後に学年の異なった児童と一緒に遊び、子どもたちの自主性や創造性などを育むために、小学校の運動場を活用して地域のボランティアやPTAの協力のもと、子どもたちが安全で安心して活動できる場所のこと

### 短期間試用雇用制度（障がい者トライアル雇用制度）

障がいのある人に関する知識や雇用した経験の浅い事業所が、試用期間（原則3か月）

を定めて障がいのある人を雇用し、雇用に関する知識や理解を深めることで、就労機会の拡大に結びつけることを目的とする事業。

### 注意欠陥多動性障がい（ADHD）

ADHDは「Attention Deficit / Hyperactivity Disorder」の略。注意欠陥多動性障がいとは、年齢あるいは発達に不釣り合いな注意力、衝動性、多動性を特徴とする行動の障がいで、社会的な活動や学業の機能に支障をきたすものである。また、7歳以前に現れ、その状態が継続し、中枢神経系に何らかの要因による機能不全があると推定される。

### 特別支援教育

特別支援教育とは、障がいのある幼児、児童、生徒の自立や社会参加に向けた主体的な取組を支援するという視点に立ち、幼児、児童、生徒一人ひとりの教育的ニーズを把握し、その持てる力を高め、生活や学習上の困難を改善又は克服するため、適切な指導及び必要な支援を行うものです。

平成19年（2007年）から、特別支援教育が学校教育法に位置づけられ、すべての学校において、障がいのある幼児、児童、生徒の支援をさらに充実していくこととなった。

## <な行>

### 日常生活自立支援事業

認知症、知的障がい、精神障がいなどにより判断能力が不十分な方が地域において自立した生活が送れるよう、利用者との契約に基づき、福祉サービスの利用補助、日常的な金銭管理サービス、書類等預かりサービス等のサービスを提供することにより生活を支援する事業。

本市では、吹田市社会福祉協議会が実施している。

### 日中活動の場

障がいのある人の自立、更生を促進し、就労または技能の修得のために必要な機会及び便宜を与えてその自立を支援し、生きがいをつくることを目的とする日中における活動及び訓練の場のこと。

障害者自立支援法では、生活介護、就労移行支援、就労継続支援などのサービスメニューがある。

### ノーマライゼーション

障がいのある人が普通にその人らしい生活が送れるのが通常の社会であり、誰もが分け隔てなく、社会の一員としてお互いを尊重しあい、平和に暮らすことができるのが当たり前前の社会であるという考え方。



## <は行>

### 発達障がい

発達障害者支援法において、発達障がいは「自閉症、アスペルガー症候群その他の広汎性発達障がい、学習障がい、注意欠陥多動性障がい、その他これに類する脳機能障がいであってその症状が通常低年齢において発現するもの」と定義されている。

### バリアフリー

道路や建築物の入り口の段差などの解消や、読みやすい大きな文字・点字での表示など、高齢者、障がいのある人などの社会参加や自立を困難にしている物理的、社会的、制度的なバリアなど、すべての人にとって日常生活の中で存在するあらゆる障がいを除去すること。また、偏見・差別を取り除くことを「心のバリアフリー」という。

### ピアカウンセラー

同じ立場・境遇にある障がいのある人が、その当事者同士でしか理解し合えないことを語り、互いに支持し合えるカウンセリングをいう。

### 福祉オンブズパーソン制度

市が個人を対象に行った福祉保健サービスについて、「受けられるはずだったのに受けられなかった」などといった苦情の申し立てについて、福祉などの専門家である福祉保健サービス苦情調整委員（福祉オンブズパーソン）が公正・中立な立場で、申し立て人に代わって、苦情の内容を調査・審査し、必要な場合には市に対して制度の改善や意見などを求める制度。

### 福祉型借上公共賃貸住宅

公営住宅法に基づき、住宅に困窮している障がいのある人の世帯及び高齢者世帯に供給することを目的に、公共団体が民間賃貸住宅を借り上げ、これらの人たちに住宅を供給する事業。

### ホームヘルパー

日常生活に援助を必要とする障がいのある人や高齢者のいる家庭に訪問し、家事や介護等の援助を行う人。

## <ま行>

### マンパワー

社会福祉援助などの活動を支える人的資源（労働力）をいう。

## <や行>

### ユニバーサルデザイン

文化・言語・国籍の違い、老若男女といった差異、障がい・能力の如何を問わずに利用することができる施設・製品・情報の設計（デザイン）をいう。「できるだけ多くの人利用可能であるようなデザインにすること」が基本コンセプトであり、デザイン対象を障がいのある人に限定していない点が一般に言われる「バリアフリー」とは異なる。

## <ら行>

### ライフステージ

人の一生の成長・成熟の度合いに応じた移り変わりのことで、「乳児期」「幼児期」「児童期」「思春期」「成人期」「壮年期」「老年期」などに分けたそれぞれの段階をいう。

### リハビリテーション

障がいのある人の身体的、精神的、社会的な適応能力の回復を図ることだけでなく、年齢や生活段階において、自らの能力を最大限に生かしながら、人間らしく生きるすべての権利の回復をめざすという考え方。

### 療育システム

障がいのある乳幼児へ、一定水準の療育サービスを安定的に供給するため、乳幼児期から青年期まで継続した療育や障がい別でなく、医療・保健・訓練・保育・教育など関係機関が連携し、障がいの多様なニーズに応じた療育を推進するシステム。



---

## 第3期 吹田市障がい者計画

平成23年(2011年)3月

発行 吹田市福祉保健部障がい者くらし支援室

〒564-8550 吹田市泉町1丁目3番40号

電話 06-6384-1231(代表)

FAX 06-6385-1031

ホームページ <http://www.city.suita.osaka.jp/>

Eメールアドレス [shofuku@city.suita.osaka.jp](mailto:shofuku@city.suita.osaka.jp)

---